ペルソナ５＋Ｒの軌跡

犬大好き

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気が向いたときに書きまくるんで更新は亀を超える亀更新

最後の方はネタバレしてしまうと思いますので、先にクリアしてからお読み下さい

目次

プロローグ
プロローグ ―― 1
プロローグ2 ―― 4
鴨志田編
第一話 ―― 7
第二話 ―― 10
第三話 ―― 13
第四話 ―― 20
第五話 ―― 24
第六話 ―― 27
第七話 ―― 32
第八話 ―― 36
第九話 ―― 39
第十話 ―― 43
第十一話 ―― 47
第十二話 ―― 51
第十三話 ―― 54
第十四話 ―― 59
第十五話 ―― 68
第十六話 ―― 75
第十七話 ―― 79
第十八話 ―― 83
第十九話 ―― 87
双葉編

第二十話 90
第二十一話 93
第二十二話 96
第二十三話 102
第二十四話 107
第二十五話 113
班目編
第二十六話 123
第二十七話 127
第二十八話 135
第二十九話 140
第三十話 168
第三十一話 186

プロローグ
プロローグ

「二度目の人生」

俺はどこにでもいる高校生。

サッカー部に入っててずば抜けて強いってわけでもなく、運動神経がものすごくいいってわけでもない。

勉強がものすごくできるって訳でもないし、全くできないって訳でもない。

目の前に神様来るんじゃね？とも思ったが誰もいない。「あ、やっぱ死ぬんだ」と思ったね。

そしたら何か光が見えるなぁと、その光りの方に進んで行ったら体が小さくなって誰かに抱えられてる様な感じになってお母さんみたいな人に言われたんだ。ごくごく平凡。名前は中村優斗って言うんだが、ひょんなことで死んでしまった

お母さん？「あなたは優斗、中村優斗」

同じ名前ねよくある苗字によくある名前、異世界転生というより輪廻転生のほうが近いのかも。がっかりしたような、死ななくてうれしいような。まあいいや生きてるんだからこれからのことを考えないと。

それからは順調だった。平凡だと思わせるために。これが普通だといわんばかりに平凡に過ごした。学校では常に７０～８０点に抑え、体育では体の問題があったが、体もあまり前世と筋肉の構造などが変わっていなかったらしく同じぐらいには動けた。サッカーはやりたかったのでサッカー部に入った

普通に過ごし言葉には気を付ける。今まで大きなミスはしていない。学校は暇つぶしの場所と化した。あの日までは

中学二年生になり部活が終わり帰ると家が火事になっていた。何が起こったのか全く分からなかった。野次馬だらけの中に見覚えのあるやつがいた。

優斗『スキンヘッドにサングラスの・・・獅童!?ペルソナ5の?ならどうして獅童なんかがこんなところに?』
獅童?「ういぃぃヒック・・・タバコ消せてなかったのかぁ後ろが騒がしいと思ったらタバコ捨てたところの家が燃えてらぁ」
優斗『獅童なのか?本当にしかも今タバコを捨てたって・・・それが本当なら家が燃えた理由は獅童ということになる・・・』
俺の手が少しずつ怒りで握り拳を作って行く
優斗「このくそ野郎がぁぁぁぁ!!!」
獅童「グフゥゥ」
俺は感情を抑えることができなかった
野次馬「なんだ!?」
獅童「なんだ!このガキは!」
優斗「お前がぁ俺の家を燃やしたんだろうがぁぁ!!」
獅童「おいお前たち!早く止めないか!このガキがいきなり殴ってきたんだ!」
野次馬「わ、わかった」
優斗「離せ!」
獅童「このガキ!一発殴ってやる!」
野次馬「やめないか!相手は子供だぞ!」
獅童「チッ!俺を殴ったことを後悔させてやる!」
警察官「お前たち!一体何をしている!」
優斗「こいつが!俺の家を!」
獅童「このガキがいきなり殴ってきたんだ」
警察官「とりあえず事情を聴くから署まで来てください」
優斗「・・・行けばいいのか?」
獅童「くそ、仕方ないか」
警察署
警察官A「つまり君は獅童さんに家にタバコを捨てられてその火で家が燃えてしまった。そしてそれに怒り獅童さんを殴った。これであってる?」
優斗「間違いありません」

警察官Ａ「落ち着いた？」
優斗「はい、すみません・・・」
コンコン
警察官Ａ「どうぞ」
警察官Ｂ「失礼します」
警察官Ａ「どうした？」
警察官Ｂ「今病院から連絡が来ました。優斗君の両親ですが命に別状はないですが意識は戻っていないとのことです。」
優斗「本当ですか!?」
警察官Ｂ「ああ」
優斗「よかった・・・目が覚ました時まで待たないとな・・・」
優斗に少し笑みができる
警察官Ｂ「それでは僕はもどります」
警察官Ａ「ああ、わかった」
優斗「あの、獅童・・・・さんは何か言ってましたか」
警察官Ａ「獅童さんは慰謝料として百万よこせといってたよ」
優斗「俺そんな金持ってませんよ!?」
警察官Ａ「わかってる。そのあと説得して一万でいいと言っていた」
優斗「・・・それぐらいなら多分出せます」
警察官Ａ「多分獅童さんは金目的じゃなく前科作るためにやってるんだと思う。相当怒ってたし、あの人そういう性格だから・・・」
優斗「そう・・・ですか・・・」
警察官Ａ「とりあえず今日泊まるところは手配しているから連れて行く」
優斗「わかりました」
警察官Ａ「これからはいろんな大変なことがあると思う気を落とさずにな」
優斗「わかってます」

プロローグ2

「謎の声」
察官A「ここが家が戻るまでの君たち家族の家だ」
中は普通の家の間取りで玄関に入ったらまず左にトイレ、そして右に靴置き場。目の前に扉があり、中には右にリビング、右奥に台所、左側には階段がある
優斗「わかりました」
警察官A「何かあったら警察を頼ってくれて構わない」
優斗「はい、じゃあさようなら」
警察官は帰って行った。
優斗「はぁ〜〜〜、もう疲れたから寝よ。家具は一通りあるみたいだし」
???『おい』
優斗「は？誰だよ」
???『お前は獅童を殺したいって思ってるんじゃないか？』
優斗「全く」
???『嘘何か言わなくていい。お前は俺、俺はお前だ』
優斗「じゃあなんだ？俺は二重人格にでもなったてのかよ」
???『多分そうだろうな』
優斗「嘘だろ？」
???『いや大マジ』
優斗「じゃあ何で俺に話しかけれるんだ？」
???『わからん』
優斗「じゃあいいわ。とにかく獅童を殺したいとは思わねえ。めんどいだけだ」
???『そうかよ、まあ俺はずっといるから。あと今お前が俺に話しかけてるが、端から見たら独り言を言ってるだけだから気をつけろよ』
優斗「ちょっといいか？」
???『なんだよ』
優斗「お前名前ないと不便だろ？俺の優斗から斗をとって漢字変え

て悠ってどうだ？」
悠『悪くない、それでいい』
優斗「じゃあおやすみ」
・・・寝たか？
優斗「さて、どうせこの世界も１２月になれば壊れる・・なら、怪盗団に入った方が賢明か？いや、命を取るなら無関係でいた方がいいか？・・・壊れるぐらいなら死んだ方がマシか」
あれから三年？ぐらいの月日がたった。両親は後遺症などはなく元気に帰ってきた。家は火災保険に入っていたのでどうにかなった。獅童がいた時点でうすうす感づいていたが。ここはやっぱりペルソナ５の世界らしい。鴨志田もいたし班目もいる、もちろん秀尽学園もあった
悠のことだがとりあえずあれからずっと俺の中にいる。そして体の主導権は俺にあるらしい。悠も主導権を取ろうともしてないので仲良くしている
悠には俺が別の世界からきたと説明した。そしたら悠が「なんだそりゃ。なら俺が話せるのもおかしいけどお前もおかしいやん。これから面白くなりそうやから、ここにいさせてもらうわ」って言ってた。・・・何でなまってんだ？
あとこの世界が元はゲームということも言った。だからこれから何があるかわかるとも言った。そしたら悠は「え、お前チーターかよ」って言われた。なんか誰にも言えなかったことが言えてすっきりした。あと、少し前に主人公がテレビに出てた。名前出さないからわからんけど、写真が悪意しかないわ、モザイク薄くてわかる。今日から秀尽学園の２年生だ。鴨志田うざいけど頑張る
秀尽学園
クラス票を見ると杏と三島が同じクラスだった。とりあえず主人公が来るまで待たないといけないから、それまでは勉強しながら待とう。
現在おっきいほうのトイレ中
悠『なあ』

優斗「どうした」
悠『お前が言ってたことってさまだなのか？もう三年たつぞ』
優斗「あと半月もないよ」
悠『お？マジで？待った甲斐があるってもんだ』
優斗「正直俺も楽しみ」
悠『そういやさ、今更だけどペルソナ？だっけ、俺も使えるんかな？』
優斗「わからん。だけど人格一つに一ペルソナみたいなもんだし、俺とお前でペルソナを二体使えたりしてな」
悠『めっちゃおもろそうやん』
優斗「とりあえず、あと少し我慢しろ」

鴨志田編

第一話

「この世界の主人公」

ジリリリリリリリリ

目覚まし時計が鳴った

優斗「朝か」

母「起きたんでしょ！早く降りてきなさい、朝ご飯出来てるわよ！」

優斗「はーい！わかったよ！」

朝食後

優斗「行ってきまーす」

母「いってらっしゃい」

学校に行くために駅を経由していく。俺が獅童と会ってから覚えてるペルソナ５のことをノートに書いておいた。ノートによると雨の中主人公は初登校している。今日は雨だ。ということは、今日会う可能性が高いということ。そんなことを考えていたら駅につき、学校までの道に雨宿りをしてるやつがいた。それはもちろん主人公君です

優斗「・・・お前傘無えのか？」

主人公「・・・そうですが、いきなりなんですか？」

優斗「いや、見たことないやつがいるなぁと思って」

主人公「そうですか・・・いかないんですか？」

優斗「いやまだ時間あるからなぁ、そういや名前は？俺は中村優斗よろしく」

蓮「雨宮蓮っていう。よろしく」

優斗「ちなみに何年生？」

蓮「二年」

話していたら金髪碧眼で髪をツインテールに纏めた女子学生。杏が来た

杏「えっと優斗だよね？傘あるのに何してんの？」

優斗「転校生の二年の蓮くんと話してた」
杏「転校生？同じクラスかもね」
そこに鴨志田の白い車が来た
鴨志田「おはよ～学校まで乗ってくか～？」
杏「・・・ありがとうございます」
鴨志田「そっちの君たちはどうする？」
優斗「俺は大丈夫です」
蓮「俺も大丈夫です」
鴨志田「・・・そっちの眼鏡くんはよく見たら前科持ちくんじゃないか。昨日校長先生から聞いたとおもうが・・・くれぐれも問題を起こすんじゃないぞ」
蓮「わかってます」
鴨志田「遅刻すんなよ」
？「はぁ・・・はぁ・・・」
優斗「ん？」
すると、来た道から金髪で短髪の髪をしたチンピラ風の男子学生が走ってきた。竜司だ
竜司「この変態教師め」
俺「おお竜司」
竜司「ああ、優斗。おはよ」
優斗「おはようさん、なんだよお前変態教師って・・・バレたら面倒だぞ」
竜司「チクんじゃねえぞ。ってそっちのやつは誰だ？」
優斗「転校生で二年の雨宮蓮君」
竜司「タメか、まぁよろしくな」
蓮「よろしく」
優斗「どうせだったらみんなでいかね？いつの間にか雨やんでるし」
竜司「だったらこっちに近道あるんだ」
優斗「行こうぜ蓮」
蓮「ＯＫだ」

優斗「お前キャラブレブレじゃね？」
近道を通るとそこには秀尽と書かれた看板のある城があった
竜司「なんじゃこりゃーーーーー」
優斗「入ろうぜ」
竜司「お前好奇心旺盛すぎやしねえか!?」
中に入った。中はエントランス風になっていて、前に二股になった階段、一階と二階の左右に扉がある。そして階段の踊り場には、鴨志田が鎧を着て右手で剣を空に突き上げた悪趣味な絵が飾られていた
竜司「なんかおかしいな」
優斗「なんかどころじゃないだろ」
竜司「そうだけどよ」
話をしていたら鎧を着た何かが現れた
竜司「なんだこいつ」
蓮「とりあえずヤバそうだな」
竜司「逃げるぞ！」
優斗「ダメだ！もう囲まれてる」
竜司「それならごり押しで・・・」
優斗「素手で相手になれそうにない！」
竜司「じゃあどうすればいいんだよ！」
優斗「何もしないで従ったほうがいい」
竜司「チッ」
俺たちはよろいを着た化け物に連れていかれた

第二話

「世紀の怪盗」
竜司「ぐぇ」
優斗「ぐふぅ」
蓮「ぐほぉ」
俺たちは牢屋に蹴り入れられた
竜司「やりすぎだろ！」
優斗「めんどくせぇ・・・」
蓮「何だ？この状況」
鎧を着た化け物、略して鎧化け
鎧化け「喜べ囚人」
優斗「俺たちは秀尽だけど囚人じゃないぞ」
鎧化け「さわぐな！罪状は不法侵入だ。よって死刑とする」
優斗「死刑!?」
蓮「イカれてるな・・・」
奥から一人近付いてくる
シャドウ鴨「俺様の城で勝手は許されない」
竜司「お前！鴨志田か!?」
シャドウ鴨「どんなコソ泥かと思ったら坂本、貴様か。また逆らうのか？貴様、少しも反省してないな？え？一人じゃ無理だからみんな助けてぇー、てか？」
竜司「お前教師だろうが！こんなことしていいのかよ！」
シャドウ鴨「俺は教師などではない。この城の王だ」
竜司「余計意味わかんねぇ」
シャドウ鴨「雑談は終わりだ！こいつらを出せ！処刑だ！」
鎧化け三体が入ってきた
竜司「クソ！」
悠『ずっと聞いてたらなにしてんだよ。これは俺に任せてくれねぇか？』
優斗「あんまり体こわすんじゃねえぞ危なかったらすぐひっこめる

からな！」
悠『ペルソナなんかねぇが時間稼ぎぐらいさせてもらうぜ！』
俺優斗「交代だ」
目をいったん閉じ、もう一度目を開けると優斗の目が青から赤に変わった
悠「やっと動ける」
竜司「一体どうしたんだ!?優斗!?」
蓮「様子がおかしい！」
優斗『変な感覚だけど任せたぞ！』
悠「任せろ！」
悠は思いっきり踏み込み鎧化けを横からタックルした
悠「オラァ」
シャドウ鴨「そいつ何かおかしいぞ、取り押さえろ！」
鎧化け「は！」
悠「くそが、もう終わりかよ」
優斗『早くね!?』
悠「思ったより頑丈なんだよ」
優斗『もうだめなのか？』
悠「全然動けねぇ」
優斗『お前このままだと出オチだぞ？』
悠「し、仕方ねえだろ！」
俺『・・・わかった、交代だ！』
優斗の目の色が赤から青に戻った
悠『すまねぇ』
優斗「大丈夫だ」
シャドウ鴨「なんだったんだ？」
優斗「さあね」
シャドウ鴨「二重人格ってやつか？」
優斗「あらまぁ勘が冴えてらっしゃる」
蓮「だが俺の知ってる二重人格とは違う気がする」
優斗「俺のはちょっと特殊なんだよ」

悠『なめんなよ』
優斗「なめんなよって言ってるぞ」
竜司「なんだそりゃ」
蓮「・・・！うぐ！うがぁぁぁぁ」
蓮が突然苦しみだし、皆が見ると顔に仮面が現れていた。顔に現れた仮面をはがすとそこにはアルセーヌがいた！
アルセーヌ「我が名は、逢魔の略奪者「アルセーヌ」！我はお前に宿る反逆の魂お前が望むなら、難局を打ち破る力を与えてやってもいい」
蓮「死んでたまるか」
アルセーヌ「フン、良かろう」
シャドウ鴨「先手必勝だ傭兵たちやってしまえ！」
蓮はいとも簡単に倒してしまった
シャドウ鴨「おのれ！」
竜司「オラァ」
シャドウ鴨「ぐふぅ」
優斗「早く出ろ！」
牢屋から出た
優斗「鍵を閉めるぞ！」
竜司「鍵!?鍵なんてどこに・・・」
優斗「さっきくすねておいた」
竜司「お前らなんなんだよ、いったい、おかしくなるし変なのだすし・・・」
優斗「今言う時間はねぇ、とりあえず逃げるぞ」

第三話

「炎の悪魔」

優斗「とりあえず逃げるぞ」

シャドウ鴨「貴様ら！こんなことしてただで済むと思うなよ！」

優斗「じゃあなバ鴨志田」

シャドウ鴨「何をしている！傭兵！追いかけろ！」

優斗「あの鎧の化け物、傭兵だったんだ」

蓮「余裕あるなら本気で走れ」

少し奥に行くと、右手側に橋があるが上がりきっており渡れなく。左側は檻ばかりで道はない。正面は行き止まりという、もはや下を泳ぐしか・・という状況だった。まあ泳いだら溺死だな

？「おい！」

その声がしたのは一番奥にある檻だった

竜司「ん？」

？「止まれ！」

竜司「なんだ？この猫？」

そう檻に入っていたのは、頭が大きく後ろ足だけで立っている猫らしき何かだった

モルガナ「猫じゃない！俺はモルガナだ！」

蓮「止めたってことは何かあるんだろ？」

モルガナ「ここから出してくれよ、お前たちは城の兵士じゃないだろ？」

優斗「鍵は？」

モルガナ「そこにある」

優斗「ザルすぎんだろ・・・」

モルガナ「ここから出たいんだろ？出してやるから、この牢屋から出してくれ」

蓮「・・・出そう、逃げる手がかりだ」

竜司「はぁ・・・仕方ねぇか」

モルガナを外に出した

モルガナ「いやーシャバの空気はうまいぜ」
竜司「どうするんだ？」
皆が間に上がっている橋の前の鴨志田像の顎をさげた。すると橋が下がって渡れるようになった
モルガナ「まず・・ってもうやってるし！」
竜司「何でわかったんだ？」
優斗「なんとなく」
蓮「こっちでいいんだよな？モルガナ」
モルガナ「あ・・ああ、そっちだ」
蓮「行こう」
その頃の担任の川上先生
川上「・・・もう四限じゃない。一体何してるのかしらあの子たち」
戻って優斗達
衛兵「・・・！お前たちが侵入者か！」
竜司「う、うわぁ!!やべぇ、きたぁー!!」
モルガナ「ちっ・・素人め！じっとしてろ！来い！ゾロ！」
竜司「お前もそれ出んのかよ！」
蓮「俺もやる！アルセーヌ」
悠『なあ』
優斗「どうした？」
悠『もう一回やらせてくれないか？』
優斗「さっき出オチしたばっかだってのに、よくそんなことが言えるな」
悠『さっきみたいなことにはならねぇ』
優斗「よし！わかった！ペルソナでも出してみろ！」
悠「ペルソナでも何でも出してやるぜ！」
竜司「優斗!?また変わった!?」
モルガナ「おい！どういうことだ!?」
優斗『今回は任せたぞ悠！』
悠「おい、ペルソナぁ。居るんだったら力かせよ。あんなクズの手下なんかによぉ。逃げるのは嫌なんだよ」

ペルソナ?「フフフ、そうか、俺の力が欲しいのか?」
悠「ああ、そうだ。こんな奴らぶっ飛ばして俺たちはもっと先へ行く!」
ペルソナ?「ククク、いいだろう!ならば突き進む信念と共に俺の名前を叫べ!」
悠「イフリートオオオオ!」
その時、悠は現れた赤のメッシュが入った白い仮面をはぎ取りペルソナが発現した
モルガナ「なにいいいいい!?ペルソナ!?」
悠「これで俺も戦えるぞ」
蓮「行けるな?」
悠「もちろんだ」
優斗『相手はジャックランタンってやつとインキュバスだ』
モルガナ「いいか?戦いで必要なのは相手の弱点を突くことだ!こんな風に!ゾロ、ガルだ!」
モルガナはジャックランタンの弱点を突き、コカした
モルガナ「敵の弱点を突いてコカす、そしてそのすきにもう一度動く!基本中の基本だ!」
モルガナはジャックランタンにとどめを刺した
蓮「アルセーヌ!エイハだ!」
インキュバスにエイハを当てた。だが、弱点ではなかったようだ
蓮「弱点じゃなかったか」
悠「いや、まかせろ!イフリート!突撃だ!」
インキュバスを倒し戦いに勝利した
蓮「ん?アルセーヌがスラッシュを覚えたみたいだ」
悠「俺はとりあえず優斗と変わる」
目が赤から黒に戻った
優斗「終わったか」
竜司「本当になんなんだ!?お前ら!?」
蓮「とりあえずここから出ないと」
モルガナ「ああ、先を急ぐぞ」

竜司「・・・わかったよ」
先に進んだ
竜司「？ちょっとまて」
蓮「どうした」
竜司「この牢屋に入れられているやつどっかで見たんだよ、くそパニクって頭が回らねぇ」
モルガナ「ほかのやつの心配してる場合かよ、それにそいつは」
兵士「見つけたぞ！」
モルガナ「言わんこっちゃねぇ」
悠『変われ！』
優斗「わかってる」
蓮「迎え撃とう」
モルガナ「お前がぶれない奴でよかったよ」
悠「俺もやるぞ」
モルガナ「あっちもやる気みてぇだ」
優斗『相手はピクシーが二体だ　お前エイハ使えるんだろ？こいつは怨念が弱点だ』
悠「蓮！エイハを使え！こいつらの弱点だ！」
蓮「ホントか？」
悠「信じろ」
蓮「・・わかった」
悠「片方は任せろ」
蓮「エイハ！」
ピクシーを一体倒した
悠「俺もエイハ！」
二体のピクシーを倒した
蓮「どうして弱点をしってた」
悠「ここから出てからでいいか？今は出るのが優先だ」
蓮「わかった」
モルガナ「新手が来る前に逃げるぞ」
竜司「もうわけわかんねぇ」

階段を駆け上がる
モルガナ「ここが正面ホールだここを通り過ぎたら出口は近いぞ」
優斗「逃げるんだよ～スモーキー」
竜司「何言ってんだ？てかいつの間に戻ったんだよ」
優斗「わからんでよろしい」
モルガナ「着いたぞ！」
竜司「やっとか！助かった！」
竜司が右奥の扉を開けようとするが
竜司「ん？あかねぇ！テメェだましやがたのか!?」
優斗「いやこっちだろ。ホールはこっち方向に扉あったし」
モルガナ「ああ、そっちだ」
竜司「あ、おい！まてよ！」
蓮「行こう」
中に入った
竜司「ここからどうやって出んだ？」
モルガナ「これだから素人は・・・」
蓮「通気口か」
モルガナ「その通り、お前やっぱり筋がいいな。外までしっかり通じてるぜ」
優斗「もう網は外しておいた」
モルガナ「早くね!?」
優斗「こんなとこもう出るぞ、モルガナも出るだろ？」
モルガナ「いや、お前たちだけで帰ってくれ、オレはやり残したことがあるんだ」
蓮「捕まるなよ」
モルガナ「お前らこそな」
優斗「俺ちょっとモルガナに聞きたいことあるから先行っててくれないか？てか行け」
竜司「すぐ出て来いよ３０秒は待ってやる」
蓮達は外に出た
モルガナ「聞きたいことってなんだ？」

優斗「俺がさ、この世界のやつじゃないって言ったらどうする」
モルガナ「言ってる意味が分かんねぇんだが」
優斗「俺はこういうところをパレスっていうのもメメントスも知ってるさっきのシャドウの弱点教えたのも俺だ」
モルガナ「・・・じゃあなんだ？何が言いたい」
優斗「割と単純だけどこの中で一番勘が良いのはお前だと思っている。でも勘違いなんかされても困る。これだけ言っておく俺は別に敵なんかじゃねからな」
モルガナ「言いたいことは分かった、だが俺に言ってよかったのか？」
優斗「いや、どっちにしろそのうちバレる、おれは面倒なのが嫌いなだけだ。じゃあな」
俺も外に出た
モルガナ「あいつら・・・使えそうだな、だが優斗は要注意だな」
パレスから出た。そこは竜司達と路地裏に入ったところの通りだった
竜司「俺らどうなった？」
異世界ナビ「現実世界に帰還しました。お疲れさまでした」
優斗「出れたっぽいな」
竜司「城とか、鴨志田とか、妙な猫とかどうなってんだよ」
蓮「優斗なんであの時弱点がわかったんだ？」
優斗「まだ言えない」
蓮「どうしてだ？」
優斗「後ろ見てみ」
蓮「？・・・!?」
強気な巡査「ここで、一体何をしている？」
後ろには二人の警官がいた
蓮「いや、その・・」
強気な巡査「さぼりか？」
竜司「ちげーよ」
優斗「面倒だなもう行こう」

強気な巡査「どこに行くつもりだ？」
優斗「学校だよ学校」
強気な巡査「学校には、今何をしてたか言ってもらわなければ連絡せざるを得ないぞ」
優斗「どっちにしろするんでしょ？それに言っても信じて何てくれないだろうし」
弱気な巡査「だったら今すぐ行くといい」
優斗「わかってますって、行こう」
蓮「良かったのか？」
優斗「さっきも言っただろ？あいつらは言っても無駄だどっちにしろ連絡されるし、だったら学校に行ったほうがいい」
竜司「だったら急いだほうがよくね？」
優斗「手遅れだよ」
蓮「一応走ろう」

第四話

「ジョジョの名言」
学校についた
竜司「マジかよ」
優斗「普通だな」
蓮「とりあえず入ろう」
指導教員「今頃登校か？もう昼だぞ、三人そろって」
優斗「すいません」
指導教員「補導の連絡、あったぞ」
優斗「してもわからないし、何かヤッてるとか思われるの嫌だし」
指導教員「竜司、お前が一人じゃないのは、珍しいな。まあいい履き替えて指導室に来い」
鴨志田「ん？どうしたんですか？」
竜司「鴨志田!?」
鴨志田「呑気だな、坂本。陸上やってた時とは大違いだ」
竜司「うるせぇ！テメェが」
指導教員「鴨志田先生になんて口きいてんだ!?退学になりたいのか!?」
鴨志田「私も配慮が足らなかったので、ここは両成敗ということで」
指導教員「え？いや、鴨志田先生がそうおっしゃるなら」
優斗「竜司もここでキレるのは得策じゃない」
蓮「面倒なことは避けよう」
優斗「逆に鴨志田を利用して今は入ろう」
竜司「わかったよ」
鴨志田「とりあえず川上先生が君（優斗）と君（蓮）を待ってると思うから行きなさい」
蓮「行こう」
優斗「ああ（・・・こいつ職員室知らねえよな？）」
職員室へ
川上「あなたたちねぇ、何してたのよ」

優斗「すいません」
川上「まあいいわ、あなたは遅刻の報告よねもう行っていいわよ」
優斗「はい」
俺は職員室から出て教室に向かった
優斗「さてと、どうしようか」
杏「一体何してたの？あんた」
優斗「何の話？」
杏「とぼけないで」
優斗「わかった、俺は何をしていたのか全部話すぞ」
杏「ええ」
優斗「ありのまま午前中にあったことを話すぜ。杏と別れたとき俺は転校生と一緒に竜司と近道を通ったんだ。そして俺たちは牢屋に入れられ（中略）そして俺たちは逃げてここに帰ってきた。何を言っているのかわからねぇと思うが、俺も何が起こっているのか分からなかった。頭がどうにかなりそうだった。催眠術みたいなチャチなもんじゃねぇ。もっとおかしなモノの片鱗を味わったぜ」
杏「へ、へぇ～」
優斗「この話に嘘は１％も入っていません。でも０．９以下はどうかね・・・」
杏「あんた保健室いくか、病院行くか、家帰ったほうがいいんじゃない？」
優斗「もうチャイムなるぞ」
杏「う、うん（手遅れか・・・）」
杏は席に着いた。そしてチャイムがなり、川上先生と蓮が入ってきた
「まさかうわさの？」
「いきなり大遅刻とかやっぱヤバいんじゃ」
「普通に見えるけど？」
「目ぇ合わすと殴られるかも

よ」
川上「静かに。えっと転入生を紹介します雨宮　蓮君。今日は体調不良ということで午後から出席してもらいました」
蓮「よろしく」
川上「えっと、席は、あそこ（杏の後ろ俺の隣）ね。悪いけど、近くの人、今日は、教科書見せてあげて」
優斗「よう」
蓮「同じクラスだったのか」
優斗「教科書は見せてやるよ。ほかのやつには頼みにくいと思うし」
蓮「・・・すまない」
優斗「別にいいって、しかもあんなところから逃げたばかりだぞ。この中で一番信頼あるだろ？」
クラスのみんな「あいつもそっち系なの？」「あんな奴と知り合いってことはアイツもやばいんじゃね」
蓮「ホントごめん」
優斗「・・・実は俺も前科あるんだよ」
蓮「え!?」
優斗「おれはあんまり大ごとにならなかったからみんな知らないけど」
川上「あんたたち遅刻組はなんでそんな元気なのかしら」
優斗「すいません」
川上「そういえば来週は球技大会があるから頑張ってね」
今日は終わり
優斗「蓮帰ろうぜ」
蓮「う!?」
優斗「どうした!?」
蓮「いや大丈夫だ。少し目眩がしただけだ」
優斗「そうか」
竜司「おい」
優斗「ん？ああ、竜司か」

竜司「すまん。お前ら、ちょっと話したいことがあるんだ。屋上まで来てくれ、先に行っとくから」
竜司は屋上上がって行った
優斗「行けるか？」
蓮「問題ない」
屋上に来た
竜司「きたな。川上になにか言われたんだろ？」
蓮「あまり仲良くするなと」
竜司「だろうな。そういやお前、前歴あるんだってな。どうりで肝がふてぇわけだ」
優斗「俺も前科あるんだけど」
竜司「お前もかよ、初めて聞いたわ」
蓮「忘れていたが、優斗」
優斗「なんだ？」
蓮「どうしておまえは、あの敵の弱点を知っていたんだ？それにどこにどのギミックが、あるかをわかっているようにお前はいつも動いている。お前は一体何なんだ？」

第五話

「優斗の過去」

優斗「聞かれなかったらそのまま帰ろうと思ってたんだけど」

竜司「は？どういうことだ？」

蓮「モルガナがなにをすればいいか言う前にやったり牢屋の中でも時間稼ぎのようなこともしていた。ハッキリ言うと何をすればいいかわかっているというよりわかりすぎているように見える」

優斗「じゃあ真面目に言うけど普通なら信じないぞ」

竜司「あれ見た後じゃ何言われても驚かねぇよ」

蓮「言ってくれ」

優斗「俺はな、この世界の人間じゃねぇんだ元々」

竜司「どういうことだ？あの猫みたいなもんか？」

優斗「ライトノベルって知ってるか？」

蓮「見たことはないがな」

優斗「あれでよくある。異世界転生ってやつだ」

竜司「は？」

優斗「俺がいた世界ではこの世界はゲームだった」

蓮「だから分かったと。それにしても覚えすぎてはしないか？」

優斗「覚えてるもんは覚えてるんだよ」

竜司「それじゃあ、悠だよな？あいつは何なんだ」

優斗「変わるから聞いてくれ」

悠「よう」

蓮「お前は悠だよな」

悠「そうだ」

竜司「優斗の言ってたことは本当か？」

悠「本当だ」

蓮「お前と優斗は全く別なのか？」

悠「ああ。てかもういうことないから終わりでよくね」

蓮「そうだな」

竜司「じゃあ今日はとりあえず帰るか」

蓮「そうだな」
優斗「蓮は四軒茶屋駅だろ？俺家近いから一緒に帰ろうぜ
蓮「また明日なえっと」
竜司「そういや自己紹介してなかったか、俺は坂本竜司だ」
蓮「おれは雨宮　蓮だ」
竜司「また明日な」
竜司は帰って行った
優斗「蓮、帰ろう」
蓮「ああ」
俺たちも帰って行った
悠『明日は朝迎え行こうぜ』
優斗「ああ」
お母さん「お帰り～」
優斗「母さん」
お母さん「何？」
優斗「俺がさもし前科あるやつといたらどう思う？」
お母さん「あなたが一緒にいるっていうことはその人が悪い人じゃないと思ってるんでしょ。どうも思わないわ」
優斗「そうか、分かったよ母さん」
俺は一日を終えた
優斗「行ってきまーす」
お母さん「は～い、いってらっしゃ～い。あ、傘持ってる～？」
優斗「持ってるよ。いってきま～す」
悠『蓮のとこ行くんだろ？』
優斗「行くよ」
ルブランについた。蓮を呼ぼうと大口を開けて叫ぼうとすると、入り口から出てきた
蓮「あ」
優斗「おはよ」
蓮「ちょっと待って」
蓮は入り口の札を「ＣＬＯＳＥＤ」から「ＯＰＥＮ」にした

蓮「行こうか」
優斗「俺がいることに関しては？」
蓮「一緒にサボろうとか？」
優斗「そんなわけあるか！」
惣治郎「なんだ!?出ていきなり騒ぎやがっｔ・・だれだ？」
蓮「友達？」
惣治郎「何で疑問形なんだ？」
優斗「友達ですよ」
惣治郎「それは上っ面だけじゃねぇよな？」
優斗「何当たり前なこと言ってるんですか？」
惣治郎「こいつが前科持ちってのも知ってんだろ？」
優斗「そうですよ」
惣治郎「なら大丈夫だな。こいつのこと頼むぞ」
蓮「行ってきます」
駅に着いた
優斗「今、お前が俺に対して何を考えているかは、わからねぇ。だが俺はお前たちの味方だ。俺は少し前の廃人化の犯人も知っている。」
蓮「ならどうして何もしない？」
優斗「勝てねぇからだ。経験の差がありすぎるから、今は手を出さないというか出せない」
蓮「そうなのか」
優斗「というか俺がいる時点でおかしいのにこれ以上捻じ曲げられん」
蓮「まあ、仕方ないか」
優斗「俺は今日もう一回あそこに行くつもりだぞ、少なくとも竜司は」
蓮「その時は俺も行く」
優斗「どっちにしろ放課後だ」
蓮「それまでは普通に、だよな？」
優斗「そうだ」

第六話

「骸骨覚醒」

午前

牛丸「私は公民の牛丸だ。今年一年、お前らに社会ルールを教える」

優斗「あの先生は一番気を付けたほうがいい理由は」

牛丸「初授業でいきなりおしゃべりか」

こっちを見ながら喋る牛丸

優斗「こういうこと」

牛丸「ならそっちの、あ～中村とか言ったか?この問題を解いてみろ」

ギリシアの哲学者プラトンは人の魂を三つに分類した

人の魂は意思と欲望と?

優斗「知性です」

牛丸「正解だ。なんだ知っていたのか。次からは喋っていたらチョークが飛んでくると思え」

蓮「すまない」

優斗「これくらい大丈夫だ」

授業が終わり、放課後

鴨志田「よう、高巻じゃないか車に乗ってくか?近頃物騒だしな」

杏「いえ、今日はバイトで撮影が・・夏の特集号で、外せなくて・・」

鴨志田「おいおい・・モデル業もいいが、ほどほどにな。体調が悪いと言ってたじゃないか。盲腸の疑いだっけ」

杏「忙しくて、ちゃんと病院に行けてなくて。ご心配かけて、すみません。」

鴨志田「親友は練習ばかりで、寂しいだろう?悪いと思ってさっそたんだが。ああそうそう、例の転校生、気を付けたほうがいいぞ。前歴があるからな。お前にもしものことがあったら」

杏「ありがとう・・・ございます」

鴨志田「チっ」

優斗「あのバ鴨志田は避けたほうがいいな」

校門
竜司「よう」
優斗「そんなに気になるのかあの城が」
竜司「そうだ」
優斗「なら異世界ナビ使えよ」
竜司「異世界ナビ？」
優斗「あの目のアイコンのアプリだよ」
俺達は路地裏に入って行った
優斗「ここならいいだろう」
まず、アプリを開き、こう言った
優斗「鴨志田、学校、城」
異世界ナビ「候補が検索されました。ルート検索します」
優斗「こうすればいい」
蓮「今から行くのか？」
竜司「今、行きたい」
蓮「行けばいいんだな。わかったよ」
鴨志田パレスに入った
竜司「本当に入れた！・・・！蓮！その恰好！」
蓮「服が変わってる!?」
優斗「もしかして」
悠「出ればいいのか、てかもう変わってるし」
竜司「お前もかよ・・」
悠「もはやあきれてんな」
モルガナ「お前たち何でまたここに」
竜司「忘れろってほうが無理だろ」
優斗「俺が言ったこと覚えてるか？」
モルガナ「覚えている」
優斗「つまり来ないといけなかったってこと」
モルガナ「なら俺が何してるかもわかるな？」
優斗「もちろんお宝だろ？」
モルガナ「ここまで来たらとことん付き合ってもらうぜ」

竜司「意味が分からねぇ」
竜司たちに諸々説明した
蓮「そういうことか」
竜司「ならついでにやりたいことがある。昨日の俺たち以外の捕まってるやつら多分バレー部だ」
モルガナ「だがそいつらは鴨志田の認知だ。連れて帰ることなんてできねぇ。だが顔を覚えたらいいだけだがな」
竜司「わかってる」
優斗「じゃあ行くか」
その後、レベル上げをしながら進んで行き、セーフルームで少し休む
竜司「そういや、こんなの持ってきたんだが使えるのか」
モルガナ「銃か」
優斗「まさか、お前・・・」
竜司「モデルガンだからな!?」
モルガナ「さっき言った通りこの世界は認知の世界だ。相手が銃と認識すれば銃にもなる。これは使えるぞ」
優斗「お前ナイス」
竜司「一応持ってきてよかったぜ」
何てこともあった。あと蓮がピクシーを手に入れた。そして・・・
竜司「これで全員の顔を覚えたぞ」
モルガナ「これでさっさとずらかるぞ」
玄関ホール
シャドウ鴨「また貴様らとはな」
優斗「この学校がお前の城か・・・なめ腐ってんじゃぁないぞこのゲスがぁ!!!」
シャドウ鴨「こいつらをひっとらえろ!!」
悠『でるか?』
優斗「まだだ」
シャドウ鴨「ほほう、あの裏切り者のエースがな」
蓮「裏切りのエース?」

シャドウ鴨「これは驚いた。知らないまま付き合っていたのか。仲間を裏切って、一人のうのうと生きている」
坂本「違う！」
シャドウ鴨「私が手を下すまでもない。やれ」
坂本「あんなもん練習じゃなかった！体罰だ！テメェが、陸上部を嫌ってやったんだろうが」
シャドウ鴨「実績上げるのはバレー部だけで十分だった。邪魔だったんだよ！あの顧問も正論いって楯つかなければ、エースの足つぶすだけでよかったものの」
竜司「何、だと・・」
シャドウ鴨「もう一本も折ってやろうか。どうせ学校が正当防衛にしてくれるからなぁ」
竜司「また・・俺は・・・負けるのか？」
蓮「これでいいのか!?」
優斗「こいつをぶっ倒したいんだろう？このままでいいのか!?」
竜司「いいや・・・ダメだ」
シャドウ鴨「そこでおとなしく見ているといいクズを庇って犬死する、救えないクズどもをな」
竜司「救えないクズは・・おまえだ・・鴨志田ぁぁぁぁ!!!」
シャドウ鴨「何してる、黙らせろ！」
竜司「にやけた面で、こっち見てんじゃねぇよ！・・・！ウグ！グアアアア・アアア!!!」
竜司の顔にドクロの仮面が出た
兵「貴様に何ができる。黙ってみているがいい!!」
竜司は仮面をはぎ取りペルソナが出現した
シャドウ鴨「こいつもだと!?」
竜司「これが、俺のペルソナ・・こいつは良い・この力があれば、借りを返せる」
優斗「さっきは竜司の悪いところ言って突き放すつもりだったんだろうが俺たちには逆効果だぜ！何せ蓮は前科持ち、そして俺も前科持ちなんだよ!!つまり！むしろ親近感がわいて、結束力が高まったと俺

は思っている！」
蓮「その通りだ」
モルガナ「これはすごいことになってきたな」
竜司「行くぞ！」
悠「二体の馬は電撃が弱点だ。でかいやつは任せろ」
竜司「ジオ！」
二体をこかした
悠「アギ！」
最後の一体をこかした
蓮「総攻撃だ！」
総攻撃で相手を全員倒す
優斗「よし逃げるぞ」
竜司「いやこいつら倒してから」
優斗「ペルソナが発現したては気力の消費が激しい、退路があるうちに引くべきだ」
竜司「わかったよ」
皆で全力で逃げた
優斗「取り合えず帰ろう」
モルガナ「ああ帰ったほうがいいだろう」
蓮「お前もこっちにきたらどうだ？」
モルガナ「なに？」
優斗「俺たちが入れるなら逆もあるだろ」
モルガナ「・・・気が向いたらな」
蓮「じゃあな」
モルガナ「ああ」
俺たちはパレスを出た

第七話

「遅刻だーーーーー!!!」
竜司「戻ったな」
蓮「みたいだな」
優斗「とりあえず、話聞くのは明日にして。今日は帰ろうぜ」
蓮「そうだな、じゃあ竜司、また明日」
竜司「ああ、明日も来いよ」
優斗「あ」
竜司「どうした？」
優斗「メアド交換しない？」
蓮「連絡手段はあったほうがいいな」
竜司「だったら交換しとこうぜ」
優斗「グループは俺が作っておく」
竜司「わかった、じゃあまた明日な」
竜司と別れ蓮を送った。そして夜
ＳＮＳ（スマホのＬ○○Ｅみたいなもん）
竜司「ここに連絡でいいんだよな、届いてるか？」
優斗「俺は問題ない」
蓮「届いてる」
竜司「明日は頼んだぜ」
蓮「ああ」
竜司「やっぱ頼りになるぜ」
優斗「あんなクズやろうから救ってやらねぇとな」
スマホを閉じた
優斗「さてと、次は杏か。どうしよ属性被るんだけど。まぁどうにかなるか」
そのまま寝た。朝起きるとＳＮＳで竜司たちが、寝てる間にしゃべったいたらしい
竜司「そういやぁよ、あの目みたいなアプリ・異世界ナビとか言ったかあれ何なんだ？」

蓮「俺にもわからない」
竜司「あれ使ったからあんなとこは言ったんだよな？いつの間にか入ってんだよ。俺のにも」
蓮「あそこに行けるんなら、利用するだけだ」
竜司「そういや優斗は？」
蓮「寝てるんじゃないか？」
竜司「そうか、じゃあ、俺らも寝るか」
蓮「おやすみ」
竜司「おう」
ここで終わっている
優斗「俺が寝た後か」
悠『今何時だ？』
優斗「え？今は、８・・時？」
悠『終わったな／（^ｏ^）／オワタ』
優斗「ＮＯＯＯＯＯＯＯ」
悠『遅刻したくなかったら、早く準備したほうがいいぞ。怒られるのは、お前だからな。２５分までに着くように頑張れ』
８時１０分２６秒
優斗「終わったけど、電車ねぇぞ!?」
悠『タクシーしかないだろ、遅刻よりましと思うが？」
優斗「背に腹は代えられんか」
タクシー会社に電話をかけ外に出る
８時１１分５９秒
奇跡的に早くタクシーがついた
優斗「秀尽学園まで！」
運転手「わかりました」
８時２３分５０秒
運転手「つきましたよ、８４６円です」
優斗「１０００円でお願いします」
運転手「はい、お釣りね。行ってらっしゃい」
優斗「はい！」

８時２４分３０秒
優斗「セーフ」
蓮「寝坊か？」
優斗「危なかった」
悠『よかったな、遅刻ギリギリだったぞ』
優斗「何で起こしてくれなかった？」
悠『いやな？起こそうとはしたんだけど、何言っても起きないし。あ母さんは、いびき聞こえたから寝てるだろうし』
優斗「体を動かせばいいだろ？」
悠『変なところで起きられたら面倒だし、電車とか』
優斗「そか」
ＨＲ
川上「今日は球技大会だから今からみんなで着替えてね」
体育館
鴨志田のスパイクが三島の顔面にあたってしまった。鴨志田が驚いていたのでわざとではないと思う。多分。アニメは見たことないけどゲームは興味なしみたいな顔してたんだがな？俺がいるから変わったのか？
鴨志田「すまん。保健委員、三島を保健室に連れて行ってくれ」
竜司がボールをコートにボールを投げ試合がまた始まった
竜司「ちょっと行こうぜ」
優斗「ああ」
中庭
竜司「アイツ現実でも王様気取りかよ。」
優斗「三島は、もうあきらめてんな」
竜司「バレー部のやつらは今日全員いるはずだから」
優斗「まず、どこから行く？」
竜司「まずＤ組のやつからだな、ぱっと思いついただけだが」
優斗「俺が行くよ、蓮は聞きにくいだろうし」
蓮「ああ、頼む」
２―Ｄ

部員Ａ「なんだよ、三人そろってサボりかよ」
竜司「城にいたやつだ」
部員Ａ「お前ら、何の用だよ」
蓮「部活でだよ！今は関係ないだろ！」
竜司「鴨志田のせいだろ？」
部員Ａ「ちげぇよ！これは俺の不注意で・・」
優斗「よし、お前に選択肢をやろう」
部員Ａ「え？」
優斗「俺たちを信じてこの地獄を抜け出すか、言わずにあのクズの言いなりになるか。選べ」
部員Ａ「・・・俺には・・言えねぇ」
優斗「そうかい、じゃあ。卒業まで言いなりの奴隷だな」
蓮「いいのか？」優斗「これ以上は聞けねぇよ。
竜司「じゃあ次か」
優斗「手分けして探したほうがいいだろう」
竜司「だな、俺は実習棟で、部活前のやつ捕まえる、教室棟は任せる」
優斗「すまん。俺どうしても聞きたい奴いるんだ」
蓮「お前が言うなら、何かあるんだろ？」
竜司「じゃあ蓮は３―Ｃのやつに行ってくれ」
優斗「じゃあお互い頑張れよ」
みんな散開した
優斗「じゃあいくか志保のところに」

第八話

「志保の為に」

優斗「とりあえず一階か」

一階に降りると、目の前で志保が杏と話していた

優斗「(いたいた)えっと、あんたが志保でいいんだよな?」

志保「え?」

志保の目には、まだ目に生気がある

杏「どしたの?いきなり」

優斗「ちょっと聞きたいことがあるんだ」

志保「大丈夫だよ、杏」

優斗「すぐ戻るから」

校舎裏

志保「ここまで来て、何の話?」

優斗「実は鴨志田のことなんだが」

志保「!?」

優斗「思ったよりも反応がデカかったな」

志保「私は何も知らないよ・・」

優斗「あんた以外にも聞いてるから、喋りたくなかったら喋らなくていい。まあ喋るとは思ってないけど」

志保「・・・あんたなんかが、どうにかできるわけないじゃない」

優斗「できるって言ったら信じるか?」

志保「・・・信じるわけないでしょ」

優斗「俺らには、秘策がある。まあ、ぶっ飛びすぎて信じようとも思わないと思うがな」

志保「・・・」

優斗「まあ、鴨志田に言いなりになってると近いうち、大切な何かを失うぞ」

志保「・・・どういう意味」

優斗「とにかく鴨志田から逃げろ」

志保「・・・信じられないわ・・」

優斗「ああそうかい、それじゃあな」
志保「・・・」
校内放送「すべての試合が終了したので皆さん着替えて下校して下さい」
ＳＮＳ
竜司「時間切れか、どうだった？」
蓮「察しろ」
竜司「だめだったか」
優斗「俺はできることはしたが変わるかはわからない」
蓮「優斗でダメなら俺達でも駄目だ」
竜司「とりあえず集まるか、中庭に」
中庭
中庭に入ろうとすると、蓮がいるんだが何故か杏がいる
杏「なんか変な噂あるし」
優斗「どうした？」
竜司「そいつに何の用だ？」
竜司!?まさか後ろにいるとは・・・
杏「そっちこそ何？違うクラスじゃん」
竜司「たまたま知り合ったんだよ」
杏「たまたまって、ってまさか。優斗が言ってたやつ？」
優斗「当ったり～」
竜司「はぁ!?お前言ったのかよ!?」
優斗「いや、なんつうか、信じないと思ったし、ほら、言いたくなるじゃん」
竜司「その気持ちはわかるけどよ・・・」
杏「志保とかいろんな人に鴨志田先生のこと聞いてるみたいだけど、何するつもり？」
優斗「アイツに今までの罪を吐かせるって言ったら信じるか？」
杏「そもそも、あんたのあの話自体信じてないから」
優斗「なら一つだけ忠告しておく」
杏「何よ」

優斗「志保に何かあったら支えないといけないのはお前だからな」
杏「当たり前よ、友達は支えあうものでしょ」
優斗「わかってるならいいが、お前はむしろ試練かもな」
蓮「なんかシリアスみたいになってるみたいなんだけど、杏は何の用事できたんだ？」
杏「え、あっそうだった。あんたたちの噂が相当広まってるから。みんなあんたらに協力しないよって言う忠告しに来たのよ。それじゃあバイバイ」
杏は中庭を出た
竜司「相変わらず気のつえぇ女」
蓮「顔見知りか？」
竜司「同じ中学ってだけだ」
蓮「そうなのか」
竜司「ていうか話脱線してるけど、お前ら聞き込みはどうだった？誰かの名前とか」
蓮「三島とかいう名前を聞いたぞ、特別な指導がうんたらかんたらって」
竜司「特別な指導ねぇ」
優斗「一回聞いたほうがいいだろうな」

第九話

「普通に玄関にいた」
下駄箱
竜司「話、あんだけど」
三島「坂本？」
蓮「ちょっと聞いてくれ」
優斗「すぐ終わるから」
坂本「ハッキリ言うぞ。その怪我、鴨志田にやられたんだろ？」
三島「そ、そんなんじゃないよ！」
すると二階から降りてきた鴨志田が近づいてくる
鴨志田「何をしてるんだ？それに、三島は今から部活だろう？」
三島「今日はちょっと調子が悪くて・・・」
鴨志田「じゃあやめるか？」
三島「!?」
竜司「具合が悪いって言ってるだろ！」
鴨志田「来るのか？来ないのか？」
三島「行きます・・・」
鴨志田が今度は竜司を睨みだす
鴨志田「何か問題起こせば、お前、今度こそ学校にいられなくなるぞ？」
竜司「クソッ」
鴨志田「お前もだ、大人しくしてろと、校長先生が言ってたんじゃないのか？」
蓮「今から帰るとこだ」
鴨志田「なら早く帰ることだ。よくない噂が広まってて、生徒も不安がるしな」
竜司「そりゃあテメェのせいだろう？」
鴨志田「フン・・・話にならないな。行くぞ三島。秀尽学園は、志のある生徒が学ぶ場所。相応しくない生徒に、居場所があると思うなよ？」

鴨志田は去って行った
竜司「くっそ、今に見てろよ・・・！」
三島「無駄だから」
竜司「あ!?」
三島「体罰の証明なんて・・・意味ないんだよ」
優斗「どうしてだ？」
三島「皆知ってんのさ、校長も、親も知ってて黙認してるんだ」
竜司「嘘、だろ・・・」
優斗「本当だよ」
蓮「本当なのか？」
優斗「だから俺たちでやるんだよ。大人が何もしないときは、子供がやらないとな」
蓮「向こうの世界か」
優斗「ああ」
三島「何を言ってるんだ？」
竜司「こっちの話だ。聞かなくてもいい、てかむしろ聞くな」
優斗「お前は、鴨志田がいなくなるって言ったら信じるか？」
三島「信じられない・・けど、できるんなら・・・やってほしい」
優斗「よく言った！」
三島の背中を叩く
優斗「そう言ったのは、お前だけだぞ！みんな諦めきっていたからな」
三島「で、できるんだよな？」
優斗「間違いなく」
蓮「そろそろ行かないか？」
優斗「そうだな、それじゃあな三島」
三島「う、うん・・・」
中庭
優斗「とりあえずみんな動き回って疲れたろうし、様子見ないといけないから、今日は帰ろう」
蓮「やることやったな」

竜司「お前ら、風邪で休んだりするなよ！俺だけ違うクラスで分かりにくいんだからな」
優斗「わかってるって、ということで今日は解散！」
竜司と別れ蓮を送った
悠『今日は波乱の一日だったな』
優斗「今日は疲れたから早く寝るわ」
・・・夢？真っ青の部屋だ。まるでペルソナ1のベルベットルームみたいだ
イゴール「ようこそ我がベルベットルームへ」
ジュスティーヌ「あなたは・・・囚人ではないのですか」
カロリーヌ「どういうことだ？我々は客人一人一人につくのではないのか？」
優斗「あの、ちょっといいっすかね」
ジュスティーヌ「！なんでしょう」
優斗「客人のことはわからんが、さっき囚人と言ってたのは、蓮のことか？」
カロリーヌ「たしか、そんな名前だったか、お前は知っているのか？」
優斗「知ってるもなんも、友達だぞ」
ジュスティーヌ「そもそも、どうして囚人から本人のことが分かったのですか？」
優斗「それは、この世界の人間じゃないもの」
カロリーヌ「どういうことだ？詳しく教えろ」
優斗「それはな（全略）っていうことだ」
ジュスティーヌ「にわかには信じられませんね」
優斗「こっちから言わせてもらったら、この世界が非常識だからな。一部の人を除いて」
イゴール「そろそろいいでしょうかな？」
優斗「構わないけど」
イゴール「では、これを」
イゴールが出したのは、漫画の単行本の1．5倍ほどの大きさの箱

だった
イゴール「これは貴方様が来る少し前に、現れたものです。おそらく、貴方が持つべきものでしょう」
優斗「中見ていい？」
中を見ると
優斗「これ・・・銃か？」
イゴール「それは貴方様なら使い方がわかるはずです」
優斗「これはどこに置いてくれるんだ？」
イゴール「貴方様の机の上に置かせていただきます。」
優斗「わかった」
イゴール「ではこちらには定期的に来ることになりますが、まあ分かっていらっしゃるようなので説明は不要ですね」
優斗「うん、じゃあお休み」

第十話

「モルガナ現実世界に進出」
悠が何か言ってるのをよそに優斗が起きた
優斗「・・・・！今何時だ!?」
7時
優斗「よし」
悠『いやよく見ろ』
優斗「ん？・・・！針が・・・止まってやがる!?」
悠『スマホはどうだ？』
スマホを開くと
7時半
悠『危なかったな』
優斗「マジで心臓にわりぃ・・・時計壊れたか？電池が無くなったのかな・・・」
悠『どっちにしたって、帰ってからだろ。さっさと準備しろ』
さっさと準備していくぞ
授業中　ＳＮＳ
竜司「証人探しなんだけどさ、高巻から話聞けないかな？」
優斗「無理なことはない」
竜司「行けるってことか」
蓮「ならおれがやろうか？」
竜司「高巻はさ、バレー部の鈴井と友達なんだ」
優斗「俺昨日聞きにいったの鈴井だぞ？」
竜司「俺もだ」
蓮「スルーされたのは置いといて、だから高巻に聞くのか？」
竜司「そうだ。行けるんなら、頼んだ」
放課後
やばい腹痛い・・・・・トイレ後
優斗「はぁ～スッキリした」
悠『中庭見てみろよ』

優斗「？あれ、蓮達がいる」
中庭
竜司「クソ、どうなってやがんだ」
蓮「見つかったのか？」
竜司「見てわかんねぇか？」
優斗「じゃあ、直談判にでも行くか？」
竜司「何でそうなんだよ、てかいつ来たんだよ」
優斗「今だよ」
蓮「脱線してるけど、これからどうするんだ」
優斗「向こうの鴨志田を倒せばいいんだよ」
竜司「その発想はなかった・・・けどアイツ倒してどうにかなるのか？」
モルガナ「やっと見つけた」
優斗「やっと来たか」
竜司「なんか聞こえなかったか？」
優斗「下見ろ、下」
モルガナ「上がるから」
モルガナが机の上に上がってきた。その姿はおかしな姿ではなく、ただの黒猫だった
モルガナ「はぁ、ワガハイに仕事させておいて、タダで逃げようなんて思うなよ」
竜司「その声、モルガナ!?」
モルガナ「来れたはいいが、お前らがどこにいるかわかんなかったから苦労したぞ」
竜司「黒猫になったか・・・まあ元から猫か」
モルガナ「猫って言うな！こっちにきたらこうなったんだ！」
蓮「どうやってきたんだ？」
モルガナ「ワガハイレベルになると、自力さ。抜け道・・・かなり迷ったけどな」
竜司「つか、なんで猫で喋れんだよ!?」
モルガナ「しるか！」

竜司「お前らも聞こえてるか」
蓮「俺は聞こえてる」
優斗「モルガナが来たのは分かったが、何言ってるかさっぱりわかんねぇ」
竜司「ボケなくていいぞ・・・」
優斗「ありゃ、ばれてたか」
竜司「バレバレだよ。そもそも最初に気付いたのテメェじゃねえか・・・」
モルガナ「それはともかく、オマエラ、てこずってるみたいだな？やり方、教えてやってもいいぜ」
竜司「なんだ？教えてくれ！」
モルガナ「まあさっき言われたけどな、そいつに」
蓮「優斗が言ってるのはあってるのか」
優斗「それよりさ、今俺ら傍からみたら、猫と喋ってる変な奴だぞ」
竜司「・・・とりあえず、あんまり見られないところに行くか」
屋上
モルガナ「鴨志田のパレスからお宝を盗むんだ。お宝は歪んだ欲望からできているからそれを取り除けば・・・」
蓮「改心するってことか」
モルガナ「だが、他の欲望まで取ってしまうかもしれない。他の欲望まで取ってしまったら、その先にあるのは廃人化だ。それでもやるか」
優斗「その辺は大丈夫だ。シャドウを殺さない限り、廃人にならない」
竜司「もし殺しちまったら、どうするんだ」
優斗「あいつらはそこらへんは妙に硬い、それに体力がゼロになったからって死ぬわけじゃない」
蓮「ならやる以外に選択肢はなさそうだな」
優斗「アイツをぶっ倒してやろうぜ」
全員「おおーーー!!!」
優斗「モルガナの肉球めっちゃ気持ちいいぞ」

蓮「本当か？モルガナ触らせてくれ」
モルガナ「ワガハイを猫扱いするなあぁぁぁぁぁぁ」

第十一話

「鈴井自殺」
ＳＮＳ
竜司「ちょっと気になること聞いた。さっき話した鈴井、鴨志田と噂になってんだと」
蓮「心当たりあるのか？」
竜司「いやな？中学の時から知ってんだけど、鴨志田みたいなの、絶対趣味じゃないぜ？なんで噂なんのかな？」
優斗「鈴井と杏は友達だよな？」
竜司「ああ」
優斗「じゃあ、杏は鈴井のために、鴨志田と一緒なのかも。」
蓮「あるのかもな、そういうのも」
優斗「例えば、付き合う代わりに鈴井をレギュラーにしてくれみたいな」
蓮「考えるよりも聞いたほうが早いかもな」
校門
優斗「あ、ヤバッ」
蓮「？どうした？」
優斗「腹がいきなり痛くなってきて、すまん先帰ってくれ」
蓮「わかったじゃあな。また明日」
蓮と杏を一対一で合わせたいんじゃなくて、腹が痛いんだマジで
１５分後
帰ろ・・・・ん？
三島「鈴井・・帰るの？」
鈴井「何」
三島「鴨志田先生が呼んでる、体育教官室だって」
鈴井「先生、なんて？」
三島「・・知らない・・伝えたから」
鈴井が歩き出した
!!このままいかせたら、鈴井は・・いかせたらダメだ!!!

優斗「いくな鈴井!!」
俺は鈴井の前に立ちふさがった
鈴井「何も知らないくせに・・・どいてよ」
優斗「知ってるさ、お前が今まで何をされてたか、今から何をされるかも、全部!!」
鈴井「どいてよ！」
鈴井を少しのすきまを抜けられてしまった
優斗「なに!?」
鈴井「いいからどっかいってよ！」
優斗「こちとら元サッカー部だぞ！なめんな！」
そのあと俺らは学校を二周くらいした
優斗「お前・・・思った・・・より・・・体力あるじゃねぇか」
鈴井「貴方だって・・・いい加減あきらめなさいよ」
優斗「それは・・・無理・・・だね」
久しぶりにこんなに動いたから・・・体力が・・・
先生「おい！何そんなに走ってるんだ！」
優斗「先生!?」
鈴井「！私は・・・逃げさせてもらうよ」
優斗「!?おいちょっとま」
先生から逃げようとするが、すぐに腕を掴まれた
優斗「あ」
悠『終わったな／（^ o^）／オワタ』
先生「話を聞かせてもらおうか？」
優斗「はい（，；ω；、）」
そしてご察しの通り先生に説教された
1時間後
クソッ反省文書かされた。しかも鈴井を助けられなかった。仕方ない・・・帰るしか・・・ないか。俺にできることといえば後は・・・鈴井の自殺はもう止められない領域まで入ってしまった、ならできることは・・・そうだ！
次の日

優斗『そろそろだ。これのためにあえて遅刻で来て、めちゃくちゃふわふわの羽毛が入った枕１０個入のビニール袋を準備しておいた。自分で受け止めろ？腕が折れるわ』
皆が騒ぎ出した。屋上の志保が目を閉じて、飛び降りる
優斗『今だ！』
俺はビニール袋を投げて上から志保が落ちてきた。しかし運悪く膝から下の部分が地面と激突してしまった。流石に範囲が狭かったか
杏「志保!!」
野次馬がたくさん来てしまった
杏「これって・・・何・・・これ」
優斗「ふわふわ羽毛入り枕１０個入ビニール」
杏「いや、なんでこんなの持ってきてるの？」
優斗「昨日志保が鴨志田に呼ばれてたから、まさかと思ってね」
杏「？それだけでわかるの？」
志保「うぅ・・」
杏「！志保」
志保「杏？・・・ごめん、私・・・もう・・・無理・・・」
杏「志保？志保！」
優斗「多分気を失ってるだけだと思うが、一応病院に連れて行ったほうがいいな」
救急車がついた
救急隊員「タンカ急げ！」
タンカに志保が乗った
救急隊員「誰か、付き添いを・・・教職員の方はいらっしゃいませんか？」
教師１「私は・・・担任ではありませんから・・・」
教師２「こういうのは校長が・・・」
優斗「自分のとこの生徒が自殺しようとしたんだぞ!!だれか行こうって気はねぇのかよ!!」
教師１＆２「う・・・」

杏「行きます！」
救急隊員「急いで！」
救急車が志保を搬送した
竜司「どういうことだ？こりゃいったい」
優斗「ここからいったん離れよう」
体育館裏
竜司「なに!?鈴井が鴨志田に（ピー）されただって!?」
蓮「鈴井は（ピー）されたから自殺しかけたのか」
優斗「さっき三島が逃げてたんだ。三島が志保に鴨志田に呼ばれてるからって伝えていたからだと思う」
竜司「何で知ってんのに、止めなかったんだ？」
優斗「止めたけど、ダメだった。学校を二周してまで追いかけたけど、俺だけ先生に捕まっちまって反省文書かされてるうちに多分・・」
竜司「じゃあ、とりあえず三島探すか」
蓮「証人になってもらおう」

第十二話

「鴨志田に暴言を」

三島を見つけた

竜司「ちょっといいか」

優斗「鴨志田のところに一緒に来てほしい」

三島「お前たちなら、どうにかできるんじゃなかったのか!!?」

優斗「そのために、お前が必要ってことだ」

三島「・・・一緒に行けばいいんだな?そうすれば、この地獄は終わるんだな?」

優斗「ああ、だから。鴨志田が今いそうな場所を教えてくれないか?」

三島「教官室だと思う。アイツは機嫌悪いとご指名で殴るんだ」

竜司「本当に体罰マジだったか」

三島「でも鈴井、昨日特にヘマしたわけじゃなかったのに急に呼びだされて、アイツすごくイライラしてたから、きっといつもより酷いこと・・」

蓮「優斗に聞いたんだが鈴井は（ピー）されたんだ」

三島「!?（ピー）されたのか!?」

優斗「とりあえず鴨志田のところに行こう」

体育教官室

鴨志田「ん?」

竜司「テメェ!あの子に何しやがった!」

鴨志田「なんだ、いきなり」

竜司「しらばっくれんな!」

鴨志田「いい加減にしろ!」

優斗「それはテメェのほうだろうが!自分の思い通りにならないから、だから何だ?人はそういうもんだろうが!あんたはバレーで金メダル持つぐらい強い天才でも出来なかったことぐらいあるだろうが!無いとしても、普通の人はな、何度も何度も練習して出来るようになっていく!そしてそれを見守って強くしていくのがあんただろう

が！それなのに機嫌が悪かったらすぐ殴りやがる、それでもお前は教師か！お前に味方する運命なんて・・・お前が逃げれるかどうかのチャンスなんて・・・今！ここにある正義の心に比べればちっぽけな力なんだ！」

鴨志田「だからどおした！」

優斗「なに!?（わざわざ頑張って長文言ったのに、動揺ぐらい見せろ!!）」

鴨志田「どうせ、ここにいる全員退学になるんだ。次の理事会で吊るしてやる」

三島「そんなこと・・・簡単にできるわけない」

鴨志田「こんなクズどもの言うこと、誰が本気で取り合うか。三島、一緒に脅迫してきたお前も同罪だからな」

三島「え？」

鴨志田「才能もないのに部に置いといた理由、それに一緒に被害者面してるけど、前歴のコトバラしたの・・・お前だろ」

蓮「だから何だ？」

鴨志田「何？」

蓮「どれだけ言われても、毎回動じてたりしたら身が持たない。過去は振り返らないと決めてるんだ」

鴨志田「だったらこいつはどうなんだ？坂本は、俺を殴って陸上部を廃部にしたんだぞ」

優斗「過去は過去、今は今だ。だろ？竜司」

竜司「あ、ああ。いつまでも振り返っても仕方ないからな」

鴨志田「何・・・だと!?」

三島「言って・・・やる」

優斗「思いっきり言ってやれ、三島」

三島「お前みたいなやつはこの学校からいなくなって、野垂れ死にしちまえ！」

優斗「？それは違うぞ。三島」

三島「え？」

優斗「こういうやつは死ぬよりも、生きて！罪を償うのが一番きつ

いんだよ！生き地獄に落とせばいいんだ！」
鴨志田「クソッ！だがな！お前たちは、次の理事会で吊るしてやる！お前たちがどうこうできるほど、世の中は甘くないんだよ！」
蓮「それはどうかな？」
鴨志田「なに？」
竜司「言いたいこと言ってればいい、だがな」
優斗「相手が勝ち誇ったとき、そいつはすでに敗北してるんだよ！」
竜司「じゃあな、鴨志田」
俺たちは体育教官室を出た
鴨志田「アイツら・・・一体何者なんだ・・・？」

第十三話

「なぜそんなものを飲むんだ」
竜司「めちゃくちゃきれいに決まったな」
優斗「何でだろうな（―ω―；）ウーン」
蓮「事前に何か話したわけじゃないのにな」
三島「お前らヤバくないか？」
優斗「ともかく、モルガナ。一回出て来い」
モルガナ「なんだよ」
三島「え!?猫!?」
モルガナ「猫じゃない！」
三島「な、何か言ってるのか？」
竜司「俺たちにはわかるんだけどな？」
蓮「ああ」
三島「お前ら本当に人間か？」
優斗「そのうち、はなしゅ」
竜司「今、噛んだのか？」
優斗「・・・聞かなかったことにしてくれないか？」
蓮「それは無理だ」
三島「なにこれ、さっきまでシリアス展開だったのに・・・」
優斗「とりあえずパレスに行くぞ」
竜司「今からか？」
優斗「当たり前ダルォ？さっさと行ってあの裸の王様倒すぞ」
蓮「いっその事、一気に締め上げるか」
竜司「どこをだよ。まさか首とか言うなよ？」
蓮「・・・」
竜司「無言やめろよ」
すると、俺達を探しに来てた杏が、近づいてきた
杏「あのさ」
竜司「高巻!?」
杏「さっき聞いちゃったんだけど、退学って本当？」

優斗「いや、こっちには策があるから大丈夫だ。でも杏は危険だから来るなよ（フラグ）」
杏「さっき言ってたでしょ。鴨志田に志保が呼ばれてたって」
優斗「一緒に行くってことか？」
杏「そうよ！」
優斗「いや本当に危ないからダメだ」
蓮「死にたくなかったら来ないほうがいい」
三島「・・・お前ら忘れてるっぽいから言っとくけど。時間的には、まだ授業中だからな」
優斗「あ」
竜司「とりあえず、教室戻るか」
蓮「ああ」
放課後
優斗「じゃあ気を取り直していくか」
後ろから杏が隠れてついて来てるけど、予測通りなのでパレスに入った
モルガナ「さて、こっから俺たちは怪盗扱いになるからな！」
蓮「怪盗・・かっこいいな」
優斗「それじゃあ変わるか」
悠「よし」
杏「なに？ここ」
竜司「高巻!?」
杏「どこよここ」
蓮「危ないって言ったのに」
竜司「おい返そうぜ」
杏「あんたたちもしかして、坂本と中村君と蓮君!?」
優斗「誰ですか？それ（棒）」
杏を押し返す
杏「ちょっとまってよ！ってお尻触ってんのだｒ」
杏をパレスからおい出した
優斗「触ったの誰だ？」

竜司「いや、不可抗力だったんだ」
優斗「とりあえず、行くぞ」
モルガナ「その前に、コードネーム決めないか？」
優斗「あったほうがいいかな？」
モルガナ「蓮はジョーカーとかどうだ？」
優斗「じゃあ竜司はスカル、モルガナは無難にモナとかどうだ？」
竜司「いいなそれ！」
モルガン「俺も悪くない」
優斗「実はな、俺と悠のは決めてたんだ」
モルガナ「なんだ？」
優斗「俺は真実って意味のトゥルース」
悠「俺は虚偽って意味のフォルスだ」
竜司「・・・真実はまだ分かるんだが何で虚偽なんだ？」
悠「なんでも、二重人格なら、表と裏みたいなもんかな？って思ったらしい」
蓮「わからなくもないが。それは違うだろ」
悠「とりあえず行こうぜ」
モルガナ「それじゃあいくか」
ここからコードネームになります
ホール
シャドウ鴨「近頃、侵入者が多くなっている！もっと警備を強化し見つけ次第殺せ！」
敵「鴨志田様、ばんざーい」
トゥルース「面倒だな、回っていくぞ」
モナ「ああこっちだ」
しばらく進むと広い部屋に出てシャドウを全員殺った。おっと間違えた。倒した
トゥルース「ここ何か怪しいな」
モナ「何がだ？」
原作にはここに何もなかったと思うが・・・何か違和感がある
トゥルース「こんなとこに樽なんてあったか？」

樽をどけるとスイッチがあった
モナ「まさか隠し部屋か!?」
スイッチを押すと横から扉が出てきた
トゥルース「俺見て来るわ、何かあったら持ってくる」
宝箱があった。開けると紫色の薬のようなものと地返しの玉、そしてカギ一つがあった
トゥルース「こんなのがあった」
モナ「これは何だ？」
トゥルース「こっちは瀕死になっても復活できるアイテム。こっちは知らん」
ジョーカー「アイテムとカギはもらっておこう」
トゥルース「こっち飲んでみていいか？」
モナ「好奇心旺盛にもほどがあるぞ」
スカル「・・・本当に飲むのか？」
トゥルース「ああ」
俺は薬を飲んだ
スカル「うわ、ホントに飲みやがった!!」
トゥルース「!?ぐうぅ」
スカル「どうした!?」
トゥルース「体が・・焼けるように熱いッ!!」
ジョーカー「コ◯ンかよ」
トゥルース「知ってんのかよコ◯ン！グハッ」
スカル「ジョーカーはなんで生きるか死ぬかの状況で突っ込みさせてんだ！」
モルガナ「!?体が少し小さくなったぞ!?」
トゥルース「・・・治まったぽい・・・な」
ジョーカー「お前・・・トゥルースか・・・？」
トゥルース「？俺以外に何がいるんだ」
竜司「クソ！今カメラがあればよかったのに！」
モルガナ「ショックは受けないでくれよ？」
トゥルース「？もちろんだ」

モルガナ「今、お前は」

第十四話

「性癖大暴露」

モナ「お前、女になってるぞ」

トゥルース「は？」

ジョーカー「間違いない」

トゥルース「確かに声は高くなってるけど・・・髪も伸びてる・・・背も低い・・・確定か」

スカル「気を・・・落とすなよ。プ」

トゥルース「スカ～ル？こっちに顔やってごらん♪」

スカル「？いいけど」

カチャ

こめかみに銃口を当てた

スカル「!?」

トゥルース「これは何かわかるかな？１０秒以内に答えないと死ぬよ？♪」

スカル「じゅ、銃です！」

トゥルース「はいせいか～い。それじゃ次は5秒以内に答えてね♪」

スカル「は、はい！（´；ω；｀）」

トゥルース「引き金を引いたらどうなるでしょ～う♪」

スカル「死んでしまいます!!」

トゥルース「謝る？♪」

スカル「す、すみませんでしたｍ（＿＿）ｍ（震）」

トゥルース「許してやろう」

モナ「アイツって怒るとこんなに怖かったのか」

ジョーカー「俺も今知った」

モナ「トゥルース」

トゥルース「なに？モナ」

モナ「お前服どうするんだ？」

トゥルース「それはたぶん」

フォルス「こっちにしたら怪盗服になるからな」
モナ「だったら大丈夫か？・・・いやでも元の世界に戻ったらどうなるんだ？もしかしたら外でも女って事も・・・」
ジョーカー「その時は、家に来て写真を撮らせてもらう」
フォルス「・・・どうなっても知らんぞお前」
トゥルース『殺すよ？』
フォルス「まあ、なっちまったもんは仕方ねぇし先進もうぜ」
セーフルームを見つけたので入って少し休むことにした
トゥルース「はぁー」
スカル「トゥルースに戻ったのか」
トゥルース「いいだろ、少しぐらい」
スカル「でもな、服が・・・。その・・・胸元が少し見えちまうっていうか」
トゥルース「お前これで発情したら変態だぞ」
スカル「なら見えねぇようにしてくれよ」
トゥルース「俺は別にみられても別にいいし」
スカル「お前もう少し考えたほうがいいぞ」
トゥルース「何でだ？」
スカル「今お前以外全員男だからな」
トゥルース「襲ってきた時は一人一人ヘッドショット食らわせてやるからな？♪」
モナ「そこまで獣じゃねぇよ」
トゥルース「発情期だったら？」
モナ「猫扱いするな!!襲ったりなんかしない!!」
トゥルース「ならいいけど」
するとセーフルームの外から声が聞こえてきた
敵「しかし、姫はどうしてあんなところに？侵入者の気配を追っていたはずなのに」
ジョーカー「姫？」
トゥルース「今ある情報からだと・・・姫は杏かな？スカルが覚醒したときに水着でいたからな。それに、鴨志田は従順な下部(彼女)な

ら妥当だろうし・・・というか侵入者の反応って事は水着じゃなくて本物って事か？」
スカル「だったらやべえじゃないか！」
話を聞こうとセーフルームを出て、敵につかまり頭に銃を当てた
トゥルース「おい」
敵「何だこの女!?」
トゥルース「殺されたくなかったら、姫とやらをどこに連れて行ったか教えてもらおうか？」
敵「言うよりも、お前たちを殺して差し出したほうがいいに決まってるだろう？」
トゥルース「皆」
ジョーカーたちがセーフルームから一斉に出て、敵を取り囲んだ
トゥルース「この状況から覆し方があるなら教えてほしいな？叫ぼうとしたら撃つから」
敵「ホールのほうの鎧が並んでる道の奥です！」
トゥルース「よく言ってくれた。それじゃあバイバイ」
敵「え？」
バンッ
トゥルース「さっき通れなかったとこっぽいぞ」
モナ「今、敵じゃなくてよかったって思ったのは俺だけじゃないよな？」
ジョーカー「俺も」
スカル「俺もだ」
言われた部屋に行った
杏「なんなのこれ!?マジで警察呼ぶから!!」
シャドウ鴨「そいつが侵入者か」
杏「鴨志田!?誰、そいつ。てか、ここ何？何で学校がこんなになってんの？」
鴨志田「こんなのを俺の杏と間違えるとは」
そこに俺達が入って行った
スカル「高巻！」

杏「坂本!?なんか中村君いなくない?誰その女の子?」
トゥルース「俺が中村だよ・・」
杏「ゑ」
トゥルース「クソ、どうせもう戻れないんだよ、どうせ・どうせ・・」
ブツブツ
杏「え、どういうこと!?」
スカル「話はあとだ!」
フォルス『そのままでいるなら変わってくれないか?』
トゥルース「変われればいいんだろ、ヂクジョー」
フォルス「よし」
杏「え?復活した?」
スカル「ややこしくなったじゃねぇか!」
シャドウ鴨「俺様の前でギャーギャーわめくな!!」
ジョーカー「こいつの存在忘れてた」
モナ「俺らも同じぐらい影薄かったぞ」
シャドウ鴨「お前ら全員ここで奴隷にしてやる!」
フォルス「お前は黙れよ」
シャドウ鴨「なあ、杏こいつらのことどう思う?」
鴨志田認知の杏「口答え何て許しちゃ、だめです」
シャドウ鴨「というわけで、処刑だな。お前らも動いたらこいつの首すぐ跳ねるからな」
杏「・・・これもさ、ぜんぶ・・・天罰なのかもね、気づけたはずなのに」
トゥルース「杏!」
杏「え?」
トゥルース「おまえは人間賛歌って知ってるか?」
杏「え?今?」
トゥルース「今だ」
杏「知ってるけど」
トゥルース「人間賛歌っていうのは、勇気の賛歌だ。そして!人間のすばらしさは優希のすばらしさ!!いくら強くてもこいつら兵は勇

気を知らん！そして！覚悟とは!!暗闇の荒野に!!進むべき道を切り開くことだッ！」
モナ「どういうことだ？」
スカル「見てれば分かる、多分」
モナ「多分!?」
トゥルース「それでも、お前はあきらめるのか？」
杏「・・・そうね、こんな奴のためにあきらめるなんてムリ。マジでムカつきすぎて、どうにかなっちゃいそうよ!!」
トゥルース「よし、お前ら少し離れたほうがいいぞ」
杏「!!ウグ、カハッ」
スカル「何が起こってるんだ!?」
トゥルース「お前らと同じ、ペルソナ覚醒の瞬間だ」
杏「聞こえるよ、カルメン。わかった、もう我慢しない！」
杏が腕に力を込め、鎖を引きちぎる。そして光りだした！光が消えると、赤い怪盗服を着た杏が姿を現した
杏「はあぁぁ！」
杏が兵から剣を取り上げ認知の杏を切り裂き消した
杏「私あんたが好きにできるほど、お安い女じゃないから」
ジョーカー「行けるな」
杏「あんなやつ、ぶっ倒してやる！」
？なにかが下りてきて俺の目の前で止まった
トゥルース「これは」
モナ「なんだそりゃ!?」
トゥルース「！これはペルソナ４の炎か」
竜司「ペルソナ４って何のこと言ってんだ!?」
トゥルース「それは、帰ってからな」
俺はその炎を握りつぶした。すると、俺の周りから突風が巻き起こり、それがなくなると
ペルソナ「やっと、出れました」
トゥルース「あんたが俺のほうのペルソナか」
ペルソナ「私の名前はアリエル。あなたに私の力を貸してあげま

しょう。その代わり無限に沸く敵を倒しなさい！」
シャドウ鴨「どうしてこんなに侵入者がいるんだ！お前たち！今すぐひっとらえろ！」
トゥルース「俺たちが、お前をひねりつぶしてやる」
戦闘　ＶＳ番兵隊長
トゥルース「杏、いいこと教えてやる」
杏「なに？」
トゥルース「アイツの弱点は火だ」
杏「え？」
トゥルース「お前のカルメンは、火が出せる。そして、その火が弱点と言ってるんだ」
杏「！わかった」
トゥルース「怪我したら言え、回復してやる」
皆「ああ！」
トゥルース「耐性は物理、電気、疾風だ」
スカル＆モナ「俺たちやることなしかよ!?」
トゥルース「総攻撃の時にその怒りをぶつけてくれ」
ジョーカー「なら俺はジャックランタンでやろう」
フォルス「攻撃は俺がやるぞ！」
ジョーカー「アギ！」
モナ「総攻撃だ～!!」
体力を３４％削り残り６６％
フォルス「アギ！」
モナ「みんなでぶっ潰せ!!」
体力を３０％削り残り３６％
番兵隊長「なめるなぁ!!」
杏がクリティカル攻撃を受け１０８ダメージ受け残り１
番兵隊長「ククク、トドメだ!!」
トゥルース「任せろ！」
トゥルースは杏を庇い７４ダメージ受けて残り２６
トゥルース「メディア！」

トゥルースと杏は全回復した
杏「アギ！」
体力を３５％削り残り１％
トゥルース「お前に覚悟はできているか？」
皆「俺たちはできている！」
モナ「これで終わりだッ!!」
トゥルース「アリーヴェデルチ！」（サヨナラだ）
ＦＩＮＩＳＨ
番兵隊長「この世に鴨志田様の・・・思い通りにならぬ女が・・・いようとは・・・」
杏「あんなの、学校以外じゃさ、フツーにいたいおっさんだから！」
番兵隊長が消えた
トゥルース「また綺麗に決まったな」
ジョーカー「もう突っ込むのはあきらめたぞ」
スカル「ずっと言ってたら身が持たん」
すると、シャドウ鴨志田がそそくさと逃げて行った
杏「！待て・・ぇ！」
スカル「お前はもう動けないだろうが！」
杏「今追いかけないと・・」
モナ「それは大丈夫だ」
トゥルース「今は立て直すのが先決だ」
パレスを出る前に一つ確認
スカル「もし出ても女だったらどうすんだ？優斗が行方不明になるのか？」
トゥルース「何それ詰みじゃん」
フォルス『その時は俺が優斗な』
トゥルース「なんでだよ！」
フォルス『お前が優菜で俺が優斗。それでいいだろ？』
トゥルース「よかねえよ!!」
杏「・・・誰と話してんの？」
ジョーカー「もう一つの人格」

杏「え？」
トゥルース「なんか、そのままお前が女だったらお前が優菜で俺は優斗なとか言い出した」
スカル「まあ、運が良けりゃあ男のままだろ」
モナ「男なら堂々と現実を受け止めろよ？」
トゥルース「おう。それ女のままって前提だよな？」
俺たちはパレスを出た
駅
竜司がコーラとメロンソーダを買ってきた
竜司「どっちがいい？」
杏「炭酸じゃないやつ」
竜司「どっちも炭酸だ」
杏「じゃあ、コーラ」
竜司「ほら、蓮」
蓮「ああ」
モルガナ「俺のは？」
竜司「猫はダメだろ」
杏「あんたはモルガナって言ったっけ」
モルガナ「ああ」
杏「私、猫と喋れてるんだね。すごく変な感じ」
優斗「そのうち慣れる」
杏「ていうか、中村君戻れてよかったね」
優斗「ああ、あのまま、女だった場合色々怖かったから」
竜司「ところでこれからどうする？」
杏「え？」
蓮「これからも一緒にやるか。それとも、普通に今まで通り過ごすか」
杏「もちろんやるよ」
優斗「なら来るなって言っても一人で来るだろ？」
モルガナ「なら五人でこれからは探索だな」
優斗「それじゃあこれからよろしくな」

蓮「モルガナはどうする？」
モルガナ「俺はいつまでも外にいたくないぞ」
竜司「うちは無理だ」
杏「私も」
優斗「俺も」
蓮「俺の家しかないのか？居候なのに？」
優斗「うちは、ばあちゃんが猫アレルギーだから避けたほうがいいかなって」
竜司「俺は飼ってる余裕ねえわ」
杏「私はインコ飼ってるから」
優斗『インコ飼ってたの？』
そのあと解散し、蓮を送って俺は帰った
悠『優斗になれるチャンスだったのに』
優斗「俺が女になったら名前はやるよ」
悠『言ったな？』
優斗「言ったぜ？」

第十五話

「授業中のスマホはやめましょう」
ＳＮＳにて
杏「今日からよろしくね」
蓮「ああ」
竜司「仲間が増えるのはなんだかんだいいな！」
蓮「そういえば、優斗」
優斗「なんだ？」
蓮「お前確かペルソナ４とか言ってただろ？それはどういう意味だ？」
優斗「そのことか。じゃあまず、ペルソナ使いはお前たち以外にもいると思うか？」
竜司「いや違うだろ、だってモルガナがペルソナのこと知ってるんなら誰かから教わったてことだろ？少なくともその単語がある時点で、居るもしくは居たんじゃないか？」
蓮「お前にしては、頭使ったなｂｙモルガナ」
竜司「あの猫！」
優斗「モルガナはともかく、ペルソナ使いは俺ら以外にもいる。もちろんワイルドもな」
杏「ワイルド？」
優斗「蓮みたいに、一人で複数のペルソナを使う人のことだ」
蓮「こいつみたいなのが、ほかにもいるのか!?ｂｙモルガナ」
優斗「一人は死んで、一人は生きてるはず」
竜司「はず？」
優斗「物語の後は分からんから」
杏「私たちが知ってる人の中にもいるのかな？」
優斗「俺たちの世代は5なんだが、４のペルソナ使いならわかるかもな。例えば探偵の白鐘直人、アイドルの久慈川りせとか、天城屋旅館の若女将の天城雪子とかな」
杏「嘘、そんなに!?」

蓮「有名な人ばかりだ」
優斗「大体な」
竜司「すごいな、じゃあ俺たちがどうなってるのかとか分かるのか？」
優斗「いや、ペルソナ5が一番新しいんだ。だから分からないんだ」
蓮「それなら、仕方ないな」
優斗「というかそろそろ寝ないか？」
時計は11時を指している
竜司「だな」
杏「じゃあまた明日」
俺はSNSグループを抜け、蓮との個人チャットを開いた
優斗「蓮」
蓮「どうした？」
優斗「実は今度やりたいことがあるんだ」
蓮「やりたいことって？」
優斗「実はな・・・・・・・・っていうのはどうだ？」
蓮「面白そうだな、少し恥ずかしいが」
優斗「案外良かったりしてな」
蓮「じゃあまた明日」
優斗「よく考えたら、あんなことあった後に学校あるってヤバくない？」
蓮「確かに」
優斗「また明日」
俺たちは寝た
次の日学校前
具合を心配する女子「どうしたの？顔色悪いよ？」
具合が悪い女子「なんか最近、具合が悪くてさ。頭重いし、体も妙にだるい感じ。市販の薬、どれだけ飲んでも全然治らないし・・まさか新種のウイルス？・・ひょっとして、これが例の精神暴走の前兆？ど、どうしよう!?わたし、死んじゃう!?」
優斗「薬なんか飲んでも気力の問題だ。結局治らない、治らないと

思えば。治るもんも治らん。そんぐらい今どき小学生でも知ってる。なのにあんなこと言ってるということは、あれが俗にいうぶりっ子か。初めて見た」
蓮「いや、ぶりっ子とは違う気がするけどな。というか小学生ならそんなこと考えずに遊んでるだろ」
優斗「そういや昨日言ったやつ結局やるのかやらないのか？」
蓮「機会があれば、な」
授業中・ＳＮＳにて
竜司「放課後は屋上に集合でいいか？」
杏「今授業中」
竜司「すげぇ！ちゃんと受けてんのか？」
優斗「そもそも、あんなことの次の日に授業があるのがおかしいんだ」
竜司「んで、放課後はアジトでいいんだよな？」
杏「というか入れるの？」
蓮「隠れて入る」
竜司「特別に入れてやるよ」
優斗「蓮、気をつけろよ牛丸見てるぞ」
ＳＮＳ終わり
牛丸「おい、蓮！今、よそ見してただろう！それが人の話を聞く態度か!!」
蓮がブルってなったぞ。牛丸がチョークを・・・投げた―!、蓮の頭にクリーンヒットオオオ
優斗「忠告したのに」
牛丸「チョークが飛んでくると思えといっただろう。それと中村」
優斗「はい？」
牛丸「お前もよそ見してたよな？」
!?これが殺気!!
チョークがすごいスピードで飛んできた。あ、これヤバいかも
悠『一瞬変われ』
優斗「？わかった」

悠「ペルソナ」小声
イフリートが出てきた!?イフリートがチョークの軌道を少し変え、チョークは後ろに飛んで行った
杏「え?あれって」小声
蓮「なんでだ?」小声
牛丸「少しそれたか、運のいいやつめ」
優斗「なんでペルソナが?」小声
悠『なんか、反射的に出ただけ?』
優斗「説明するの俺なんだけど・・・」
悠『俺出たくないからな』
優斗「はぁ〜」
牛丸「なんだ?もう一発食らいたいのか?今度は当てるぞ?」
優斗「いや、大丈夫です!」
放課後
屋上
蓮「何でペルソナが出たんだ?」
優斗「何でかわからんが反射的に出たらしい」
杏「らしい?」
優斗「だって悠のペルソナだもん」
モルガナ「今はそれよりも、今も出せるのかだ」
優斗「やってみるか?」
ペルソナというとアリエルが現れた
優斗「でた」
モルガナ「出せるのかよ!?」
竜司「えっと、牛丸の授業でチョークが投げられて、それを避けるためにペルソナが出たでいいんだよな?」
蓮「間違いはないぞ」
杏「私もペルソナ出せるのかな?」
優斗「やってみたら?」
杏「ペルソナ!」
シーン

杏「なにこれ、恥ずかし」
優斗「じゃあ俺らだけ？」
蓮「ぽいな」
モルガナ「・・・だが、あんまり使ったら使うのに慣れて、使えなくなった時不便になるぞ？」
優斗「わかってるさ」
竜司「それじゃパレスに行くか？」
モルガナ「いや、準備が先だろう？」
優斗「ゲームみたいに考えると、武器、装備、回復ぐらいか？」
モルガナ「ああ、そんなもんだろ」
竜司「武器とか、防具なら売ってそうな店知ってるぜ」
モルガナ「なら、そっちは任せた」
優斗「薬は、あて先がある」
杏「じゃあ、それが揃ったら、行けるってこと？」
優斗「金がなくなれば、パレスで稼げる」
竜司「だったら、準備できたら行こうぜ」
アリエル「私たちを頼ってくれて構いませんけどね」
優斗「・・・ん？今喋った？」
アリエル「ええ」
皆「ええーーーーーー!!!」
放課後・四軒茶屋路地裏
優斗「さて蓮」
蓮「医者の所に、行くんだろ？」
モルガナ「ああ、今から行こうと思ってた」
優斗「あそこの医者はヤバいぞ。悪い人じゃないんだが、モルモットになる覚悟があるんなら行け。その代わり、回復道具増やしてくれるんだ」
蓮「ヤバくないか？」
優斗「だけどアイツコープ相手だからな」
蓮「避けてちゃダメって訳？」
優斗「おつかれ」

蓮「怒っていいか？」
優斗「とりあえず行くぞ」
モルガナ「逃げられたな」
アリエル「私は、動かなくても勝手に行きますけどね」
蓮「怒る気にもなれなくなってきた」
病院
先生と話した後、男が来て追い出された
優斗「買えたけど、今日はもう無理そうだな」
蓮「そうだな、それじゃあ帰るか」
アリエル「それでは、また明日」
蓮と別れた
アリエル「それにしても、こっち側の世界に来られるとは」
優斗「心の海ってとこにいたんだろ？」
アリエル「ええ」
優斗「ていうか、なんで喋れるんだ？」
アリエル「召喚した時も喋ったじゃないですか」
優斗「じゃあ何で、こっちで出れるんだ？」
アリエル「こっちが聞きたいですよ」
優斗「消えたりできないのか？」
アリエル「言い方が悪いのは置いておいて、ポ○○ンみたいなものですから、呼びたかったら名前ｏｒペルソナ、戻したかったら、戻れでできますよ」
優斗「ポ○○ンは消されるからやめろ」
アリエル「でもまだ、戻さないでほしいです」
優斗「まあ、俺からしたら話し相手が増えたみたいなもんだけどな」
アリエル「私は、貴方の別の人格の人とも話してみたいものですけどね」
悠「俺のことか？」
アリエル「あら、もう変わったんですね」
悠「さっきの話によると、イフリートも呼べるのか？」
アリエル「ええ、そのはずです」

悠「イフリート」
イフリート「ん？なんだ？戦うのか？」
悠「よう、イフリート」
イフリート「お、悠か。ここどこだ？」
悠「お前に分かりやすく言うなら外の世界かな？」
イフリート「そうか」
アリエル「あなたが、イフリートですか？」
イフリート「げ！天使かよ！」
アリエル「大丈夫です。あなたを攻撃する気はありません」
イフリート「本当かぁ？」
アリエル「ええ」
イフリート「そう聞いたら安心したぜ」
アリエル「今は、お互い仲良くしましょう」
優斗「そういや、蓮達のペルソナも話せるのか？」
アリエル「あの人たちは、こっちに来れないみたいですが。向こうに行くか、貴方を経由して来れるんじゃないかしら」
イフリート「それだったら、来れるかもな」
家の前までついた
優斗「じゃあ入るか、お前らは入れるのか？」
イフリート「大丈夫だ」
イフリートとアリエルは同じぐらいの身長まで縮んだ
優斗「便利だな」
アリエル「でしょう？」
家に入った
お母さん「おかえr、誰？その人たち」
優斗「え？」

第十六話

「母さんたち順応性高杉晋作」
優斗「見えてるの？」
お母さん「もしかして・・幽霊!?」
アリエル「アレと同じにしてもらっては、困ります」
イフリート「俺らはちゃんとした。天使と悪魔だぞ」
お母さん「天使？悪魔？」
優斗「お前ら、素か？」
イフリート「ん？どういうことだ？」
優斗「はぁ・・とりあえず説明するよ」
青年説明中
優斗「っていうわけ」
お母さん「そうなの、すいませんねぇ。こんな息子に憑かせちゃって」
アリエル「私たちは後悔してないですし」
イフリート「それより、何で見えるかのほうが気になるんだが」
アリエル「血筋でしょうかね？」
イフリート「それか、気を許した奴だけとかな」
アリエル「どうしてですか？」
イフリート「アイツらにも見えてたから、気を許した奴だけだと思ったんだ」
アリエル「確かに、そうかもしれませんね」
お父さん「ただいm、誰だね。この人たちは」
お母さん「この人たちはね」
母説明中
お父さん「そうだったのか。いやーすいません、こんな息子に憑かせちゃって」
イフリート「あれ？なんかデジャブ」
アリエル「お母さんと同じこと言ってますね」
優斗「おまえ、そんな頭悪かったのか」

お母さん「それでこれからどうするの」
優斗「どうって、戻れって言ったら消えるし」
アリエル「あ」シュン
イフリート「え」シュン
優斗「あ、消しちゃった」
お母さん「戻してあげたら？」
お父さん「出してあげなさい」
優斗「アリエル、イフリート」
アリエル「あら」シュン
イフリート「戻ったか」シュン
優斗「すまん」
アリエル「別にいいですけど」
お母さん「そしたら、そろそろ夜ご飯にしましょうかね」
お父さん「君達も食べたらどうだい」
アリエル「私たちは食べなくてもいいんですが」
イフリート「食えなくもないしな」
優斗「どうせだから食べてけよ」
アリエル「・・では、頂きますか」
イフリート「そうだな」
みんなでご飯を食べた後
自室
アリエル「とてもおいしかったです」
イフリート「そういえば・・・優斗」
優斗「ん？」
イフリート「お前の中にいるとき、もう一つ俺たちと似たようなものを感じたんだが」
優斗「まさかもう一人いるっていうのか？」
イフリート「いや多分気のせいと思うんだが、一応言っておこうと思って」
優斗「わかった、頭の隅には入れておくよ」
そうして俺は寝た

ベルベットルーム
優斗「ん？」
イゴール「ようこそ、ベルベットルームへ。今回は呼ばせていただきました」
優斗「どうでもいい、寝る」
悠「おい」
優斗「ん？悠か」
悠「話ぐらい聞いてやれよ」
優斗「ん？何でお前実体があるんだ？」
イゴール「私がやらせていただきました。それとそちらにあなた方のペルソナもいます」
アリエル「寝てたら、いつの間にかここにいました」
イフリート「どこだここ」
悠「アリエルにイフリートか」
アリエル「あら、ここでは分かれてるんですね」
イフリート「なんか変な感じだな」
優斗「それより話ってなんだ？」
イゴール「それは貴方の能力のことです」
優斗「ペルソナを現実に呼び出せることか？」
イゴール「それでございます。そして、その能力はワイルドとは別の能力。ですがこれまでその様な能力を持った者はおりませんでした」
優斗「？つまり？」
イゴール「貴方様の能力は、私が見てきた中では初めてなのです。ですからこの能力の名前を付けていかがでしょう」
優斗「そうだな～」
アリエル「では、自分の好きな言葉はどうでしょう」
イフリート「何かを英訳してもいいかもな」
悠「能力から何か、言葉を探してみたらどうだ」
優斗「よし、決まった！」
イゴール「それでは、おきかせください」

優斗「俺の、能力の名前は」

第十七話

「ネーミングセンス？あると思うか？」
優斗「コールだ」
イゴール「コールですか」
アリエル「呼ぶという意味ですね」
イフリート「それなら、いいんじゃねぇか？」
悠「異議なし」
イゴール「では、これからはその能力をコールと呼びましょう」
優斗「ほかに用事はあるか？」
イゴール「いえ、それだけでございます」
優斗「そか、じゃあお休み」グー
悠「はやっ!?」
アリエル「では私達も寝ますか」
イフリート「そうだな」
悠「もう突っ込まんぞ」
みんな寝た
カロリーヌ「私達」
ジュスティーヌ「空気じゃありませんでしたか？」
イゴール「フッフッフ次はどちらが来るか楽しみだ」
朝
優斗「ん？朝か。二度寝しよ」
悠『いや起きろ！」
優斗「うるせぇな」
悠『いいから起きろ」
優斗「はいはい、行くよ」
悠『どこにだ？」
優斗「学校だよ」
悠『今日、日曜だぞ」
優斗「あ」
悠『・・・どうすんだ？』

優斗「・・・ゲームでもするか」
次の日
学校
優斗「おはよー」
蓮「昨日何してたんだ？」
優斗「ゲームしてた」
蓮「そうか、まあいいが」
優斗「今日行くのか？」
蓮「そのつもりだ」
優斗「よし」
放課後パレス
敵の弱点を俺が言い、皆で敵を倒して謎を解きお宝まで来た
モナ「まさか初日で来れるとはな」
スカル「これで盗めばいいのか？」
ジョーカー「このモヤモヤしたのがお宝か？」
パンサー「こんなのどうやって持ってかえるの？」
トゥルース「予告状だよ」
モナ「ああ、本人に危機をわからせるんだ。そしたら欲望が実体化し持てるようになる」
ジョーカー「それじゃあ、とりあえず今日は終わりか」
トゥルース「とりあえずね」
モナ「帰ろう」
トゥルース「にしても女は慣れん」
スカル「もうあきらめたらどうだ」
トゥルース「お前にはわからんだろうな女になる感覚が」
パンサー「そんなに嫌？」
トゥルース「男が女になるなんてありえねぇだろ、それにパンサーがいなかったら俺以外全員男だぞ」
パンサー「あ～そういうことね」
トゥルース「まぁ襲おうとしたら殺すけど」
パンサー「ゑ」

スカル「俺一回頭に銃当てられたぞ」
モナ「トゥルースを怒らすとどうなるかわからねぇ」
ジョーカー「ああ」
トゥルース「まあいい、帰る」
帰った
ＳＮＳ
優斗「予告状は任せる」
竜司「わかった、任せろ」
杏「竜司にできるの？」
竜司「できるよ！」
蓮「まかせるからな」
竜司「おお」
優斗「また明日」
次の日
掲示板に予告状が張られていた。内容は
「色欲のクソ野郎、鴨志田卓殿。抵抗できない生徒に歪んだ欲望をぶつける、お前のクソさかげんは分かっている。だから俺たちは、お前の歪んだ欲望を盗って、お前に罪を告白させることにした。明日やってやるから覚悟してなさい。心の怪盗団より」
竜司・・・そこそこやるじゃん。周りを見るとみんながいた
杏「言いたいことは分かるけど、バカな子が背伸びしてる感ある」
モルガナ「あのマークもイマイチなんだよな」
優斗「今回のは、いっててもしょうがないだろ」
竜司「そ、そうだよな！」
鴨志田「なんだこれは！一体誰がしたんだ」
優斗「本人のお出ましだ」
モルガナ「みろよ歪んだ欲望に心当たりありまくりのリアクション」
竜司「相当効いてるな」
鴨志田「貴様か？コラ！あ？貴様か？」
こっちに来た

鴨志田「お前らだな？」
優斗「だったらなんだ？」
鴨志田「ふん！まあいいお前らはもうすぐ退学だからな」
鴨志田は行った
杏「今日ならいけるんだよね？」
優斗「終わらせよう」
蓮「行こう」

第十八話

「三体目のペルソナ」
放課後・パレスお宝部屋
トゥルース「でっかい王冠だな」
モナ「よしお前ら！もってけ！」
スカル「お前らも持ってくれよ」
トゥルース「今俺、女だから」
パンサー「私力ないから」
モナ「俺は届かん」
スカル「クソ！」
お宝部屋前大広間
シャドウ鴨「ソラァ！」
フォルス「イフリート！」
イフリート「オラァ！なんだテメェは」
シャドウ鴨「今のを弾くとはな」
敵「ハァ！」
敵に王冠を盗られた
スカル「！しまった！」
悠「バカ！」
シャドウ鴨「よくやった、下がっておけ」
敵「ハ！」
シャドウ鴨「これだけは誰にも渡さん!!!!これは、俺様が城主である証明、この世界のコアだからな！」
トゥルース「だから取りに来たんだ」
シャドウ鴨「お前は誰だ？中村がいないようだが」
トゥルース「俺が中村だよ」
シャドウ鴨「お前が中村だと？冗談はほどほどにしとけよ小娘が」
カチャ
トゥルース「おい、今なんていった鴨志田」
モナ「落ち着けよ、トゥルース」

トゥルース「アイツ撃っていい？いいよね？あんな奴やっぱ殺ったほうがいいよ」
ジョーカー「いいから落ち着け」
シャドウ鴨「何言ってるかわからんがこれでも食らっておけ。おいお前らアレ持ってこい！」
鴨志田が化け物に変身した
パンサー「なに!?」
シャドウ鴨「現役の時ブイブイいわせてた、俺の必殺スパイクだ！必ず、殺す、スパイクだ！」
トゥルース「みんな防御しろ！」
シャドウ鴨「金メダル級スパイクだ！」
ドオオオン
スカル「グアァァァ」
ジョーカー「スカル！」
トゥルース「嘘だろ、あまりにも呆気なさすぎる」
シャドウ鴨「お前たちもすぐ逝かせてやる」
ジョーカー「鴨志田ァァ!!」
トゥルース「まて、アリエル」
アリエル「カデンツァ、ディア」
スカル「ん？俺今」
パンサー「スカル!?大丈夫なの!?」
トゥルース「パンサーはみんなを回復してくれ。モナは鴨志田の王冠を上からとってくれ」
モナ「お前はどうするんだ」
トゥルース「俺は、アイツの相手する」
カァァァ
イゴールからもらった銃が光りだした
トゥルース「これは・・・」
ジョーカー「何の光だ!?」
トゥルース「あの時の・・・」
やっぱりそうか。俺は銃を抜き、銃口を鴨志田に向けた

シャドウ鴨「そんなもので俺を倒せると思ってるのか？」
パンサー「そうだよ！もっと他の方法があるでしょ！」
トゥルース「いやこれはこうするんだ」
俺は銃口を鴨志田から俺のこめかみにあてた
シャドウ鴨「自害する気か！したいならするがいい!!」
モナ「おい！やｍ」
パン!!
モナ「な!?」
トゥルース「これでいい」
俺の周りを光の粒のようなものが回りだした。そして真上で何かがうっすっらと出てきた
??「お前が俺を呼び出したのか」
トゥルース「そうだ」
??「力が欲しいか？」
トゥルース「当たり前だ」
??「なら俺の名前を叫ぶといい」
トゥルース「クロノス!!」
クロノス「あんな奴、すぐに倒してやろう」
トゥルース「ザ・ワールド」
どっかの吸血鬼の技だ。誰とは言わん、てか言わなくてもわかるだろう？時が止まっている間に鴨志田の回復手段のトロフィーを盗っておこう
トゥルース「そして時は動きだす」
シャドウ鴨「な、何が起ｋ、トロフィーが！」
ジョーカー「一体どういうことなんだ？」
トゥルース「クロノスは、時の神様だ。もしかしたらと思ってな」
スカル「時間を止めたってのか!?」
パンサー「何それ、チートじゃん」
モナ「今だ！よっと！」
モナが王冠を盗った
シャドウ鴨「な、俺の一番大事な・・・」

トゥルース「鴨志田」
シャドウ鴨「な、なんだ？」
トゥルース「クロノスは時間の神様だ、つまり死ぬ寸前と死んだ瞬間をループさせたらどうなると思う？」
モナ「なんて残酷な奴なんだ・・・」
トゥルース「終わりがないのが終わりってことだ。そうなりたいのか？」
シャドウ鴨「何だと・・・」
みんなで囲んだ
トゥルース「てめーの敗因は、たった一つだぜ、鴨志田、たった一つの単純な答えだ」
全員「テメーは俺たちを怒らせた」
モナ「トドメだ!!」
鴨志田を倒した

第十九話

「杏の決断」

倒れたところを近付くと起き上がり王冠を奪って窓際まで逃げる

シャドウ鴨「ぐっ」

パンサー「どうしたの？逃げないの？逃げたらいいじゃない。運動神経抜群なんでしょ」

シャドウ鴨「昔からそうだ・・・ハイエナ共が、期待という名の押し付けばかり・・・！」

スカル「だからと言ってやっていい訳ないだろうがよ。あんなこと。お前のその歪んだ心、俺らが何とかしてやるよ」

シャドウ鴨「ぬぅ・・・」

パンサー「怖い？今あんたは、志保と同じ景色を見てるんだよ。きっと志保も怖かった・・でも、飛び降りるしかなかった。あんたはどうするの？飛び降りる？それとも、ここで・・・死んでみる？」

シャドウ鴨「う、うぅ・・・」

スカル「おい！これ以上やったら廃人になっちまうぞ」

トゥルース「スカル！信じろ」

シャドウ鴨「やめてくれぇ!!頼む！やめてくれぇぇぇー！」

パンサー「みんなッ・・あんたにそう言ったんじゃないの!?けどアンタは平気で奪ってったんだっ！」

シャドウ鴨「ひいいっ!!」

パンサーが放ったアギは鴨志田の右斜め上に

シャドウ鴨「わ、分かった・・俺の・・負けだ！」

シャドウ鴨は王冠をなげ、ジョーカーが受けとった

シャドウ鴨「とどめを刺せよ。そうすれば・・・現実の俺にもとどめを刺せる・・・勝ったお前らには、その資格がある」

パンサーがまたアギを放った。しかし今度は左斜め上にあたった

パンサー「廃人になられたら、罪が証明できなくなる」

モナ「杏殿は優しいな」

シャドウ鴨「俺は・・・負けた。負けたら、終わりだ。これからど

うすればいいんだ」
ジョーカー「自分で考えろ」
シャドウ鴨「・・・わかった・・・俺は、現実の俺の中に帰ろう。そして、必ず」
鴨志田が光に包まれて消えた
モナ「オイオイ、長話してる暇はないぜ、ここはすぐに崩壊する」
トゥルース「死にたくなかったら全力で走れ！」
パンサー「死ぬ、死ぬ、死ぬってばぁー!!」
スカル「うおっ！」
パンサー「スカルッ！」
スカル「へっ、久々でもつれただけだ！」
トゥルース「早く立て！」
スカル「おう」
後ろの廊下がどんどん崩れていく。必死に走ってパレスを出た
杏「ハァ、ハァ、ハァ・・きっつ」
竜司「ナビ見てみろ！」
異世界ナビ「目的地が消去されました」
杏「・・・本当だ、行けなくなってる」
モルガナ「お宝は!?」
蓮が金メダルを出した
竜司「メダル？」
杏「え、あの王冠は？」
竜司「どうなってんだ？」
モルガナ「鴨志田にとっての欲望の源が、それだったってことだ。奴の中じゃ、このメダルが、パレスで見た王冠くらいの価値ってことだろ？」
竜司「これ、オリンピックのだろ・・・あの変態野郎、過去の栄光ってのに、しがみついてただけってことか」
杏「でも、これで鴨志田の心・・・変わったんだよね？」
優斗「問題ない」
蓮「それじゃあ帰るか」

優斗「バイバイ」
蓮「一個優斗に質問」
優斗「なんだ？」
蓮「あの時ループとか言ってたが本当にできるのか？」
優斗「できると思うぞ。まあやらんけど」
蓮「そうか、それじゃあな」
俺たちは解散しみんな家に帰った
優斗「クロノス」
クロノス「ん？なんだここは!?」
優斗「お前の外の世界の俺の部屋」
クロノス「そうか・・・ではなんの用だ？」
優斗「いや、お礼だよ。お前がいたから、楽に勝てた」
クロノス「私は今日からお前のペルソナだ。好きな時に呼ぶといい」
優斗「じゃあ寝るか。お休み」
クロノス「ああ」
俺たちは寝た

双葉編
第二十話

ほんとに戻った
悠『戻れてよかったな』
面倒だ
女になるのはパレスで十分なのに
まあいい学校に行こう
放課後
どうしよ、なにしよ
メメントスにでも行くか
メメントスきますた
暇だからレベル上げでもしよ
ん？なんか見覚えがあるていうか会いたくなかった奴が
わぁ、真っ黒～
明智「誰かいるのか？」
終わったかも
明智「殺されたくなかったら今すぐ出て来い」
トゥルース「出たら、殺さないのか？」
明智「女か、だがここにいるということはペルソナが使えるんだろ？死にたくなかったら出て来いと言っている」
トゥルース「クロノス、ザ・ワールド」
時間が止まってる間に
明智の横に行って
銃を突きつける
トゥルース「そして時は動き出す」
カチャ
明智「な!?」
トゥルース「形勢逆転」
明智「何のつもりだ？」

トゥルース「こっちのセリフここで何してるんだ？明智」
明智「クソっ知ってるのか」
トゥルース「契約を立てたいんだがいいか」
明智「言わない代わりということか？」
トゥルース「そうだ、取引だ」
明智「条件は？」
トゥルース「人の廃人化をやめろ」
明智「それは俺の存在意義にかかわる」
トゥルース「お前は獅童に利用されて捨てられるだけだぞ」
明智「なに？」
トゥルース「俺らのとこに来る気はないか？」
明智「行くわけがないだろ」
トゥルース「お前は、獅童の息子だろ？」
明智「!!」
トゥルース「それで、獅童から完璧に信じられたときに、裏切る・・だろ？」
明智「そうだ」
トゥルース「だけどその前に獅童の認知に殺される」
明智「なに!?」
トゥルース「予言してやろう。お前は家の校長と奥村フーズの社長を殺せと言われるだろう。奥村だけは殺すな。もし殺したらその時はお前の首をへし折る」
明智「・・・」
トゥルース「気が向いたらで構わんが今言ったことは守れよ」
明智「・・・」
トゥルース「クロノスザ・ワールド」
逃げよう
メメントスから出た
危ない
口から心臓飛び出るかと思った
もう帰ろう

次の日は学校に行った
放課後
竜司「よお」
優斗「なんだ竜司」
竜司「えっとな蓮と一緒にトレーニング行こうかと思ってんだけど。お前もどうだ？」
蓮「来ないか？」
優斗「別にいいぞ」
竜司「じゃあ行こうぜ！」
渋谷セントラル街
トレーニングジム前
優斗「ここか」
竜司「そ、入ろうぜ」
中でトレーニングした
竜司「ブランクあるにしろ何でおれより早いんだ？」
優斗「そりゃ異世界の山で走れｂゲフンゲフン」
蓮「今なんて？」
優斗「何でもねぇぞ」
竜司「いや、今異世界って」
優斗「そりゃ俺からしたらここ異世界だし昨日すごい山見つけたから」
竜司「ホントか？」
優斗「嘘なんてつかん」
蓮「まあいい」
竜司「今日は帰ろう。また明日」
優斗「ああ」
そのあといつも通り蓮を送り帰って一日を終えた

第二十一話

一日目は普通に勉強した向こうの世界の試験が馬鹿みたいにレベル高いから
バカだろアイツマジで
俺一番最初の世界は大学行く前に死んじゃったけど
流石にこんだけ時間あったら
頭良くなるわ
そして二日目
優斗「よう」
蓮「どうした？」
優斗「今日泊まりで勉強しねぇか？」
蓮「一回聞かないと」
ルブラン
惣治郎「勉強か、まあいいだろうずっとあの屋根裏じゃ息も詰まっちまう」
じゃあなんで屋根裏に!?
惣治郎「いっていいぞ」
蓮「わかった、準備してくる」
優斗「おう」
十分後
蓮「いってきます」
惣治郎「おう」
優斗「さっき連絡したらめちゃくちゃ歓迎してたぞ家の親」
蓮「そ、そうか」
夜飯食って風呂入って
その夜
蓮「お前どこしてるんだ？」
優斗「ん？高校三年生の終盤の勉強」
蓮「お前、やりすぎだろ」
優斗「やって損はない」

蓮「それはそうだが、今は今度の中間の勉強したらどうだ？」
優斗「それはそうだけどもうすぐ終わるから」
蓮「終わるのかよ・・・」
悠『今日の夜向こうに行くんだよな？』
行くよ
悠『俺向こういったら外出たいんだけどいいか？」
別にいいぞ
最近お前出す機会ないしお前も何も言わないから
ハッキリいうと忘れそうなんだよ
悠『ひでぇなおい』
蓮「どうした？」
優斗「いや、この問題考えてた。わかるか？」
蓮「わかると思うか？」
優斗「いや分かったら、すごいと思う」
蓮「なら聞くな」
優斗「それはすまん」
12時
蓮「そろそろ寝ないか？」
優斗「それもそうだな」
蓮は客人なのでベッドで寝てもらい俺は床に寝た
ベルベットルーム
カロリーヌ？「・・い！しゅ・・ん、お・・ろ」
何か聞こえる
うるさいから起きよう
ジュスティーヌ「起きましたか？」
優斗「なんだうるさかったのはジュスティーヌか」
ジュスティーヌ「私ではありません。うるさいのはカロリーヌです」
優斗「え？」
ベルベットルームがおかしい
優斗「どうなってんだ？これ」

ジュスティーヌ「あなたと囚人が同時に来たのでこの世界が少し歪んでしまい半分部屋半分牢獄となっています」
イゴール「今蓮様をカロリーヌに起こさせていますが起きないので先にあなたから話しましょう」
優斗「なんだ？」
イゴール「貴方は今ここことは違う。そしてあの現実世界とも違う。いわば異世界に行ってはいませんか？」
優斗「いってるよ」
イゴール「然様ですか。実はその世界にあなたとは別の異端な存在が入りそうなのです」
優斗「それは仲間だったりする？」
イゴール「それは分かりかねますが少なくとも敵意はありませぬ」
優斗「えっと、仲良くなれってことでいい？」
イゴール「それでいいでしょう。では用はそれだけですのでまた」
優斗「ああ、また今度」
そうして俺は眠りについた

第二十二話

今日は理事会だが、まあ、大丈夫だろ
学校に着くといきなり朝礼と言われ
体育館
いきなり朝礼ねぇ
派手な女子生徒「どうせ前の飛び降りの事でしょ」
悠『簡単に言いやがるなぁ』
優斗「ああ、死んでたかもしれないのにな」
そんなことを言っていたら
校長「全校朝礼を始めます。先日、痛ましい事件が起きたのは皆さんもご存じのとおりです。幸い怪我をしたのは足だけということですが、回復にはまだ時間がかかるというとの事です。君たち、未来ある若者に、今一度考えてほしいのは、命の尊さ・・」
ギィィ
鴨志田が入ってきた
校長「鴨志田先生、どうし・・」
鴨志田「私は・・生まれ変わったんです。だから皆さんにすべてを告白しようと思います」
鴨志田は一番前に立つ
鴨志田「私は教師としてあるまじきことを繰り返してまいりました・・生徒への暴言、部員への体罰・・そして・・女子生徒への性的な嫌がらせ・・鈴井志保さんが飛び降りたのは、私が原因です!」
鴨志田は膝をつきまた話し始める
鴨志田「私はこの学校を、自分の城のように思っていた・・気に入らないというだけの理由で退学を言い渡した生徒もいます。もちろん、それは撤回します・・何の罪もない青少年を、酷い目に遭わせて本当に済まなかった・・私は傲慢で、浅はかで・・恥ずべき人間、いや人間以下だ・・」
土下座してこう言った
鴨志田「死んでお詫びします・・!」

校長「鴨志田先生！とりあえず、降りて!!」
スーツの教師「解散、解散!!」
鴨志田「私はッ・・・・！」
杏「逃げるな!!志保だって・・死にたいほどの事件の続きを、ちゃんと生きてる！アンタだけ、逃げないで！」
鴨志田「その通りだ・・まったくその通りだ・・私は、きちんと裁かれ罪を償うべきだ・・私は、高巻さんにも、酷いことをしました。鈴井さんにポジションを与えることを条件に、高巻さんに・・関係まで迫りました。今日限りで教師の職を辞して自首いたします。どなたか、警察を呼んでくれ！」
俺はスマホを手に取り警察を呼んだ
蓮「呼んだのか？」
優斗「ああ」
竜司「マジで呼んだのかよ・・」
スーツの教師「朝礼を終了します！解散！解散して!!」
太った男子生徒「これ・・予告通りじゃね？」
ラフな男子生徒「怪盗って、マジだったってこと!?」
太った男子生徒「鴨志田が、なんかされたのか!?」
ラフな男子生徒「いや、心を盗むとか、ないだろ！」
茶髪の女子生徒「でも、死んで詫びますとか自首しますとか、急に言う？」
派手な女子生徒「バレそうになったんじゃない？自首のが罪軽いんじゃないっけ？」
太った男子生徒「何かあったんだろうな・・」
スーツの教師「教室に戻りなさい！」
朝礼後
体育館
杏「本当に・・心が、変わっちゃったんだね・・」
竜司「みたいだな。でも、これでよかったのか？」
蓮「わからない」
竜司「同感だ、俺もわかんねぇ」

三島と女子二人が来た
竜司「なんだ？」
三島「高巻さん・・ごめん！」
杏「え？」
三島「俺たち知ってたのに・・見て見ぬふりしてた」
背の高い女子生徒「高巻さん、私、誤解してて・・変な噂広めちゃって・・ごめん！」
黒髪の女子生徒「私、全然、知らなくて・・鴨志田に、無理やり迫られてたんだね・・辛かったね・・！」
背の高い女子生徒「謝りたいって思ってる子きっと、たくさんいると思う。ごめんね・・！」
杏「ううん。いいの、私だって・・それに・・全部済んだ話だから・・・」
スーツの教師「おい、そこ！早く戻れ！」
背の高い女子生徒「じゃ、じゃあ・・」
三島たちは戻っていった
竜司「心が変わったのは・・どうも、鴨志田だけじゃねーみてーだな。」
杏「いいよ、私のことは・・鴨志田に、志保の事謝らせてやった。私、それだけで・・」
竜司「なら、早く報告してやれよ」
杏「・・そうだね」
放課後
屋上
竜司「ビビったわ・・マジで改心だったな・・聞いた通り廃人化もなかったし、白点満点だぜ！」
モルガナ「ああ、パレスが消えても、廃人化は起きないってことだろ・・？シャドウが死ぬ前に本人に返せばいい
つまり廃人化は起きないって訳だ」
竜司「つまり、ちゃんと自白だけ狙えるってことだな？面白れぇじゃねぇの！」
杏「声でかいから」

竜司「大丈夫だって。つーか、どうだった？見舞い・・」
杏「少しだけ話して、鴨志田が、自分のしたこと認めたよって・・・志保に、言えた・・！志保・・私にごめんねだって、私が志保のために鴨志田にこびてたの、バレちゃってたみたい・・謝りたいの、私のほうなのに」
モルガナ「悪いのは鴨志田だぜ」
杏「そうだね・・志保のお母さんが、回復したら、転校させようと思うって。セクハラとか、自殺未遂とか・・やっぱレッテルついて回るし。志保も、そうしたいって言ってるみたい」
竜司「寂しくなんな」
杏「でも、私もそれがいいと思った・・ここにいたら、きっと辛いし」
竜司「いつだって会えんだろ・・生きてりゃ、さ」
杏「私も・・変わんなきゃ」
竜司「にしてもお前、鴨志田のシャドウ・・よく我慢したな？」
杏「私はただ・・鴨志田に、直接謝らせたかったって言うか・・」
モルガナ「杏殿は優しいんだよな」
竜司「クズ相手でも廃人化は目覚めが悪いか」
杏「いや、違うけど？改心させたほうが、復讐になるなって思って。アイツのしたこと考えれば、生きてる間、永遠に頭下げ続けることになるじゃん？世の中、死ぬよりもつらい罰もあるなって思っただけ」
竜司「あれ？そういえば優斗もそんなこと言ってた気がするんだが？」
優斗「言ったよ」
竜司「ま、ともかく、一件落着だけどよ・・そういや一つ気になってんだ。あの城の事。あんなへんな異世界が、何で鴨志田にだけあったんだ？」
モルガナ「別にあの鴨志田に限ったことじゃない。欲望で心に歪みが起きてる奴なら、誰でも持ち得るモノさ」
杏「誰でも・・」
モルガナ「確かめてみるか？」

竜司「い、いまはいい。しばらくは大人しくしてねえと。鴨志田の事、また騒がれるだろうしな。ま、パレスでやったこと調べるなんて、ぜってー不可能だろうけどよ」
杏「そのことだけど・・あんたたち、もう変な噂立てられてたよ。結託して、鴨志田に暴力まがいの脅迫したって・・」
優斗「やろうと思えばできるぞ」
竜司「やらんでいい！てかなんだそりゃ!?」
杏「さすがに怪盗が実在するなんて、そうそう信じないでしょ。予告状は、鴨志田の悪事を知ってた誰かの悪戯ってことになってるみたい」
竜司「そりゃそうか・・やった本人でも信じ切れてねぇし」
杏「ひとまず、今後のことは、事態が落ち着いてから相談だね」
竜司「とりあえず、このメダル、いくらで売れるか確認しよーぜ？こんなの、とっとと売っぱらっちまったほうが良いだろ」
調べ中
竜司「お、出た！って三万!?メダルの価値って三万かよ!?」
杏「覚えてるー？中学の時に貸したお金」
竜司「いや、三万も借りてるわけねえだろ！」
杏「利子がついてたらこんなもんじゃない？」
竜司「おい！」
杏「誰も全部もらうなんて言ってないでしょ。てか、何年も返さないほうが悪いし！借りたものは返すって常識だし！」
竜司「くっそ・・」
優斗「竜司・・自業自得だぞ・・」
竜司「わかってるわ！」
モルガナ「事態を見守るってのは賛成だ。しかしな、ワガハイを巻き込んでおいて、作戦成功の祝杯を挙げないなんてナンセンスだ」
竜司「こんなキメェ金なんて、パーッと使っちまうのもありだな？」
モルガナ「怪盗の相談は美食の席でと決まってる。どうだ？」
杏「ちょっと、それ・・まぁ、いいか。だったら行きたい所があるんだけど」

竜司「どこだ？」
杏「志保と行きたいって、前から言ってたこと」
竜司「俺は借金あるし、文句は言えねぇ。お前らも、杏が決めた場所でいいか？」
優斗「俺は良いぞ」
蓮「それでいい」
モルガナ「ワガハイも杏殿に任せる」
杏「じゃあ後で確認しとく」
竜司「いつ行くよ？さっそく明日にでも繰り出すか？」
杏「連休の最後にしない？次の日からの学校生活に備えて、勢いつけるって意味で」
竜司「ってことは、五日の子供の日だな」
杏「で、換金は誰がやるの？」
モルガナ「任せとけ。なんでも買い取る店を知ってる。そうだよな、蓮」
蓮「あそこか」
モルガナ「ああ、あそこなら買い取ってくれるだろう」
杏「じゃあ、お願いね！」
一日が終わり
次の日は勉強して終わった
ＳＮＳ
優斗「蓮、覚悟しろよ」
蓮「何がだ？」
優斗「試験だよ」
ＳＮＳ終わり

第二十三話

一日目は何事もなく終わった
二日目
昼
バイキング
竜司「うまっ・・！」
モルガナ「さすが、杏殿の選んだ店・・・！」
杏「そりやそうだよ。有名なホテルだよ？そういえば、学校に警察が聞き込みにくるらしいよ」
モルガナ「厄介だな」
竜司「絶対、俺らの名前、出ちまうよ。鴨志田のことで妙な噂されてるし・・・けど、学校のやつら盛り上がってるぜ！怪盗がホントに心盗んだってな。マジで信じちゃいねーだろうが、中には、割と本気で感謝してるやつもいる。見ろよ。」
竜司がスマホを開き見せる
杏「怪盗お願いチャンネル・・・？怪盗よくやった・・・これで私も頑張れる・・・勇気をくれて、ありがとう」
竜司「ちょっとうれしくね？」
杏「今まで自分の事で精一杯だったけど、こんな風に言われると・・・なんか不思議」
竜司「なぁ、これからどうする？」
優斗「とりあえず時間まで食う」
蓮「それに限る」
みんなで食べる・・食べる・・食べまくる
なんとか食べきる
モルガナ「く、食った・・・」
竜司「お、おうよ」
優斗「トイレ行ってくる」
竜司「俺も・・」
モルガナ「ワガハイもだ・・た、頼む・・・そっと運んでくれ」

通りかかった男女が
上品そうな女性「ちょっと見て、あのテーブル・・・」
裕福そうな男性「大目に見てあげようじゃないか。普段、ロクな物を食べてないんだろう、きっと」
ヤバい
ガタッ
俺がたったら
ムカつく男女は少し驚きこういった
上品そうな女性「な、何!?」
裕福そうな女性「な、なんだ!?何か言いたいことでもあるのか!?」
杏「問題なんて起こさないでよ」
優斗「いや、普通にトイレ」
杏「あ、そう」
優斗「お前らもやばいんだろ、速く行ったほうが身のためだ」
竜司「そうだな、行こう」
一階のトイレ後
エレベーター前
モルガナ「まだ腹がつっぱてる」
竜司「レストランの階のトイレ、清掃中でマジ焦った・・」
モルガナ「吐くまで食うって豪語してホントに吐くとか・・馬鹿なのか?」
竜司「お前もだろうが」
優斗「とりあえず戻るぞ」
そしたら後ろから掴まれどかされた
竜司「・・ッ!はあ?」
獅童「事件の事、まだ掴めんのか」
スーツ姿の男「は、はあ・あの、何故そこまでご執心で?正直、気にされるほどの事では・・」
獅童「貴様の意見などいい!急げと言ったら急げ、この無能が!」
一応スマホの録音機能つけとこう
竜司「フツーに割り込みだろ!」

スーツ姿の男「・・・なにか？」
優斗「いきなりどかして割り込むなって言ってんだよ」
スーツ姿の男「急いでいる」
優斗「だから？」
獅童「しばらく来ない間に客層が変わったな。託児サービスでも始めたか？」
優斗「やっぱお偉いさんって大体わがままで傲慢で力でねじ伏せて、何でもしていいと思ってるもんなんだな」
獅童「なんだと？」
優斗「そういうやつがたくさんいるから国がダメになっていく」
獅童「・・・何が言いたい」
優斗「あんたみたいなやつが上に立つところなんていたくないってこと、自分でしたことを止められて逆切れして罪積ませる奴なんか」
獅童「なんのことだ？」
優斗「俺はあんたに家を放火された。そっちの連れはあんたを止めて警察に連れてかれお先真っ暗ってこと」
蓮「なんだって？」
優斗「まだ気づかないのか。お前の仇はこいつだぞ」
蓮「・・・確かに、こんな声だった気が」
獅童「・・・・一体何をボヤいているのか知らんが、こいつらをどうにかしろ」
俺たちは殴られ
獅童たちはエレベーターに入っていった
竜司「てめぇ、殴んじゃねぇ!!」
優斗「ようし」
蓮「どうかしたか？」
優斗「今の全部録音しておいた」
竜司「マジか」
優斗「殴られた音もしっかり入ってる」
蓮「それを、どうするつもりだ？」
優斗「ネットにあげる。拡散希望とか付けたら勝手に広がる気が付

いた時には手遅れってことだ」
竜司「マジかよ、えげつねぇ」
優斗「語彙力なくなってるぞ・・・よし上げたお前らも拡散しといてくれ。これが本物の獅童って題名」
モルガナ「とりあえず戻るか？」
蓮「だな」
戻って話していると
怪盗団の名前を決めようみたいな流れになった
蓮「そうだな・・・ザ・ファントムとかはどうだ？」
杏「いいじゃん、それ」
モルガナ「ルーキーにしては良い案だ」
優斗「シンプルでいいな」
そしてルールを決めた。全会一致で行くとのことだ
次のターゲット
原作は班目だが・・・
双葉行きたいな
優斗「次のターゲットだが」
竜司「誰にするんだ？」
優斗「実は、目星がついてる」
杏「有名な人？」
優斗「いや、身近な人」
モルガナ「パレスはあるのか？」
優斗「確認済み」
蓮「誰なんだ？」
優斗「佐倉双葉・・・蓮のとこのマスターの娘だ」
蓮「娘・・・？いたのか」
優斗「ああ、有名な人じゃないから表ざたにもならない。それに必要な仲間だ」
竜司「仲間になるってことか？」
優斗「攻撃はしないがサポートがすごい」
杏「サポート？」

優斗「攻撃力を上げたり回復したりな。だから早めに仲間にしたいしパレスを攻略しやすくなる」
モルガナ「その前に行きたいところがあるんだが」
優斗「メメントスは双葉がいたほうが断然楽だ」
モルガナ「そ、そうか」
蓮「メメントス？」
青年説明中
竜司「そんなとこがあんのか」
杏「そこに行く前に仲間にしたほうが良いと」
優斗「ああ、でも今日はやめておく。時間的に」
モルガナ「だな今日は早く帰って明日会おう」
俺たちは帰った

第二十四話

放課後
いこうぜ
双葉の家
佐倉家前
杏「ここ？」
優斗「ここ」
ピンポーン
杏「あ、ちょっちょっと！」
優斗「マスターはルブランにいるから」
・・・・・
来ないな
開いてたりしてまさかｎ
ギィィ
蓮「開いてるのか!?」
まさか扉まで開いてるなんてことｈ
ガララララ
優斗「もしかしたら、ヤバいかもな」
竜司「空き巣とかか？」
優斗「よし、イフリート、アリエル、クロノス頼む見てきてくれ」
見に行かせたが
怪しいやつはいなかったらしい
優斗「よし上がろう」
竜司「いや、ダメだろ」
優斗「俺は行くぞ」
二階に上がった
コンコン
ドン、ガン
双葉「痛っー」
グラッ

双葉「へ？」
ドンガラガッシャーン
優斗「やらかしたかも」
蓮「音ヤバかったぞ」
優斗「おーい双葉ー」
双葉「な、なんだ!?お、お前たちは誰なんだ!?」
優斗「俺たちは、心の怪盗団というものだ。お前を助けに来た」
双葉「助ける？どういうことだ？」
優斗「お前死にたがってるんだろ？」
双葉「・・・」
優斗「お前はここでこのまま死のうとしてる違うか？」
双葉「・・・」
優斗「ハッキングしてＳＮＳで話していいから」
ピコン
さすがだな
ＳＮＳ
双葉「なぜ知ってる？」
優斗「俺は異世界から来た」
双葉「信じると思うか？」
優斗「お前の母親はいきなりおかしくなって道路に飛び出し死んだ」
双葉「そうだ・・・」
優斗「それをお前は遺書を読み自分が殺したと思っている。違うか？」
双葉「違わない」
優斗「その時研究資料を盗まれたそうだな認知訶学の」
双葉「ああ」
優斗「だがお前は騙されてるぞ」
双葉「なに？」
優斗「お前の母親はホントにお前を憎んでいたか？よく思い出せ」
双葉「・・・・無理だ」

優斗「なぜだ？」
双葉「思い出したくない」
ＳＮＳ終わり
優斗「なら仕方ない」
蓮「どうするんだ？」
優斗「パレスに入る前に欲しいのがある」
竜司「なんだ？」
優斗「水」
杏「水？」
優斗「紙コップもな」
準備してパレスに入る前
優斗「よし準備は整った」
杏「何に使うの？２Ｌ二本と紙コップって」
優斗「絶対感謝するからな」
俺は異世界ナビを開きこういった
優斗「佐倉双葉、佐倉家、墓場」
異世界ナビ「発見しました。ナビを開始します」
パレスに入るとそこは
杏「砂漠かい！」
竜司「あちぃぃ」
優斗「だから言ったろ水がいるって、向こうのピラミッドまで行くぞ。モナ車なって」
モルガナ「はいよ」
モナには車になってもらい連れてってもらった
着いた
優斗「ちょうど切れたな」
竜司「ここが、あの家なのか？」
優斗「そうだ。早く入ろう干からびる前に」
入って長い階段を登っていると
モルガナ「ん？誰かいるぞ」
竜司「もしかして、こいつ・・」

優斗「双葉のシャドウだな」
シャドウ双「誰だお前たち」
優斗「俺たちはお前を助けに来た」
シャドウ双「必要ない私はここで死ぬ」
優斗「そうさせないために来たんだよ」
シャドウ双「とれるものなら取ってみろ」
ゴゴゴゴゴゴゴゴ
優斗「みんな急いで振り返ってダッシュ！」
道を塞ぐくらいの大きな石が落ちてきた
皆「ギャー!!」
何とか避けたが道を閉ざされてしまった
パンサー「あれ？いつの間にか怪盗服になってる」
トゥルース「おーい双葉ー!!」
ジョーカー「それで来るのか？」
シャドウ双「なんだ？」
スカル「来るのかよ！」
トゥルース「頼むってあの扉全部開けてくれるだけでいいからさ～」
シャドウ双「じゃあ取引だ」
パンサー「取引？」
シャドウ双「近くの町にいる盗賊にモノを盗まれた。取り返してほしい帰ってきたらいいものをやる」
トゥルース「よし、行くぞ。ちゃっちゃと終わらそう」
町の広場
トゥルース「どこだよ！」
盗賊「よお、兄さんら、探しもんかい」
トゥルース「そうそう、ちょうど盗賊を探して・・・ってお前だよ!!」
盗賊「なんだよ、俺を捕まえに来たのかい。じゃ逃げるとするかな」
逃げられた
トゥルース「よしあとは簡単だクロノス、ザ・ワールド」

時間が止まった
今のうち
盗賊を見つけたので持ってきた
トゥルース「そして時は動き出す」
盗賊「おや？ここは」
トゥルース「ジョーカーあれやらないか？」
ジョーカー「今か？」
トゥルース「スカルたちちょっとあっち向いててジョーカー恥ずかしがってるから」
スカル「？おう」
スカルたちは反対方向を向いた
トゥルース「気に入らない奴は？」
ジョーカー「そうだな」
トゥルース＆ジョーカー「とりあえず、ぶん殴る!!」
トゥルース「この辺り？」
ジョーカー「そう、そこだ」
トゥルース＆ジョーカー「ここが一番、拳を叩きこみやすい角度!!
オラオラオラオラオラオラオラァ」
イフリートとアルセーヌでラッシュ
トゥルース「やれやれだわ」ジョーカー「やれやれだ」
盗賊は消えてアイテムを残していった
トゥルース「決まったじゃんか」
ジョーカー「二度とやらん」
スカル「おわったか？」
トゥルース「ああ、もういいぞ」
盗まれたパピルスを手に入れ
戻った
シャドウ双「戻ったか、見つかったのか？」
トゥルース「これでいいんだろ？」
シャドウ双「ご苦労、じゃあそれをお前たちにやる」
トゥルース「これ、地図だろ？」

シャドウ双「そうだ」
トゥルース「で、下に落とすんだろ？」
シャドウ双「ああ」
パンサー「は？」
バタン
俺たちは落とされた
そして地下迷宮は難なく攻略
ピラミッド内攻略中
扉を開けるギミック三つを難なく攻略し
一番奥まできたが
モナ「やっとここまで来たか」
優斗「ちょうどガス欠だな」
モナ「このでっかい扉見覚えがあるな？」
シャドウ双「ここまで来たのか・・お前たちならどうにかなるかもしれないな」
トゥルース「アイツの部屋だろ」
パンサー「あっそうだ！」
スカル「じゃあまた明日ってことか」
ジョーカー「そうなるな」
トゥルース「熱いし帰るか」
パレスを出た

第二十五話

よし行こうじゃないか
放課後
優斗「また入るぞ」
杏「また入るのね」
優斗「予告状はどうだ？」
竜司「しっかり作ってきた」
優斗「おし、行くぞ」
部屋前
優斗「双葉ー開けてくれ」
双葉「ま、また来たのか!?」
優斗「そうだ、また来た。入れてくれ」
双葉「何でだ？」
優斗「お前がここを開けて出てきてくれたら、助けられる」
双葉「頼むって言われても」
優斗「よし、お前が出てきてくれたら、すごいの見せよう」
双葉「すごいの？」
優斗「普通じゃありえないの」
双葉「わかった」
ギイィィ
思ったより簡単に開いた件
双葉「すごいのってなんだ？」
俺はイフリート達を呼んだ
双葉は目が輝いてたよ
初めて星空を見たときみたいに
優斗「あ、あとこれ、読んどいて」
双葉「なんだこれ？」
優斗「予告状・・まあ、読むだけでいいよ」
双葉「わかった」
優斗「じゃあまた今度」

俺たちは佐倉家を出てパレスに入った
奥に来た
優斗「開きそうだな」
ゴゴゴゴゴゴゴゴ
開いた
優斗「行くぞ、さっさと終わらそう」
途中で気になることがあったので聞いてみた
優斗「そういえば、リーダー決めてなくね？」
蓮「そういえば、そうだな」
優斗「俺は蓮がいいと思う」
杏「私も」
竜司「俺も」
蓮「全会一致ね」
リーダーは蓮になったとさ
最高階
スカル「よし、ここでいいのか？」
モナ「なんか、あるぞ」
パンサー「よし、早く持って帰ろう！」
ゴゴゴゴゴゴゴゴ
トゥルース「！ヤバいぞ」
上のところに穴が開きそこから
大きな目がこちらを見ている
化け物「フゥウタァァバァァァ！」
モナ「誰だあいつは！」
スカル「双葉じゃねぇぞ！」
そして周りが崩され
化け物の全体が見えた
スカル「こいつ、シャドウじゃないなら、なんなんだ!?」
モナ「こいつは・・認知だ！」
トゥルース「こいつ、あのギミックの絵で見た奴に似てるぞ・・確かあれは」

パンサー「来るよ！」
トゥルース「思い出したぞ！こいつは双葉の母親だ!!」
パンサー「来るってば！」
トゥルース「とにかく！あいつは飛んでるから物理が効かねえ。だが弱点も耐性もない一番強いの叩きこめばいい！」
パンサー「さっき覚えたばっかのこれを食らえ！アギラオ！」
スカル「俺も！ジオンガ！」
モナ
覚える順番もでたらめになってるみたいだが今好都合だ
トゥルース「俺も使おうか、イフリートはアギラオ、アリエルはコウガ、クロノスは指弾」
全部当てたがあまり減らせてないらしい
トゥルース「なかなか効いてなさそう」
モナ「どうすんだ!?」
トゥルース「どっちかが削りきれるまでやるだけだ」
双葉「なんだここ？」
パンサー「双葉!?入ってきたの？」
双葉「あれは・・・」
低い男の声「お前が殺したんだ！」
双葉「ひっ・・」
鋭い男の声「黙ってないで何か言え！」
甲高い女の声「貴方のせい！」
双葉「私のせいで・・私のせいでお母さんが・・」
認知存在イッシキワカバ「そうだ！お前が私を殺した！」
モナ「欲望と罪悪感が認知を歪ませたんだな。死んだ母が生き返ってほしいという願いと、気味悪い罵声が入り混じっている」
認知存在イッシキワカバ「私の邪魔をする、鬼子め！お前さえいなければ！時間を削られることなく、成果を発表出来てたのに！私が心血注いだ、正規の発見を！死ぬのよ！お前は、嫌われ者！生きてる意味なんてない！誰にも必要とされてない！」
双葉「誰も私の事なんて・・・」

大人の男「・・双葉なんて生まなきゃよかった・・鬱陶しかった・・お母さんは、双葉ちゃんのことで悩んでたみたいだね・育児ノイローゼだったんだろう・・」
双葉「う、うぅ・・」
若い女性「うっ・・あ、あああああ・・！・・ふ、ふたばぁあああああ・・あ、あなた、わあああああ」
双葉「ううぅ・・」
スカル「おい、このままじゃヤベェぞ！」
トゥルース「お前は、誰にも必要とされてないと思ってるのか？」
双葉「！」
トゥルース「俺たちは、必要としてるんだがな。俺たちにはお前の力が必要なんだよ」
シャドウ双「佐倉双葉！思い出せ！自殺したのは、お前のせい。研究を邪魔したから。なぜ自殺だと思った。そこのやつが言ってたはずだ」
トゥルース「そこのやつて」
双葉「・・遺書」
シャドウ双「そうだ・・黒い服の大人に見せられた遺書だ。何が書いてあった？」
双葉「私への、恨み」
シャドウ双「お前は、辛くて、ショックで、目をそらした。だが、黒い服の大人は、延々と読み上げた。大勢の親戚の前で」
トゥルース「みんなの前で読むには酷すぎるだろ？そんなこと、わざと以外ですることなんかあるわけないだろ」
シャドウ双「そうだ、良く考えろ。あの遺書は本物か？本当に大好きなお母さんが書いたのか？」
トゥルース「そんな酷いこと一度でも言われたのか？」
双葉「ない！私がワガママ言ったときは怒られたけど、優しかった！」
シャドウ双「ならばあの遺書は？」
双葉「真っ赤な偽物だ！」

シャドウ双「お前は利用されたんだ！遺書を捏造し、死を擦り付け、幼い心をを傷つけ踏みにじった！怒れ！クズみたいな大人を許すな！」
双葉「わたしが自分自身と・・お母さんの死と、ちゃんと向き合わなかったせい！何で私、あんなこと言われなきゃならなかったの！」
ネクロノミコン「・・お前を否定するのものは幻影・・心無きものが施した呪い・・・もとよりお前は知っていた・・知っていながら怯えてきた」
双葉「・・・そう、知ってた。でも私・・」
認知存在イッシキワカバ「お前のせいで私は・・！今度は、お前が死ねッ!!」
ネクロノミコン「・・いわれた通りお前は死ぬのか？お前はどちらに従う？幻が吐く呪いの言葉か？お前自身の魂か？」
認知存在イッシキワカバ「お前のせいだ！全部！お前のッ！」
双葉「私は、もう、歪んだ上っ面なんかには騙されない・・他人の声にも惑わされない・・自分の目と心を信じて、真実を見抜く。お前なんて、お母さんなわけない！腐った大人が創った偽物だっ！ぜったい、ぜったいにっ・・！許す、もんかっ！」
そのとき双葉の後ろから双葉のシャドウが出たかと思うと
それがおおきなＵＦＯになった
パンサー「何、あれ！」
トゥルース「ペルソナだろ！」
したから
触手？が出てきた
双葉が掴まれて
へんな妄想すんなよ？
上に連れてかれた
ＵＦＯから声がする
双葉「手伝って、あいつやっつける」
ジョーカー「ああ！」
双葉「ここは私の心の世界だ！自分の心の歪みの一部ぐらいハック

出来る！」
そういい双葉はバリスタを作った
双葉「これで撃ち落とせ！そっからボッコボコにするぞ！」
モナ「なるほどな！やってやるぜ！」
トゥルース「みんな、作戦がある」
スカル「それはな？」
モナ「技の合体!?」
トゥルース「ワンチャンあるかなって」
スカル「やってみようぜ！」
パンサー「成功したら強そうじゃん！」
ジョーカー「やるか」
モナ「みんなやる気か」
トゥルース「スカル、バリスタは頼んだ」
スカル「おうよ」
バリスタの矛先を調整し撃って当たった」
認知存在イッシキワカバ「ガアアァァ」
落ちてきた
認知存在イッシキワカバ「くううっ！お前ら・・よくも・・！親に逆らう子供は・・死ねーッ！」
トゥルース「お前は消えろ、行くぞ」
皆「おう！」
ジョーカーが銃を構える
撃った瞬間に弾道に乗せてみんなのガルーラ、アギラオ、ジオンガを撃つそして俺は指弾を乗せた
全部が合わさり
ワカバの眉間を撃ち抜いた
そしてワカバは一番下まで落ちて行った
スカル「よっしゃあ！倒したあああぁぁ！」
双葉「なんじゃこりゃあ！」
トゥルース「怪盗服でいいんかな？」
本物の若葉が現れた

スカル「また出たっ!?」
双葉「お母さん!?」
トゥルース「あの人は本物だろうな」
パンサー「え？」
若葉「双葉。本当の私の事、思い出してくれて、ありがとう」
双葉「ワガママ言って、ごめんなさい。お母さん・・」
双葉が歩み寄ると
若葉「こっちに来てはダメ。あなたの居場所は、ここじゃないでしょ？」
双葉「せっかく、会えたのに・・」
若葉「またワガママ？」
双葉「・・あの、わたし、お母さん、大好き・・」
若葉「私もよ、双葉。ほら、行きなさい」
若葉は消えて行った
トゥルース「それじゃあ帰るか！」
双葉「だな」
パンサー「モナ、車になって」
モナ「よし、無くなる前に急いで帰るぞ！」
パレスを出た
ルブラン前
竜司「おい、生きてるか？」
優斗「なんとか」
杏「大丈夫」
蓮「問題ない」
双葉「多分」
ルブランから惣治郎が出てきた
惣治郎「なんだ、今の音？って双葉!?」
双葉「惣治郎・・」
惣治郎「なんだお前たち、知り合いだったのか？」
優斗「そうなんですよ。風の噂で佐倉さんとここにトラウマで引きこもってる娘がいるって聞いて行ってみたら会いまして、外に出れるよ

うになる手伝いしてたんですよ」
惣治郎「そ、そうなのか？」
双葉「そ、そう！今はここまでしか来れないけど」
惣治郎「そうだったのか、とりあえず入れ」
双葉「話しよせてよかったんだよな？」ボソッ
優斗「あざっす」ボソッ
ルブラン店内
惣治郎「コーヒーでいいか？」
竜司「すいません、俺ちょっとコーヒーは・・」
惣治郎「じゃあコーラにするか？」
竜司「コーラでお願いします」
惣治郎「はいよ」
双葉「ちょっと気になってたんだが、お前いたか？」
優斗「俺？」
双葉「なんか女の子一人いたよな？ここにはいないけど」
優斗「それが俺なんだ」
双葉「・・・マジで？」
優斗「マジで」
双葉「どうやったらそうなるんだよ」
優斗「もう戻れねーし受け入れたほうが楽なんだよ」
双葉「そっか」
優斗「ところでさ、これからどうするんだ？」
双葉「何が？」
優斗「俺たちと一緒に怪盗するか？」
双葉「しようと思う」
優斗「そうか。これからもよろしくな」
惣治郎「何話してんだ？」
優斗「いや、なんでもないです」
コーヒーを出してくれた
優斗「ありがとうございます」
惣治郎「いや、こっちも双葉にあまり親らしいことできなくてな。

お前らにしてもらってた。お礼だ」
みんなで駄弁ってるとこんな話が出た
杏「また今度、お泊り会とかしてみない？」
優斗「誰の家だよ」
竜司「家は無理」
杏「私も」
蓮「家は・・」
惣治郎「できればやめてほしいんだが」
双葉「無理だ」
優斗「家は分からんな」
杏「聞いてみたら？」
電話を掛けた
即答でＯＫされた
優斗「ＯＫだって」
惣治郎「ちょっと待て、双葉は大丈夫なのか？」
双葉「皆とならいけると思う」
優斗「家こっから近いですから何かあったらすぐ帰ってきますよ」
惣治郎「そうか」
竜司「明後日にするか？日曜だし」
優斗「じゃあみんな解散するか」
そして俺は帰って寝た
夢？
神様「どうじゃ、行ったり来たりの生活は」
優斗「あんた神様か、自分で行くって決めた時に行きたい感はある」
神様「そうか・・よし、そうしてあげようじゃあないか」
優斗「どういうことだ？」
神様「寝る前に声に出して行くって言ってから寝ると行けるようにしたぞ」
優斗「無駄にありがてぇな」
神様「今日は行くのか？」
優斗「今日は行こうと思う」

神様「それじゃあの」

班目編
第二十六話

向こうの世界は修学旅行が終わったので
帰ってこっちに来ました
日曜
ルブランに全員集合しましたとさ
杏「皆、集まった？」
竜司「おう」
杏「忘れ物は？」
蓮「ない」
杏「双葉は行ける？」
双葉「行ける！」
杏「出発！」
自宅
母さん「いらっしゃ～い」
杏「今日はありがとうございます」
母さん「こんな人数のごはん作るのって久しぶりだから腕が鳴るわ」
優斗「それなりに頼む。俺の部屋行くか？」
自室
杏「思ったより、広い」
双葉「いきなり来るのは、ちょっとヤバかったかも」
蓮「大丈夫か？」
双葉「一泊二日だし、いつでも帰れるから大丈夫・・・多分」
竜司「多分!?」
優斗「とりあえず、試したいことがある、蓮にはもうやったが」
杏「やりたいこと？」
優斗「手、貸してくれ」
双葉「手？いいぞ」

手を貸してくれた
優斗「よし、ネクロノミコン」
ネクロノミコン「なんだ？」
双葉「え？」
竜司「俺らも出せるのか!?」
優斗「手」
竜司「おう」
優斗「杏も」
杏「え？あ、うん」
優斗「キャプテンキッド、カルメン」
キャプテンキッド「呼んだか？」
カルメン「ここはどこ？」
竜司「おお～う!!」
杏「出た！」
アルセーヌも出しましたよ
みんなのペルソナ同士で自己紹介したり
自分のペルソナと話したりしましたわ
ご飯も食べて
風呂も入った
後はもちろん
優斗「怖い話だろ」
竜司「いきなりどうした？」
優斗「怖い話しようぜ」
杏「いいね！面白そう」
優斗「意味が分かると怖い話でもするか」
モルガナ「俺、そういうの苦手なんだが」
竜司「なんだ？怖いのか？」
モルガナ「こ、怖い訳ねぇだろ！いいぜ！聞いてやる」
優斗「よしまずは、これだな」
飛ばしても構いません
小学校に入る前の娘と遊園地に行った。入り口には看板が貼って

あって、楽しんでねと書かれていた。まだ字が読めるようになったばかりの娘が、まじまじとその看板を見ていて微笑ましかったジェットコースター、観覧車、コーヒーカップ、と色んな乗り物に乗ったが、しかしどうにも娘はそわそわして楽しんでいる様子がない。俺はせっかく遊園地に来たんだから入り口に書いてあるようにしないと駄目だぞ、というとやたら暗い顔になる。まだ遊園地は早かったのかもしれない。仕方ないから帰ることにした。そして娘はその日自殺した。俺は今でも自分を許せない

竜司「自殺したのかよ」

モルガナ「十分怖いんだが」

優斗「確かに話自体が怖かったかもな」

双葉「わたし、分かった」

優斗「さすがだけど、まだいうなよ」

蓮「う～ん、なんだ？」

優斗「ヒントいるか？」

竜司「頼む」

優斗「娘はまだ字が読めるようになっただけだ」

杏「あ、わかった」

蓮「俺も」

竜司「嘘だろ!?もう一個、もう一個頼む」

優斗「漢字は読めるのか？」

竜司「そういうことか！」

正解は楽しんでねを

楽が読めなくて

しんでねだけ読んだから

自殺してしまったでした

その後四個ぐらいして

寝た

夢

神様「起きなさい」

優斗「なんだテメエ」

神様「わしの扱い酷くない？」
優斗「そっか？」
神様「こんな人数連れてこようとして、制服買ったり、戸籍作ったり、家買ったり、入学したりするの結構大変なんじゃぞ」
優斗「家？」
神様「この人数で男と女が同じ家は駄目じゃろ。だからお隣さんのとこ買っておいたから、そこ分かれて使って、鍵はリビングに置いておくから」
優斗「あざっす」
もっかい寝た

第二十七話

蓮「優斗「朝か・・・そうだった。皆泊まりに来てたんだった」
蓮「もう朝か」
優斗「起きたか」
竜司「ん？あ、戻ってる！」
杏「え？本当！中村君の部屋じゃん！」
双葉「うるさいぞ～起きちゃったじゃん」
皆超久しぶりだなあ～
ジョジョに残りすぎたな
優斗「とりあえず・・学校行くか」
蓮「だな」
朝飯食べた後
杏「よく考えたら、明後日試験じゃん！」
優斗「大丈夫、向こうの世界のが難しいから」
竜司「え？向こうのがきついの？中学だぜ？」
優斗「あの理事長覚えてるか？」
蓮「ああ」
優斗「あいつが馬鹿みたいに難しくするから」
竜司「じゃあなんだ？向こうのほうが難しいと？」
優斗「覚悟しとけよ☆」
双葉「私もヤバいじゃん、てか時間大丈夫なのか？」
優斗「じゃあ、カオス呼んで・・」
蓮「カオス？」
優斗「あ、そういえば、こっちは知らないのか。俺実はまたもう三個行かされたんだよ異世界」
杏「ゑ？」
優斗「そこで手に入れた新しいペルソナです☆」
双葉「・・・大変だな」
優斗「というわけで、カオス」
カオス「どうしろと？」

優斗「竜司、杏、住所教えて」
教えてもらった
地図アプリで見る
優斗「ここの、空間を歪ませて、ここも歪まして、つなげてくれ」
カオス「わかった」
上手にできました～
どこでも◯◯かんせ～い
優斗「よし、行ってこい」
竜司「大丈夫なのか？」
通る
優斗「よし、杏も行ってこい」
杏「うん」
二人とも戻ってきた
優斗「よし、次は学校につなぐぞ」
杏「え!?それって大丈夫なの？」
優斗「なにが？」
杏「見られたら何ていえばいいのよ」
優斗「それもそうだな・・・じゃああの路地裏はどうだ？」
竜司「まあ、あそこなら大丈夫だろ」
双葉「行くのか？」
蓮「ああ、行ってくる」
双葉「じゃあ、私は帰るぞ」
双葉は帰った
優斗「入って」
蓮「あ、ああ」
皆入ったので
閉じた
竜司「こんな時間に来たの久しぶりだぜ」
優斗「お前なぁ、余裕もって来いよ」
竜司「いいじゃねえか間に合えば」
蓮「話し込んだら、本当に遅れるぞ」

優斗「それもそうだな、行くぞ」
放課後
杏「終わったかも」
優斗「何が」
杏「勉強」
優斗「それはマジで困る」
杏「今日みんなで勉強会しない？」
優斗「それなら考えがあるぞ」
竜司「考え？」
優斗「明日は勉強道具持って寝ろよ」
蓮「？わかった」
そのあと双葉にも伝えた
双葉「また行くのか!?」
優斗「アイツら今勉強ヤバいんだ、頼むこのままじゃやばい」
双葉「それで？どうしろっての？」
優斗「勉強道具持って寝てくれ、そしたら向こうの世界に持っていけるから」
双葉「私もなのか？」
優斗「興味が出たらいいんだが、双葉にも学校行ってほしいんだよなぁ」
双葉「学校・・」
優斗「無理にとは言わんが・・やっぱ行ったほうが将来が広がると思うんだ。それに」
双葉「それに？」
優斗「お前、メジエドだったぐらいだから理解さえすれば簡単に問題とか解けるんじゃねぇかと思ってな」
双葉「・・・気が向いたらな」
優斗「そっか、まあ前向きなだけいいがな、それじゃ明日の朝楽しみにしとけ」
次の日は三島からの情報で流れてきた
中野原ってやつを倒した

そしたら班目の名前が出てきた
アイツはそのうちやる
その次の日は向こうの世界に行った
猛勉強させたぜ
誰にって？
もちろん律先生だよ
さすがですわ
マジリスペクト
元の世界に戻り試験後
杏「今回いつもよりめっちゃ解けた気がする！」
竜司「俺も！いつもより手ごたえがあったぜ！」
蓮「いつもよりは解けてる気がする・・」
優斗「行ってよかったろ？」
杏「めっちゃよかった」
竜司「あれしたらいける気がする！」
優斗「そのうち行くつもりだが」
次の日
駅
優斗「終わったと思ったら、気を抜いちまうな」
蓮「確かにな」
杏が暗い表情で歩いてくる
竜司「どうした？痴漢にでもあったか？」
杏「いや、なんでもない行こ」
歩いていくと
優斗「誰かつけてきてるな」
蓮「マジで？」
竜司「しかたねえな、こい」
上に上がり杏を一人で歩かせ
誰か来たので止める
イケメンだなおい
みんなでじーっと見る

竜司「なぁ、マジでコイツ？お前の自意識過剰じゃね？」
杏「なっ違！」
祐介「なんだ君たちは？」
杏「それはこっちのセリフ！付きまとってたくせに！」
祐介「付きまとった？心外だな」
杏「ずっとつけてたでしょ！電車の中から！」
祐介「それは」
ププー
斑目「やれやれ、いきなり車を降りたと思えば、呆れるほどの情熱だな。結構、結構・・・はっはっはっ・・」
祐介「車から見かけて・・追いかけずにはいられなかった。先生の着信にも気づかないほど。けど良かった・・・追いついた」
杏「はぁ」
優斗「えっと・・・用件は？」
祐介「君こそ、ずっと探してた女性だ！ぜひ、俺の・・」
杏「やだ・・ちょっと・・」
祐介「・・・俺の、絵のモデルになってくれ！」
杏「モデル・・？」
優斗「あ！思い出した、そこの車の人確か画家の班目だよな？」
斑目「いかにも」
優斗「その車に乗ってたってことは・・・十中八九画家の卵ってとこか？」
祐介「そうだ、だから俺の絵のモデルに・・」
杏「いや、ちょっと・・」
斑目「祐介！」
祐介「すみません、先生。今、戻ります！」
杏に駆け寄る
祐介「明日から駅前のデパートで、班目先生の個展が始まる。初日は俺も手伝いに行くんだ。是非来てくれ。モデルの件、その時にでも返事をもらえると・・どうせ絵画には興味がないと思うが・・チケットは人数分渡してやるよ」

くれた
ちょっと上から目線じゃない？
祐介「じゃあ明日、ぜひ会場で！」
車に乗っていった
竜司「行く気じゃねぇよな？」
杏「行ってみようかな・・」
優斗「班目に近づくためか？」
杏「ヤバッ！時間！また後でね」
走っていった
優斗「一個試してみるか」
蓮「何をだ？」
優斗「俺の周りの空間を目以外囲むだろ？空間の中だけメメントスに入る」
竜司「うわ！首だけになった！」
優斗「あとは空間を捻じ曲げてこっちに見えるようにすれば・・・ほら女子の姿になった」
シュン
蓮「とりあえず・・何でここでしたんだ？めっちゃ見られてるぞお前」
優斗「あ」
シュン
竜司「戻った・・」
優斗「とりあえず行くか」
放課後
終わったわやっと
女子1「ねえ、これ見てみて！」
女子2「何？」
女子1「男子が女子になったって！」
ギクッ
女子3「・・・大丈夫？そんなのあるわけないじゃん」
女子1「本当だって！戻るときの動画あるもん！ほら」

撮られていただとーッ!!?
やめてくれーッ!
女子2「うっそ、マジじゃん」
女子1「やばくない?」
女子3「なんか、見おぼえない?この道」
女子2「あ!あそこだよ!駅からくるときの」
女子1「あ!本当だ!しかもこの人見覚えない?」
女子2「確かに・・・しょっちゅう見てる気が・・・」
優斗「逃げよ」
ガシッ
蓮「自業自得だろ、いろ」
優斗「クソ」
シュン
一瞬女子になって抜けた
女子に見られた気がしなくもないが
逃げよう
女子1「あれ?中村君どこに・・」
女子2が立ちふさがる
女子2「さっき女の子になってなかった?」
優斗「な、なってねーよ、なれるわけないじゃん」ダラダラダラ
女子2「めちゃくちゃ汗かいてるけど?」
優斗「教室暑いから・・・」ダラダラ
女子2「そんなに暑い?」
女子3「ぜんぜん」
女子1「まったく」
優斗「トイレに行きたいんだけど、どいてくれないかな?」
女子2「絶対に、い・や・だ☆」
優斗「・・・仕方ねぇな」
女子2「お?見せてくれるのか?」
時間を止めて避けて後ろに立つ
動き出す

女子２「あれ？どこ行った？」
女子３「後ろ！」
女子２「後ろ？」
クルッ
女子２「どうやってそっちに!?」
優斗「じゃあね」
ダァッシュ！
女子２「ちょっとま・・速ッ！めっちゃ本気で逃げてる！」
絶対に逃げる
逃げ切り帰って寝た

第二十八話

展覧会
双葉は「私はパス」といわれたので来ていない
モルガナ「混んでんな・・」
竜司「いるのバレたら面倒だから、あんま出てくんなよ?」
祐介「来てくれたんだね!」
優斗「瞬殺かよ」
杏「まあ・・うん」
俺たちの方を祐介は見る
祐介「本当に来たのか」
竜司「テメーで券、置いてったんだろ!」
祐介「他のお客様の邪魔にならないようにな。さあ、案内するよ。俺の描きたい絵のことも、色々と話したい」
杏はこっちを向き
杏「じゃ、後で」
優斗「行っちまったな・・・」
モルガナ「杏殿、大丈夫なのか!?大きな絵の裏でゴニョゴニョなんてこと・・・」
優斗「見てこようか?」
竜司「いや、無理だろ」
優斗「まあ、男じゃ無理だな・・」
蓮「まさか・・」
服はカバンに入れて持ってきた、あとは・・・
優斗「あそこに車いすトイレがあるな・・」
竜司「どうするつもりだ?」
優斗「ちょっとそこで待ってろ」
トイレに入り
服を脱ぎカバンに入れ
女物の下着を着る
お前マジかって思ったやついるだろ

こちとら色んな世界で女にされて抵抗もなんも無くなってしまっとるんじゃ
そして服を着て出た
優菜「終わったぞ」
竜司「ああ、何して・・」
（。д。）
蓮「本当にするとは」
優菜「近づくだけだからな、お前らはそこらへん回ったほうが怪しまれないだろ」
竜司「え～、回るのかよ」
蓮「来たいみ無くなるぞ」
竜司「・・・一回だけだぞ」
優菜「そっちは斑目、俺は祐介だ」
蓮「ああ」
人ごみに混ざり聞き耳を立てる
実は俺って影薄いんだぜ？
小学校の時ケイドロして人ごみに紛れてたら目の前を鬼が通ったのに気づかれなかったから
杏「日本画って、こんな色々種類があるのね」
祐介「普通はもっと作風は絞られる。でも先生はすべてを・・・一人で、創作してる。特別なんだ、先生は」
斑目が歩いてくる
斑目「祐介、ここにいたのか」
祐介「先生！」
斑目「昨日の子だね楽しんでもらえているかな？」
杏「ほんと、すごいっていうか・・・うまく言えないんですけど・・」
斑目「何かを感じてもらえる・・それだけで、我々画家は本望だ。いい絵になるといいな、祐介。では、失礼」
杏「芸術家ってとっつきにくそうだけど・・・先生って親しみやすいよね」
祐介「ああ」

杏が絵に近づく
杏「あ、コレだ、生で見たかった絵」
祐介「・・これが？」
杏「書いた人の、怒り？わかんないけど、暑い苛立ちを・・・感じるの。あんな気さくで紳士的な人なのに、こんな絵が描けるなんて・・」
祐介「・・・」
杏「どうしたの？」
祐介「何でもない。こんな絵より・もっといい絵がある、さあ、こっちだ！」
先生の絵をこんな絵？
これよりいい絵もある・・ならわからなくもないが・・・これは裏がありそうだな・・・？
杏「あ・・ちょっと・・・」
竜司と蓮に合流
優菜「えっと・・・何でここに？」
渋谷駅の通り道にいる
蓮「あのあと斑目先生だー!!とか言ってる人たちに押されてここまで逃げてきた」
竜司「オバチャンのヒジがモロ・・・けど、おかげで思い出したぜ」
優菜「何をだ？」
竜司「まあ聞けって・・ネットの書き込みだ」
スマホを取り出す
竜司「・・ほら、ここ見てみ」
杏「何で先帰んの!?」
優菜「すまん、訳を言わせてくれ」
杏「え・・・何で女子に・・」
優菜「ああ、これはだな」
説明中
優菜「というわけだ」
杏「そんなのもできるんだ」

竜司「それよりこれ見ろって、この書き込み・・・斑目のことかもしれねぇ」
杏「何で？」
竜司「『日本の大家が弟子の作品を盗作している。テレビは表の顔しか報じてない』・・だとよ」
優菜「実はさっき、杏たちについて行ってたんだが・・・」
杏「え!?ずっと!?」
優菜「まあ、聞けって。祐介は杏が絵画を見て言ったあと「こんな絵より」って言ったよな？」
杏「あ、確かに言ってた・・」
優菜「自分の先生の作品をこんな絵だと？どう考えてもおかしいよな？これよりも「もっといい絵」ならわかるがどう考えてもあのいい方は不自然だ、その絵自体の評価が低い、盗作ならわからなくもない。そして、そう思っていたということは・・・祐介なら何か知ってるな」
竜司「続きもある『アトリエのあばら家に住み込みさせている弟子への扱いは酷く、こき使うだけで、絵など教えてもらえないし、それどころか人を人とも思わない仕打ちは、飼い犬をしつけるかのようだ』・・あばら家の班目だからなぁ」
蓮「・・・行ってみるか、あばら家に」
竜司「そういや、モデルの話どうなってんだ？」
杏「喜多川君から、連絡もらってる。あと斑目先生のアトリエの住所も」
竜司「住み込みつってたな。ちょうどいい。明日行ってみようぜ、放課後、斑目ん家に行くぞ！」
杏「え？モデル・・・明日!?急に言われても・・」
優菜「俺も明日この姿で行こうか？」
竜司「ん～まあ一応な」
その夜帰ると
結局このまま帰ってきてしまった
優菜「ただいま～」
母さん「おかえｒ・・・・優斗が！女の子に!!」

バタン
優菜「お～いしっかり～」
父さん「何があっｔ・・・誰だね君は!!」
優菜「優斗だよ」
父さん「本当か？じゃあ母さんは何で倒れてるんだ？」
優菜「女になってるからショックで」
父さん「そ、そうか・・」
優菜「じゃあ着替えてくる」
着替えて戻ってきた
優斗「ほら、本人だぞ」
父さん「ほんとだな」
母さん「ハッ！あれ!?優斗は!?」
優斗「目ぇ覚めた？」
母さん「あれ？さっき女の子に・・」
説明中
母さん「息子が人間離れしていく・・」
優斗「結構心にぶっ刺さるから言わんでくれ」
父さん「ともかく、今は大丈夫なんだな？」
優斗「ああ」
父さん「なら、この話はやめだ。夕飯食べるぞ～～」
母さん「あ、持っていくから待ってて」
というわけで一日が終わった

第二十九話

お母さん「もう七時半よ～！行かなくていいの～？」
ん？朝か・・・
お母さん「入るわよ」
ガチャ
お母さん「早く起きなｓ・・優斗が二人!?」
優菜「え？」
なんか重い
優斗が上に乗ってる
優斗「なんだ？どうした？」
優菜「とりあえずどけ」
どかした
お母さん「で？これは一体どういう状況？」
優菜「自分でもわからない」
優斗「俺は、あれだよ。こいつが二重人格ってのは知ってるよな？」
お母さん「ええ」
優菜「俺が優斗で」
優斗「俺がもう一個の人格の悠」
お母さん「え？分かれたの？」
優菜「何でわかれたかは」
優斗「わからないよな」
お母さん「なら二人とも、学校に行かないとね」
優斗「学校ね・・・」
優菜「行くならお前な」
お母さん「いいえ、二人とも行ってもらいます」
降りると何故か制服とメモ書きがあった
優菜「なんだこれ」
メモの内容
これ制服ね、あと入学届は出しました　ｂｙ神
グシャ

なんか見せたらいけない気がする
優菜「入学届・・出してるって」
お母さん「え!?さっきの今よ!?」
優斗「出てるなら好都合じゃねえか！一緒に行くぞ！」
優菜「はいはい、分かりましたよ」
登校中
蓮「なんで二人いるの？」
優斗「分かれた」
優菜「分かれた」
蓮「いつ」
優斗「さっき」
蓮「じゃあなんで制服があるんだ？」
優菜「知らない」
蓮「なんか聞いても無駄な気がしてきた」
優菜「だったら速く行こうぜ」
蓮「わかった」
八時、学校
職員室
川上「貴方が転入してきた、中村優菜さんね」
優菜「はい」
川上「優斗君のとこに泊まってるのね・・」
優菜「どうかしました？」
川上「いや、何でもないわ」
優菜「そうですか」
川上「これが教科書とか諸々のやつね、今からホームルームだから行きましょう」
重いな教科書
教室で自己紹介し
川上「次は全校集会だから、優菜さんはとりあえず一番後ろに並んで」
全校集会なんてあったか？

いや、無かったよな？
体育館
校長「・・・例の事件以来、皆さんからの不安の声は、私の耳にも届いています。早急に皆さんのメンタル面のケアが必要と感じ、担当の先生に来ていただいた次第です。それでは、先生」
白衣を着た先生が来る
こんなイベントはなかった・・・まさか!?ロイヤルか!?そうだな!?4はゴールデン出たし、元居た世界でロイヤルが出ててもおかしくない！新しく追加されたペルソナとか分からんぞ
浮ついた女子生徒「カッコよくない？」
男性教師「初めまして」
真面目そうな女子生徒「声、渋い・・・！」
男性教師「僕の名前は、まる・・」
ブチッ
ん？マイクが切れたのか？
男性教師「・・あれ？」
トントン
直ったのかな？
丸喜「丸喜、拓人と申します、よろしくどうぞ」
ゴンッ
キーン
礼でマイクに頭ぶつけるか？
クスクスクス
フフフ
丸喜「た、担当はカウンセリングです・・堅苦しく構えなくて大丈夫だから、相談なら何でも・・あっ。お金の相談は困るかな～」
校長「・・ありがとうございました」
その後
竜司「うっす。まさかうちの学校が、メンタルケアとか言い出すなんてな」
杏「ニュースにもなってるし、放置はマズいって思ったんじゃない

？」
竜司「つか・・なんだっけ？名前」
杏「丸喜先生」
竜司「ツッコミどころ満載すぎじゃね？お前も」
優菜「そりゃね、分かれて女体化継続とか思わんかった」
竜司「本当にカウンセリングできんの？」
丸喜先生が歩いてくる
杏「竜司」
丸喜「どうも、坂本君に、高巻さんだよね。それに雨宮君に優斗君に君は・・」
優菜「あっ優菜です」
竜司「何で名前知ってんすか？」
丸喜「鴨志田先生と、その・・いろいろあった生徒の何人かは、前もって聞かせてもらったから、雨宮君、転校早々、大変だったね」
蓮「それなりにですね」
丸喜「君は、よくこの学校に来たね」
優菜「もう手続き済んでたんで、入学の」
丸喜「まあ、そこまで悪くない学校だとは思うから」
竜司「それ、来たばっかの先生がいう事じゃないですよね？」
丸喜「それもそうだね」
竜司「つか・・俺らになんか用っスか？」
丸喜「ああ、そうだった。さっき集会でも言ったけど、君達カウンセリングに興味あったりするかな？」
竜司「別にねえっスけど」
丸喜「え!?」
竜司「いや『え』、じゃなくて」
丸喜「思ったより直球で断られたからさ・・あ、でも今ならお菓子もあるよ？食べ放題・・はちょっと無理だな。でも、そこそこ食べられるし、どう？」
優菜「詳しく」
杏「バッチリ釣られちゃってるよ・・」

丸喜「実は・・・鴨志田先生の事で、関係性の強い生徒は、必ずカウンセリングするように言われてね。一応、学校側からの・・気遣いなんだけど」
竜司「気遣いねえ・・」
丸喜「いきなり見ず知らずの僕と話せって言われても、困るのは分かるよ。こういうの強制でやっても意味ないし。せっかくなら、君達にも何かメリットが・・そうだ！カウンセリングに来てくれたら、代わりにメンタルトレーニング教えるよ。テスト前の集中力の上げ方とか、デートの時に緊張しない方法とかさ。どうかな？」
杏「どうかなって・・・」
丸喜「今ならお菓子も・・」
竜司「お菓子はもういいっつの！」
優菜「行く」
竜司「お前は菓子目当てだろ！」
蓮「話ぐらいなら・・」
竜司「まあ・・受けねーなら受けねーで面倒なことになりそうだしな」
杏「んー、そうだね」
丸喜「本当かい？それじゃあ、取引成立って感じかな？僕は保健室にいるから、都合のいい時にでも来てよ」
竜司「じゃ、俺等はこれで」
丸喜「うん、またね」
放課後
優菜「行ってくる」
杏「仕方ないか・・」
保健室
丸喜「やあ、優菜さん・・だったよね？」
優菜「そうです」
丸喜「お菓子ならテーブルの上にあるよ」
優菜「いただきまーす」
食べながら

丸喜「カウンセリングって言っても特に気を張らなくてもいいよ、話したいことを話せばいいからね」
優菜「おうでふか（そうですか）」
丸喜「食べてから話してもいいよ？」
ゴクン
丸喜「この学校に来て、何か思ったりしたかい？」
優菜「ああいう事が起こった後にしては、明るいですよね。一番思ったことはそれです」
丸喜「あ～確かにそうかもね」
優菜「私が、転校してきた理由ってわかりますか？」
丸喜「そういうのって聞いていいのかい？ダメって人もいるからね」
優菜「大丈夫です」
丸喜「いじめかい？」
優菜「違う」
丸喜「前科とか？」
優菜「遠い」
丸喜「親の転勤」
優菜「違う、正解は・・・」
丸喜「うん・・・」
優菜「の前に」
ガクッ
優菜「私は女子でしょうか男子でしょうか」
丸喜「え？・・・女子？」
優菜「残念、男子」
丸喜「えええ!!?」
優菜「元だけどね、朝起きたら女になってたっていうよくある展開だよ」
丸喜「・・・本当にあるのか・・・」
優菜「向こうじゃそれでは、住むのは無理だろ？だから親からも気味が悪がられてたらい回してわけでここに来た」

丸喜「大変だったね」
優菜「ですけどね、もう友達出来ましたよ」
丸喜「坂本君達かな？」
優菜「だから特にどうって訳でもないっす」
丸喜「なら大丈夫そうだね」
その後少し話して終わった
優斗「どうだった？」
優菜「とくになんも、頑張れよ」
優斗が入れ替わりで入る
優斗ｓｉｄｅ
優斗「失礼します」
丸喜「君が優斗君だね、座っていいよ」
優斗「はい」
座る
丸喜「最近周りで嫌な事とかあったかい？」
優斗「まあ、もちろん鴨志田ですよね」
丸喜「ああ・・・やっぱりそうなるよね」
優斗「バレー部員・・・俺で言ったら三島とかですけど・・・普通に怪我するんですよ、部活で・・・生傷が絶えなくてですね・・・それでちょっと反発したんですよ」
丸喜「そういうことか・・・でも鴨志田先生のやってた事は、先生とか保護者も黙認してた事だからね・・・反発できるって言うのはすごいと思うよ、僕だったら周りみたいに知らんぷりしちゃうかも」
優斗「後は、志保が落ちて来た時の周りの反応ですかね」
丸喜「何かムカつくことでもあったかい？」
優斗「写真とか動画撮ってるやついたんですよ」
丸喜「!!」
優斗「ホントに何をどう考えたらそうなるのか理解に苦しみますよ」
丸喜「・・・少し話を変えようか・・・君は志保さんが落ちたときに、羽毛がいっぱい入った枕を下に投げ込んだらしいね」

優斗『ああ～優菜がしてたな～』
丸喜「？どうかしたかい？もしかして聞かない方がよかった？」
優斗「いや、なんでもないです」
丸喜「じゃあ、今君の家には優菜さんがいるらしいけど。様子とかはどうだい？」
優斗「・・・特にどうってことはないですね」
丸喜「そうかい、わかった。他に話したいことはあるかい？」
優斗「俺は、モテないんですよ。どうやったらモテるんですかね・・・」
丸喜「・・・残念ながら、それは僕にも分からないよ・・・」
優斗「ですよね・・・・」
この空気きっつ！
優斗「それじゃあ、帰りますね」
丸喜「わかったよ、また気が向いたら来てくれて構わないよ」
優斗「はい」
出ると
ドン
優斗『ヤベッ』
芳澤「あっ」
優斗『倒れる！』
ガシッ
手を掴む
優斗「すまん」
芳澤「いえ、こちらこそすいません。では」
保健室に入っていった
優斗『教室に戻るか』
教室
優斗「行ってこい」
蓮「ああ」
蓮ｓｉｄｅ
保健室前

丸喜先生と芳澤がいる
芳澤「あ、お疲れ様です。丸喜先生のカウンセリング、受けられるんですか？」
蓮「君も？」
芳澤「はい、そうなんです。丸喜先生、良い方ですよ。私、先生が秀尽に来られる前からお世話になってるんです。」
丸喜「あれ？芳澤さんと知り合いなんだね。そんなにいいものでもないから、ハードル上げないでよ」
会ってる気がする・・・（ω・）キリッ
芳澤「私、もう行きますね。それじゃ」
礼をして行ってしまった
丸喜「それじゃ入ろうか」
入る
丸喜「いらっしゃい、よく来てくれたね」
蓮「取引したから」
丸喜「そういえばそうだったね」
少し話す
丸喜「なるほど・・・うん、ありがとう。雨宮君の状況は、大体把握できたよ・・・実は、君がここに転入してきた経緯とかは、学校からも軽く説明は受けてたんだ」
蓮「もう大丈夫」
丸喜「もう大丈夫、か・・・でも、無理はしないでね・・・今、話をさせてもらって思ったんだけどさ。きっと君は、自分の中にある『現実』で、きちんと折り合いをつけて生きてるんだね。すごいと思うよ。大人だって皆が出来てるわけじゃないんだから」
？
丸喜「ほら、人ってさ、自分の中にある現実・・・こうありたいって理想があるわけじゃない？テストでいい成績を残す自分！他人を助けて、役に立ちたい自分！みたいなさ。けど外の現実は、理想通りにいかない事もある。多くの人はその内と外のギャップに苦しむんだ。誰しもがテストで満点を取れて、人を救うヒーローになれるわけ

じゃないからね・・・君に起きたことを思うと、苦しむどころか歪んでしまっても不思議じゃないと思う。けど君は辛いはずの現実にまっすぐ立ち向かっているように見えてね。それが凄いと思うんだ・・・って、会ったばかりのおじさんにこんなこと言われるなんて、ちょっと変かな？」

蓮「事実だ」

丸喜「謙遜はしない、か。本当に強いね、雨宮君は」

時計を見る

丸喜「さて・・・ごめんね、少し長くなっちゃたね。君と話してると、不思議と話が弾んじゃってさ・・・あのさ、最後に一つ提案があるんだけど、聞いてもらえる？実は僕、カウンセラーの仕事かたわらにある研究をしていてね。それは、カウンセリングとはまた違う、心理療法のようなものについてなんだけど・・・まあつまり、人の心を知るための研究でね。上手くいけばたくさんの人を助けてあげられると思うんだけど・・・どうかな！」

蓮「もう少し詳しく」

丸喜「ごっ、ごめん！えーと、何が言いたいかっていうとね。僕の研究を手伝ってほしいんだ！雨宮君には、ボクの話を聞いてもらって気づいた事や思った事を教えてもらいたい。頼むよ、君の気が向いた時でいいし、時間も融通するからさ！ほら、お菓子をいくらでも食べていいから！」

蓮「なんで俺？」

丸喜「あー・・・実は時々、研究で息詰まる時があってさ。今まで一人で進めてたんだけど、君みたいな人から意見を貰った方が研究も捗りそうだなって。あ、もちろんお礼は用意するよ？見返りは・・・そうだな、とっておきのメンタルトレーニングを伝授・・・っていうのはどうだい？僕のノウハウを尽くした君だけの為のスペシャルコースだ。努力次第で、君の持つ存在能力を最大限に引き出せるようになるはずだよ！」

蓮「・・・わかった協力する」

丸喜「よし！あらためて、取引成立だね」

丸喜との関係が深まる感じが　カットォー！
丸喜「・・・あ、そうだ！連絡先とか教えてもらっていいかな？時間が空いてるときや相談に乗ってもらいたい場合は連絡するから・・・・・・これでよしっと！さて！じゃあ早速、今回の見送りを渡さないとね。メンタルトレーニングを教えるよ。最初は、そうだな・・・」
しばらくして
蓮は教室に戻ってきた
保健室
コンコン
丸喜「はい」
ガラガラ
杏「えっと・・・」
杏視点
丸喜「いらっしゃい。もしかして、カウンセリングかな」
杏「はい、今から出来ますか？」
丸喜「もちろん！いつでも大歓迎だよ。いや嬉しいよ。あ、よかったらどうぞ」
座る
丸喜「じゃあ始めよっか。あ、全然楽にしていいよ？とりあえず話したい事聞かせてくれれば」
杏「はい・・って言ってもかうんせりカウンセリングで話すことって、例の話しかないんですよね」
丸喜「まあ・・・そうかもしれないね。ただ、無理にじゃなくていいよ。今日はお菓子だけ食べて帰る！とかさ、はは」
杏「いえ・・・大丈夫です。話した方がいいの分かってますし。まあ・・・少しずつでも聞いてもらえるなら」
丸喜「もちろんだよ。急がなくても大丈夫」
少し話す
丸喜「・・・なるほど、確かに許されない事実だね」
杏「・・・はい。だから私、志保の仇を討ちたくて・・・」

丸喜「うん。それで君は？」
杏「・・・鴨志田がああなって、一度は志保と同じ目に遭ってみろって思った。でも・・・」
丸喜「でも？」
杏「・・・違うなって。そんなことしてもアイツが楽になるだけで、志保の痛みが消えるわけじゃないから」
丸喜「そっか・・・高巻さんは冷静だし、すごく賢いよ」
杏「えっ？いや、そんなこと・・・」
丸喜「ううん、きっと僕なんかよりよほど頭がいい。そんな事、僕が高校生の時は考えられなかったし」
杏「・・・好きで考えるようになったわけじゃないですけどね。私も、あんな事がなければ、考えなかったと思います、多分」
丸喜「そうか・・・今はどう思ってるの？」
杏「今、ですか？うーん・・・とにかく志保が早く元気になれたらって。あんな事はあったけど・・・早く笑って、前みたいに一緒に買い物とかしたいって思います。鴨志田の事とか、もうどーっでもいいんで！」
丸喜「そうなるといいね・・・起きてしまった事は変えられないけど、前を向いて進む、か」
杏「そんな感じかも、まあ・・・そんなの最初から起きないほうが良いに決まってますけどね」
丸喜「そうかもしれないね。でも、今の世の中、悲劇全てを消すことは出来ないからね」
杏「ホントそうですよね。そんな世界あったら幸せだけど」
キーンコーンカーンコーン
丸喜「っと、もうこんな時間だね。今日は終わりにしようか、話してくれてありがとう」
杏「ううん、話せてスッキリしたし。ありがとうございます」
丸喜「はは、そう言ってくれると助かるよ。またいつでもおいで」
杏「はい、それじゃ！」
礼をして保健室を出て行った

杏と蓮と優斗が行った後（竜司は行かなかった）
杏「あれって優斗知ってたの？」
優菜「知らね、あと今は優菜だ」
優斗「で、俺も改名して優斗な」
モルガナ「そうだ、忘れていたが。今日は班目のところに行くのはやめて行きたい所があるんだが」
優斗『あ、スルーなのね』
竜司「いきなりどうした？」
モルガナ「渋谷の駅前に行ってくれ」
優菜「ああ～メメントスか」
竜司「今言うか？」
モルガナ「一応先に行った方が良いかと思ってな」
蓮「なら行こう、この前三島からも依頼が来ていたし」
杏「依頼？」
竜司「しかも今三島って言ったか？」
スマホを出して怪盗お願いチャンネルを開く
優菜「これに書いてた、『元カレが最近ストーカー化して困ってます。名前は、中野原夏彦』って奴だろ」
蓮「ああ」
竜司「公務員がストーカーかよ」
三島はまだ来ないはずだが・・・まあ大きく支障が出なければいいだろう
いや、やっぱり来てたっけ？・・・・あんま覚えてないや
？誰かつけてきてる
優菜「渋谷だろ、速く行くぞ」
急ぎ足でいき
振り切った
この時期だと・・・真か
渋谷に着いた
優菜「行くんだろ？」
竜司「俺はいいぜ」

杏「私も」
蓮「問題ない」
双葉に電話する
双葉「なんだ？」
優菜「今から異世界に行くが・・・来るか？」
双葉「急にかよ・・すぐ行く、どこだ？」
優菜「渋谷だけど・・・まあそこで待ってろ」
カオスで連れて来た
優菜「メメントス」
ブワ～ン
杏「人が消えた・・・なんか・・・フワフワしてるっていうか・・・」
竜司「ここが、メメントスか・・・？怪盗服にはならないのか？」
優菜「ここは違う、下に行くぞ」
モルガナ「ここのシャドウは地下に溜まってるんだ。何かに惹かれて集まるのかもしれないが、理由はよくわからない」
杏「地下って・・・どうやって入るの？」
優菜「普通に降りる」
優斗「待て、その前に双葉のコードネームだろ」
双葉「私はナビがいい」
杏「ナビ？」
双葉「皆を勝利に導いてやる」
階段を下りていく
怪盗服になって周りを見る
スカル「んだよ、ここ・・・つか、変わってる!?」
フォルス「いや、気づくの遅い」
パンサー「シャドウに気づかれてんの!?」
モナ「とっくにな」
スカル「先、言えって！」
モナ「ここはまだ大丈夫だ、何度か来て調べたがシャドウはこのフロアまでは上がってこない」
トゥルース「でも、一歩でも進めば別だぜ？ウジャウジャいるぞ」

ナビ「ああ、雑魚ばっかだけどたくさんいるな」
フォルス「とりあえず、行けばいいんだろ？」
スカル「けどコレ、だいぶ広いんじゃね・・？歩きで行けんのか・・・？」
モナ「ついにこれを見せる時が来てしまったな・・・もるがなぁーー、変・・身ッ！」
バスになった
モナ「さあ、パンサー、トゥルース、ナビ。レディ・ファーストだ」
パンサー「くるま・・・!?」
トゥルース『ネ○○スですね』
スカル「あり得ねえ!!」
モナ「認知が具現化する異世界の仕組みを逆に利用して、ちょいと修行した成果だ。ま、オマエラの変身と同じようなもんだな」
スカル「服が変わんのと、車になんのは違えだろ!?」
モナ「大衆の心の中には『猫はバスに化ける』って認知が何故だかものすごい広く浸透してんのさ」
パンサー「何でバス？」
モナ「・・・知らね」
ナビ「ジ○リだな」
フォルス「言うな」
トゥルース「ま、これで移動楽になったしいいだろ」
全員乗る
スカル「出発シンコー！」
エンジンをかける
ドドドドドドドドド
パンサー「運転できんの？」
トゥルース「多分」
スカル「オイ、ゴロゴロ言い始めたぞ・・・気持ちわりー、乗りもんだな！」
モナ「ニャータリーエンジンをバカにすんなよ？エンジン全開！かっとぶぜ！」

入っていく
スカル「この雰囲気・・・確かにパレスっぽいな・・・」
パンサー「車がレールの上走るって、なんか新鮮だね・・・ここのどっかに中野原が居るの？」
モナ「パレス程じゃないが、そいつも恐らく自分だけの空間に閉じこもってるはずだ。入り口を見つける必要がある」
スカル「入口ってどんなんだ？」
モナ「知らん。でも歪みの強い場所は、見ればわかる」
スカル「適当にうろついて探すしかねーワケか、面倒だな・・・」
トゥルース「いや、わからんぞ」
フォルス「あれか」
帝具、スペクテッド
スカル「なんだそりゃ・・・目？」
フォルス「異世界でゲットした」
モナ「こっちからは見えないんだけどな」
トゥルース「後で見せるから」
遠視・透視同時発動
ギューン
・・・・
ジョーカー「どうだ？」
優菜「いた、あっちの方向だな」
ナビ「道案内は任せろ」
ナビのおかげもあってすぐ着いた
スカル「うおっ、なんだよこれ・・うねってんぞ？」
モナ「ここだ・・・ここから『入れる』、この先からターゲットの気配がする。さあ準備はいいか？ジョーカー」
ジョーカー「行こう」
入る
降りる
スカル「おっ、なんか居やがるぞ？」
モナ「アイツが、ナカノハラのシャドウらしいな」

スカル「確か、区役所の窓口係がストーカーになったんだっけか？」
パンサー「どこまでワルか分かんないけど、誰かを困らせてんなら、なんとかしなきゃ」
モナ「よし、まずは話してみろ」
近づく
シャドウ中野原「なんだお前ら！」
パンサー「アンタがストーカー男ね!?相手の気持ち、考えたことないの？」
シャドウ中野原「あの女は俺の物なんだよ！俺の物をどう扱おうと、俺の勝手だろ！俺だって物扱いされたんだ！同じことやって何が悪い!?」
スカル「自分がやられたからって人を物扱いすんな！ふざけやがって・・・テメーみてえなヤロウは、改心させてやる！」
シャドウ中野原「俺より悪い奴はいくらでもいるだろ！そうだ、マダラメ・・・俺から全てを奪ったアイツはいいのかよ！」
スカル「!!今斑目っつったか!?」
変身した
モナ「構えろ！来るぞ！」
トゥルース「これは、やるしかないな」
シャドウ中野原「俺の物を取るんじゃねぇよ・・やっと手に入れたんだ・・・世の中、やったもん勝ちなんだよッ！コイツ！ブッ倒してやる！」
ナビ「コイツの弱点は・・・電撃だ！」
スカル「奪え！キッドォ！」
ビリリ
ＨＯＬＤＵＰ!!
スカル「ざまぁねぇな！」
モナ「我らの恐ろしさを味わえ」
ナビ「ボッコボコにしちゃえー!!」
ドカバキボコ
トゥルース「耐えたか！」

フォルス「アラメイ!心理の雷!!」
ドゴォ
シャドウ中野原「グアアア!!」
勝った
シャドウ中野原「わ・・・悪かった、もう許してくれ・・・俺、執着心が止めらん無くなってた。悪い先生に使い捨てにされてさ・・・」
スカル「さっき言った斑目だろ?」
シャドウ中野原「知っているのか?」
トゥルース「怪盗団って聞いたことあるだろ?それが俺達だ、そして次の標的は班目」
シャドウ中野原「そうだったのか・・」
トゥルース「だから、ストーカーはやめて俺たちに任せな!失恋は誰もが経験することだ、そのうち『そんなこともあったな~』って言えるくらい立派に、強くなれ、お前なら出来る」
シャドウ中野原「わかった・・・」
パアア
消えて行った
?何か残った
スカル「ん?その光ってんの、なんだ?」
モナ「オタカラの、芽だな。放っておいたら、パレスに育ってたかもしれない。ジョーカー、報酬に頂いとけ!」
ジョーカーがとる
スカル「中野原って改心したんだよな・・・?」
モナ「おそらくな」
パンサー「でも確認する方法なくない?」
スカル「ネットに実名書くぐらいだ、マジ改心したら、きっと書くんじゃね?」
モナ「確かにそうだな」
ナビ「にしてもメメントスって言うのは、ＲＰＧで言うレベル上げにもってこいの場所だな。ここで腕磨くのもアリだな」
パンサー「悩みを書き込んだ人たちを勇気づけてあげられるし、い

いかもね」
モナ「オタカラもゲット出来るし、売れれば報酬も入る」
スカル「いい事づくめじゃねーか！面白そうだ！・・・よし、今日んとこ目的達成だな！」
モナ「待った、ちょっとだけ付き合って欲しい所がある」
スカル「んだよ、まだ何かあんのか？」
モナ「長くはかからん・・・まぁ、まずはここから出ないか？」
出た
スカル「んで？あと何がしたいんだ？」
モナ「更に下のエリアだ。そこで確かめたいことがある、まずは下に降りられるホームを探そうぜ」
スカル「そういや、前にココ来てたんだろ？見取り図とか残してねェのかよ？」
トゥルース「無駄だ、ここじゃ毎回構造が変わる」
モナ「ああ、パレスと違ってここは途方もない人数の認知が融合した場所だ。常に変わり続けてるのさ」
フォルス「だが目的地が遠い訳じゃないだろ？ならさっさと行こうぜ」
ナビ「向こうだな」
シャドウ「うがあああ!!」
スカル「おわっ!?」
トゥルース「構えろ！」
ナビ「雑魚二体！大丈夫すぐ倒せる」
バイコーンか、ならアラメイで・・・
・・・？なんかカラフルな色した沼？からなんか出てきた
ドパアアン
モナ「ア、アイツはっ!?」
ブツブツ
出久かな？
スカル「なんかアイツ、様子おかしくね？ブツブツ言ってるくせに、動かねえぞ・・・」

モナ「気をつけろ、ワガハイの予想通りならアイツはちょっと厄介だぞ！」
スカル「よし、ならオレが速攻で黙らせてやるか！」
モナ「気をつけろよ！」
スカルが殴る
バイコーンの目の色が変わる
スカルに襲いかかる
避けた！
スカル「うわ、なんだよアイツ急に！」
モナ「・・・攻撃したら動き出したか、やっぱり予想通りのヤツみたいだぜ。だが、アイツを倒せば・・・オマエたち、見てろよ！」
バイコーンを斬りつける
すると丸くなり宝玉を落としてはじけ飛んだ
スカル「うわ、なんだ？爆発したぞ？」
モナ「説明は後だ！今は戦闘に集中しろ！」
ジョーカーとパンサーが残りを倒す
ＷＡＲＮＩＮＧ
また出てきやがった
モナ「またさっきのがいるな・・・あいつは中途半端に手を出すと厄介だ。叩くときは弱点を突いたりして一気に畳みかけて、爆発させるのがよさそうだ。眠らせたりで動けなくするか、いっそ後回しにするのも手だな」
フォルス「アラメイ、心理の雷！」
ドカーン
ナビ「敵三体撃破、フォルスいいね」
パンサー「あんなシャドウもいるんだ・・・」
モナ「ワガハイはあの特殊なシャドウを、『凶魔』と呼んでいる」
ジョーカー「そんな奴いたのか？」
トゥルース「そんなシャドウ知らねえ・・・」
フォルス「・・・まあ今考えたって仕方ねえだろ」
スカル「ならさっさと行こうぜ」

ホーム
スカル「ちょ、ちょっと待て・・・なんか音しねぇか？」
ホームの逆側に人がたくさん並んでいる
電車が来た
スカル「電車、モロ営業中じゃねぇかコラッ!!」
モナ「ここは地下鉄だぞ？電車走ってんのは当たり前だろ？」
パンサー「そうじゃなくて！ここ、パレスみたいなとこなんでしょ!?」
モナ「ならこの景色が、大衆にとっての日常の光景ってことなんじゃないか？よく知らんが」
パンサー「こんな暗がりが・・・日常・・・？」
トゥルース「お前は学校に行きたいと思って行くか？」
パンサー「・・・確かに行かないわ」
スカル「つーか、俺らレールの上走って大丈夫なのかよ!?」
モナ「同じレールに乗らなけりゃ平気だろ。・・・ま、ワガハイ電車の事は詳しくないけどな」
スカル「マジかよ・・・」
モナ「それより、下のエリアに進もうぜ。そこのエスカレーターを下ればすぐだ」
下ると・・・
ホーム
奥に壁がある
モナ「よしっ、あった！確かめたいのは、あの奥だ！」
近寄る
パンサー「・・・何ココ？なんか、ちょっとだけ不気味」
フォルス「なんか変な模様だな」
スカル「つーか、行き止まりじゃねえか。こんなとこに何の用だ？」
モナ「まあ、見てろ。多分コイツは、ただの壁じゃない。ワガハイの勘が正しければ・・・」
触ると・・・
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

壁が開かれた
パンサー「開いた・・・！」
イセカイナビ「最深部に新規エリアが確認されました。案内情報を更新します」
モナ「見ろ！思った通りだぜ！」
パンサー「どういうこと？」
モナ「前に一人で来た時は、触ってもウンともスンとも言わなかったんだ。けどメメントスの一番下がこんな何の変哲もないフロアだなんて、妙だろ？」
スカル「更に奥があったって事か」
フォルス「ここで専門家に聞いてみましょう」
トゥルース「えー私が思うに、次の階層が終わってもまた何かを起こし壁を開けば先に進めると思いますな」
フォルス「との事です」
スカル「乗るのかよ」
トゥルース「真面目に言うと、俺等が鴨志田を倒して有名になったから開いたんだ。この先もそれで開いてたし」
ナビ「私のは公になってないから、鴨志田だけってことだな」
パンサー「それじゃあまず、降りてみる？」
モナ「いや、やめとこう。今回はそこまでのつもりで来てない。目的はもう達した、一旦戻ろう。説明はその後だ」
トゥルース「わかった、カオス」
どこ〇〇ドア～
地下一階まで戻ると
パンサー「ちょ、アレ・・・！」
モナ「メメントスに、ニンゲン・・・!?」
トゥルース「あんな奴知らねえぞ」
白い服の少年「うん・・・」
花が入った・・・シャボン玉？・・・どういう事だ？
花からジュースに変わり少年が持っている
白い服の少年「これはどうだ・・・」

ジュースを飲む
白い服の少年「・・・ぷは!うまっ!」
スカル「・・・なんか、飲んでね?」
白い服の少年「ん・・?変な気配がすると思ったら・・・おにいさんたち、何者・・・?」
モナ「いやこっちが聞きてぇよ・・・」
白い服の少年「そうだったね、ごめんなさい。名前を聞くときは自分から名乗るのが人間の礼儀だ。ご指摘ありがとう。えーと・・タヌキ・・じゃない、ネコさん?」
モナ「迷うんじゃねえよ!つかどっちもちげぇし!」
スカル「や、そこは迷うだろフツーに」
トゥルース「でもタヌキはないだろ」
ナビ「タヌキ・・・ネコ・・・ド○○もんか!?」
フォルス「マジで消されるやめろ」
ジョゼ「僕の名前はジョゼ、花を探してるんだ。でも驚いたな、おにいさんたち普通の人間でしょ?こんなところに来られる人もいるんだね」
モナ「まあ、ワガハイたちが特別っていうか・・・って、そうじゃなくてだな!オマエは何者なんだって話だ」
パンサー「『花を探してる』って言ってたけど、さっきのやつの事?」
ジョゼ「そうだよ、綺麗なお姉さん。さっきの花、あれがボクの探してる花みたい。僕は人間を勉強しなきゃいけなくて、あの花をいっぱい集めたいんだ」
スカル「勉強って・・・さっきの、ジュースにして飲んでたやつか?」
ジョゼ「そう」
スカル「花のジュース飲むことが、勉強になんの・・・?」
この子何者か分からないから、心を読もう。スペクテッドどこにいれたっけな
・・・そういやスペクテッドつけたままだった・・・
洞視

スカル『そんなんできるならオレがしてえわ』
竜司・・・・
ジョゼ「ねぇ、おにいさんたち、ボクの勉強、手伝ってくれないかな？」
もっかい洞視
ジョゼ『ボクとおにいさんたちで集めたほうが早いよね？あっでもなにかと交換したほうが良いよね？』
ものすっごい良い子
パンサー「手伝う？」
ジョゼ「花を集めてきて、それをボクに譲ってほしいんだ。もちろんタダでとは言わないよ。この場所は色々と役立ちそうなモノが落ちてるみたいだし・・・ボクが拾っておくから、おにいさんたちが集めた花と交換しようよ」
スカル「どうする？花集め手伝ってだと」
モナ「ワガハイたちにもメリットはありそうだが相手は正体不明の子供だ・・・ここは慎重に・・・」
パンサー「えー、いいんじゃない？手伝ってあげようよ」
トゥルース「心読んだけど、下心はなかったぞ」
ナビ「探索のついでには良いんじゃないか？まあ最終判断はジョーカーに任せる」
スカル「因みに杏は他にあんじゃねーのか？」
パンサー「・・・綺麗って言われちゃったし」
モナ「ガーン！アン殿・・・」
スカル「ま、別にいっか。お礼くれるって言ってるし」
ジョゼ「どうかな、おにいさんたち、花集め手伝ってくれる？」
ジョーカー「わかった、手伝おう」
ジョゼ「ありがとう！」
モナ「ま、待て待てっ！コイツが何者かまだわかんないだろ!?お前もありがとうとか言ってんなって！」
ジョゼ「ネコさん、疲れてるの？すごくイライラしてるけど」
モナ「ネ、ネコじゃねーし！イラついてねーし！」

ジョゼ「あ、わかった。お腹空いてるね？そういうイライラ、ボク、勉強したから知ってる」
クッキーを取り出した
ジョゼ「よかったら、これどうぞ」
モナ「気持ちだけもらっとく・・・」
スカル「気い使われてんじゃねーか・・・完敗だな」
ジョゼが車に乗る
ジョゼ「ボクもこの中で花集めてるから、見かけたら声かけてよ。あと、ただ集めてるだけじゃつまらないでしょ？人間は『遊び』が好きだって勉強したから、面白そうな仕掛けを準備しておくね・・・っと、思い出した。勉強して覚えた、人間の挨拶。おつかれ～」
行ってしまった
スカル「なんだってんだ、アイツ」
パンサー「人間をお勉強ってことは、人間じゃないのかな？・・・いい子っぽかったけど」
モナ「まあ・・・アイツからシャドウの気配はしなかった。少なくとも今は、危険もなさそうだな」
スカル「さっき言ってた花？それ見つけたら拾ってとくか」
出ようとしたら
ジョゼ「忘れてたーっ！」
戻ってきた
ジョゼ「おにいさんたちに渡そうって思ってたモノがあるんだったよ」
ジョーカー「渡すもの？」
ジョゼ「うん、何かって言うとね・・・この前探索してたら変なモノ拾ったんだ。これなんだけど・・・」
光ってる星？
スカル「は？なんだよそれ」
ジョゼ「『ホシ』だよ？星の形してるから、僕はそう呼んでる」
モナ「ホシ？」
パンサー「えっと、それがどうかしたの？」

ジョゼ「人間ってさ、みんな星にお願い事するんでしょ？面白いよね。お星様は願いを叶えるもの・・・だからこの『ホシ』もおにいさんたちの願いを叶えてくれる・・・」
モナ「願いを・・・!?」
ジョゼ「・・・とかだったらいいよね」
モナ「いいよね、かよ・・・」
ジョゼ「これ、おにいさんたちにあげるね。キラキラで綺麗だし、おにいさんもほしいでしょ？『オチカヅキノシルシニ』ってやつだよ。僕、知ってるんだ。それじゃまた、おつかれ～」
モナ「あ、おいちょっと！」
スカル「行っちまった」
フォルス「『ホシ』ねぇ・・・怪しさ満点だけど」
ナビ「でも、もしかしたらホントに叶ったりしてな！」
モナ「さすがのメメントスでもそんなことは起きないとは思うが・・・とりあえず、願い事を言ってみればいいんじゃないか？」
パンサー「じゃあ・・・パフェ食べ放題！カロリーゼロで！」
スカル「牛丼特盛り！豚汁つきで！」
トゥルース「だったら金！何でも使える」
モナ「・・・何も起きないな」
パンサー「スカルの願い事が下品すぎたんじゃない？」
スカル「オメーに言われたかねーよ！」
ナビ「それか、何か条件があるとかな」
モナ「ま、そう都合よくはいかないだろ。とはいえ捨てるわけにもいかねーか・・・一旦そいつはオマエが持っててくれ。予想外の出来事はあったが、戻るとしようぜ」
今度こそ出れた
竜司「メメントスなぁ・・・しかし、よくわかんねえ場所だったな。んで、最後に見たあのか『壁』みてえのは、何だったんだ？」
モルガナ「詳しくはわからんが、アレのせいで一定より深く入れなかったんだ。だが『大衆のパレス』なら・・・大衆がワガハイらを信じたり受け入れたりすれば、影響はある」

杏「何でモルガナは、あんな場所の事いろいろ知ってんの？」
モルガナ「どうも記憶がはっきりしないんだが・・・メメントスの奥がどうなってるのか、どうしても知りたいんだ」
杏「どうしても・・・？」
モルガナ「メメントスは『みんな』のパレスだが、同時にすべてのパレスの源でもあるんだ。昔は、カモシダの城みたいな、あんな一人が支配するパレスなんてなかった。だからゆがみの大元であるメメントスを何とかできれば、ワガハイのこの姿だって・・・！」
杏「モルガナも助けてほしかったんだね・・・」
モルガナ「て、手駒が欲しかっただけだ」
竜司「そうか・・・だから俺達にちょっかい出してきたのか」
杏「・・・私、協力してあげるよ。失くしたもの、戻るといいね」
モルガナ「・・・宜しく・・・頼む・・」
杏「・・・ところでモルガナってさ、男？もしかして女？」
優菜「さすがに男だろ」
杏「だよね・・・念のため、確認したかっただけ」
竜司「意外と歳くってるヤツかもな？加齢臭すごかったりして・・」
モルガナ「やめろ・・・ていうか、男に決まってんだろ？・・・だって・・・ワガハイは・・・」
杏「・・・何？」
モルガナ「いや、なんでもない。話は終わりだ！ともかく、小物の改心はメメントスで出来ることが分かった。目につく情報があったら実戦練習のついでに退治するのもアリだな」
杏「他に目ぼしいのはいなかったけどね・・・」
竜司「『大物』を改心させて怪盗団の名前を売れば、そんなもん山ほど書き込まれんだろ」
優斗「ならまずは、班目だな。明日行くか」
双葉「まだパレスには行ってないんだろ？私準備するから行くとき言ってくれ」
帰って自室
優斗「ところでよ、本当に何も知らねえの？」

優菜「とりあえず、確か死ぬ前にペルソナの新しいやつがあった・・・5が二学期まであった、4はゴールデンが出ていたから、5もロイヤルってのがあった。それが何かしらの（多分作者の意向）輩が途中から混ぜたんだろう、だが出る前に死んじまったから内容は分からん」

優斗「そう・・なるのか？」

優菜「あくまで予想だ」

優斗「ま、分からんことをいつまでも考えても仕方ねえな」

優菜「てかお前こそなんか変わったことないのかよ」

優斗「ん？・・・・気になったことは、カウンセリングの後にあった赤髪の女子かな」

優菜「赤髪？」

優斗「単純に普通の髪色じゃない奴、基本ストーリーに関わってくるからな」

優菜「あるあるだな」

赤髪の女子・・・ちょっと調べるか

寝た

第三十話

蓮「電車に乗るんだろ？もうすぐ出るぞ」
杏「うわ！ヤバいよ走って！」
電車
優菜「思ったより余裕あったな」
杏「あそこ開いてるから座ろう」
結果杏と蓮、俺が座って悠と竜司が立ってる
竜司「てかよ電車で移動する怪盗ってよ・・普通の下校風景じゃんか」
優菜「ならお前はビルの上走って帰るのか？バレるよりはいいだろ」
杏「うん、それに電車が一番早いでしょ。ペット乗せても大丈夫だしね」
モルガナ「おいコラだれがペットやねん」
竜司「ちょっ、会話に入ってくんな。ペット運賃、払ってねえんだよ」
モルガナ「ワガハイが、お前らを連れてやってんｄ」
ガッ
ズボッ
押し込んだ
優菜「黙れ、穴の中に入れるぞ」
モルガナ「穴？」
優菜「入りたいか？俺が開けるまで出れなくなるが」
モルガナ「わ、わかった！もう喋らない！」
車掌アナウンス「間もなく～渋谷～渋谷～。お出口は左側に変わります」
杏「あ、着いたよ」
降りたよ
竜司「んで、何線に乗り換えだ？」
杏「住所によると、あんま近い駅ないんだよね。あえて言うなら、最

寄り駅はここ」
竜司「はあ?あと全部、歩きかよ!?電車の次は、歩きって!どんな怪盗だよ!!」
モルガナ「いちいち文句タレるな」
杏「あばら家って言っても、こんな都会に住むなんて・・流石有名芸術家だよね。駅前広場に出て、セントラル街の方に行くのが早い見たい。行ってみよ!」
場所は双葉に調べてもらった
あばら家前
竜司「もしかして、アレ・・?」
優菜「ボッロ」
杏「住所も、あってるけど・・表札は「班目」ってなってる」
竜司「チャイム押してみろよ」
杏「私!?押したら、壁倒れたりしないよね・・・」
優菜「なら、私が押す」
竜司「私?」
優菜「そう言わないとおかしいだろ」
竜司「いやでも」
杏「流石に私って言われるのはちょっと」
ピンポーン
杏「え?」
竜司「押したのかよ!」
優菜「時間が惜しい」
祐介「どちら様でしょうか」
優菜「じゃ後は杏に任せた」
杏「え!ちょっ」
祐介「先生なら、今は・・・」
杏「高巻ですけど」
祐介「すぐ行くよ!」
優菜「すごい食い付きだな」
悠「なんか釣りみたいだ」

竜司「お前ら釣りすんの？」
優菜＆悠「しない」
ガララ
祐介「高巻さ・・お前らもか」
竜司「ちぃっす」
祐介「ん？一人増えてるようだが・・・」
優菜「え？あ、私？・・まあ気にしなくていいよ」
祐介「まあ今はいいか、何の用事だ？」
竜司「悪いけどモデルの話じゃねえんだ。訊きてぇことがあってよ・・斑目が盗作してるってマジ？虐待もなんだろ？」
祐介「正気か？」
竜司「ネットに出てんだよ」
スマホの画面を見せる
祐介「これ・・・？」
フフフ・・・アハハハハハ
大声で笑っている
祐介「くだらない！盗作もあり得ないが・・・虐待だと？虐待するほど子供が嫌いなら、住み込みの弟子なんて取るものか！それに今は、住み込みの門下は俺一人。俺が無いと言うんだから、疑う余地はない。」
竜司「お前が嘘ついてっかも知んねぇだろ！」
祐介「それは・・くだらない、身寄りのない俺を引き取ってここまで育ててくれたのは先生だ!!恩人をこれ以上愚弄する気なら許さん！」
杏「・・本当にそうなの？」
斑目が出てくる
斑目「祐介？どうしたんだ？大声を出して」
祐介「こいつらが、根も葉もない先生の噂を！」
斑目「・・許してやりなさい。悪い噂を耳にして、彼女の事を心配してきたんだろう」
祐介「・・・はい」

斑目「まあ、この偏屈な年寄りが、万人に好かれているとは自分でも思わんさ」
杏「そんな・・・」
斑目「横から出しゃっばって、すまなかったね。けど、ご近所の手前もある。ほどほどに頼めるかね？それじゃ、失礼」
中に入っていく
祐介「・・・非礼だったな・・すまん・・そうだ、あの絵を見れば、先生を信じてもらえるかもしれない」
スマホを取り出す
祐介「先生の処女作であり代表作・・・『サユリ』だ」
真ん中に赤い服を着た女性がいて、後ろに満月と木の枝
女性は何かに微笑みかけているが
目線の先は霧のようなものがかかって見えない
杏「サユリ・・・？」
祐介「俺が画家を志す、きっかけをくれた絵なんだ」
杏「きれい・・・」
竜司「ゲージツわかんねえけど、これすげえのは、わかる・・」
スマホをなおす
祐介「高巻さんを始めて見たとき、この絵を見たのと同じ感動があった・・・」
杏「私？」
祐介「俺は、こんな「美」を追求したい。君を描くこと、その一環だと思ってる。どうかモデルの話・・よろしく頼む。せっかく訪ねてもらったんだが、今日はこれから先生の手伝いなんだ。また、日を改めて・・それじゃ」
祐介も入っていく
竜司「なんか・・・いいヤツじゃね？二人とも」
杏「メメントスで聞いた『マダラメ』とは、別人なのかもね。優斗・・・優菜はどうなの？」
優菜「普通中身（パレス）の変更はあっても敵自体の変更はありえないはず、前は『班目』、『あばら家』、『美術館』だったと思うんだが・・・」

竜司「せっかく『大物』見っけたと思ったのによ・・・」
モルガナ「イセカイナビはどうなってる？」
イセカイナビ「ナビゲーションを開始します」
竜司「おいこれ、ナビ・・・」
杏「さっきの会話を拾ってたの!?」
ぶわ～ん
竜司「え!?ちょまっ！」
モナ「おい！いつの間に開始したんだ？ビックリしただろ！」
スカル「優菜が言ったやつがそのままだったんだから仕方ねえだろ」
モナ「もしワガハイが気付かずに歩いてって、また敵に捕まったらどうすんだよ！」
スカル「二本足で歩いてる時点で分かれよ」
モナ「むむむ・・・」
トゥルース「・・・とりあえず、少し見てみよう。先っぽだけ」
フォルス「だな、先っぽだけ」
スカル「・・・それ素で言ってんのか？」
トゥルース「あそこのトラックから行こう」
スカル「つか、アレ！あばら家が・・・美術館、マジ？」
パンサー「行こう」
塀に上り屋根の上を通って行く
すると
スカル「おっ！天窓が空いてんぞ！こっから入れんじゃね？」
パンサー「でも、けっこう高さがあるよ・・・戻ってこれる？」
モナ「フフ・・ロープを用意してあるぜ！ワガハイ、道具のプロだからな！どうするジョーカー、潜入するか？」
降りると
モナ「・・・静かだな、不気味なくらい」
パンサー「ね、ねえ・・・これ・・・」
スカル「なんだよ、パレスなんだし、ビビる事じゃねえだろ？」
モナ「パレス在り様は、主の心の在り様だ。絵は調べておいた方が

良いかもな・・・」
スカル「おっ、説明書いてあんな・・・えーっと・・・名前と年齢？なんだこりゃ？」
パンサー「絵のタイトル・・・じゃないよね？作者の名前かな？」
トゥルース「絵に描かれてる人の名前と年齢ってところだな」
モナ「・・・一応、他の絵も調べてみよう」
少し進むと・・・
パンサー「え？この人って・・・」
スカル「コイツって確か、メメントスにいた・・・中野原？だっけ？」
モナ「ああ、プレートに書かれてる」
トゥルース「で、向こうは・・・」
パンサー「え・・嘘っ!!」
スカル「この絵、アイツじゃねえの・・・？」
モナ「『喜多川祐介』って書かれてる、間違いないだろう」
パンサー「え・・・なら、ひょっとして・・・ここにある絵って全部・・・」
ジョーカー「班目の弟子」
パンサー「うん、そうだよね」
スカル「マジか、この人数全部か？前に屋敷に行ったときは・・・」
トゥルース「他は全員逃亡、もしくは死亡だな」
パンサー「そんな・・・！」
フォルス「もう少し進んでみよう」
ジョーカー「何だ？あの冊子、光ってるぞ」
身に行く
パンサー「これって・・・ここのパンフレット？」
スカル「パレスのクセに芸が細けぇよなぁ・・・こんなモン、無視でいいだろ？」
モナ「でもこれ管内案内図も載ってるぜ？使えそうだから頂いとこう！」
パンサー「もしかして、コレにオタカラの場所まで載ってたりして

！」
モナ「あり得ない話じゃないぞ？少なくとも、規模を知る参考にはなる」
パンサー「あれ・・・でもこの案内図・・・半分しか載ってないみたい・・・」
トゥルース「残り半分は道中で探そう」
先に進むと
モナ「こいつは・・・」
スカル「なんだ？これ・・・何か書いてんな」
パンサー「『無限の泉』・・・？『彼らは、班目館長様が私費を投じて作り上げた作品群である。彼らは自身のあらゆる着想とイマジネーションを生涯、館長様に捧げ続けなければならない。それが叶わぬ者に、生きる価値無し！』ねえ、コレ・・・たぶん、盗作のことだよね・・・？」
スカル「クソ、とんだ食わせジジイだ、あの野郎！」
モナ「弟子は『俺のモノ』ってことか。ホントなら、まともな絵描きですらないぜ。画才のある弟子の着想を、生活を保証する代わりに盗んでるんだ『生きる価値無し』ってのは虐待の事じゃないか？マダラメ様の役に立つうちは置いてやるけど、駄目になったら・・・」
パンサー「まるで奴隷や道具じゃない！」
スカル「なんで祐介は黙ってんだ？かばう理由ねえだろ!?」
パンサー「引き取ってくれた、恩人だって言ってたよね・・・」
スカル「だからってよ・・・！」
トゥルース「あいつを引き取ったときは祐介から見たら恩人だからな、班目の中にまだ汚れてない部分があるんじゃないかとか思ってるんじゃないのか？」
バタン
殿様？「なんだ貴様ら!!なぜ盗人が入り込んでいるんだ」
モナ「しまった！長話が過ぎたぜ!!」
殿様？「であえー!!」
周りにシャドウが出てきた

スカル「マジかよ・・・！」
ジョーカー「逃げ道はないか!?」
殿様「ふん、さっさと済ませろ」
バタン
トゥルース「マジでヤバいかもな・・・なら、みんな少し目を閉じろ！」
ピカーッ
トゥルース「みんな俺の後に続け」
ドカッ
ドガガガガ
スカル「よ、よしっやってやろうじゃねえか！キャプテンキッド!!」
ドガアアン
パンサー「カルメン!!」
ゴオオオオ
モナ「ゾロ!!」
ブオオオオオ
ジョーカー「アルセーヌ!!」
キシャアアン
フォルス「イフリート！」
ゴオオオオ
・・・・・
あと一人だ!!
トゥルース「行くぞ!!優斗!!」
フォルス「ああ！みんな出て来い!!」
ピカーッ
ジョーカー「星が!!」
フォルス「インフェルノ、サイコキネシス、アトミックフレア、心理の雷、万物逆転、コウガオン!!」
トゥルース「ワンショットキル、ギガントマキア、エイガオン、漆黒の蛇、明けの明星、ダイヤモンドダスト!!」

敵に全方向から攻撃が降り注ぐ
そして
フォルス「イフリート!!」
ブワッ
ヒュルヒュルヒュル
バシューン
赤い鎧を着る
スカル「なんだよあれ！」
モナ「あんなこともできるのか!!」
パンサー「行けー!!」
フォルス「シミラーダガー・リニアー!!!」
ダダダダダダダダ
相手に剣先の雨を降らせ
右に避け
ドゴゴゴ
ドウン
バチバチバチ
青い気のオーラ周りに黄色い雷がまばらに、そして青い超サイヤ人4
持つのは五秒ぐらいか
かめはめ波ー!!
ドギューン
ドガガガガ
ドギャーン
トゥルース「ふう・・・」
スウウウウ
ドサッ
パンサー「ちょっと大丈夫!?」
フォルス「いつもの体力切れだ、心配ない」
モナ「聞きたいことは山ほどあるが、とりあえずここを出るぞ！」
ぶわ～ん

外に出た
杏「寝ちゃってるよ」
モルガナ「ともかく、みんな疲れてるだろうから優斗達の変身は明日へ。ターゲットは班目でいいな？」
竜司「俺はいいぜ」
杏「私もいいよ」
蓮「俺もいい、双葉には聞いておく」
優斗「俺もいいぜ、こいつも多分ＯＫだ」
モナ「なら意識が戻ったら改めて聞いててくれ」
優斗「ああ」
蓮「まず、祐介から裏を取ったほうが良いだろう。班目の事を俺たちはぜんぜん知らない」
杏「なら私、喜多川くんに連絡してみるね。モデルの話受ければ、真相聞けるかもしれないし」
モルガナ「え？やんの!?」
杏「もちろん皆も来てよね！怖いし」
竜司「それじゃあ後は明日の放課後、学校の屋上に集まろうぜ」
蓮「それじゃあ、今日は解散だな」
優斗「あー、ちょっと待ってくれ。皆に聞きたいことがあるんだ、怪盗関係ではないんだが」
蓮「なんだ？」
優斗「ウチの学校で、赤い髪の女子っているだろ？名前わかるか？」
竜司「ん？なんか見たことあるような・・・」
杏「あの人かな？一年生の芳澤さん、新体操の推薦って聞いてるけど」
優斗「芳澤ね・・・わかった、ありがとう。じゃ、また明日」
竜司「ああ」
その夜
優菜「う、う～ん・・・」
優斗「おう、起きたか」
優菜「ああ、優斗か・・・家に着いたのか・・・!!?・・・なんで私

服なんだ・・・？（#^ ω^）」
優斗「そりゃあ、俺が着替えさせたからな」
優菜「・・・・とりあえず、飯だろ？」
夜ごはんを食べる
優菜「ちょっと散歩してくる」
お母さん「気を付けなさいよ」
優斗「俺もいるから大丈夫だよ」
ガチャ
優菜「公園に行くぞ」
優斗「ああ」
丸い石椅子の前に行く
優菜「お前が腕相撲で勝ったら、さっきの着替えの分はチャラにしてやる・・・その代わり、負けたらわかってるな？」
優斗「やってやろうじゃねえか」
優菜「無いとは思うが・・・引き分けならお前の勝ちでいいぜ？」
ドガッ
スタート!!
ググググ
優菜「な!?」
おされてる!?
優斗「別の世界でじいさんが、身体強化してくれたんだよ！」
優菜「それでも強化しすぎだろ!!」
ドウン
シュインシュインシュイン
超サイヤ人1
優斗「お前！超サイヤ人はなしだろ!!」
優菜「これぐらいハンデになんねえだろうが!!」
ググググ
いける!!
優斗「なら俺だって!!」
ブワッ

ヒュルヒュルヒュル
バシューン
優斗「イフリート!!」
赤い鎧を纏う
ググググ
持ち直しやがった!!
優菜「ならこれでどうだ!!」
ドウン
バチバチ
超サイヤ人2
優斗「な!?」
ググググ
優斗『こ、このままじゃ・・・殺される!!』
神様「神は言っている・・・ここで死ぬ定めではないと・・・」
優斗『黙れジジイ!!』
神様「ペルソナを重ねたらどうじゃ?」
優斗『・・やってみるか』
ブワーン
優斗「ウンディーネ!!」
ドゴォ
鎧の右半身が青くなる
優菜「クソッ!なら俺も!!」
ドウン
ヒューヒューヒュー
超サイヤ人3
優斗「俺だって!アラメイ!!」
鎧の下半身が黄色くなる
優菜「クッソー!!」
ゴオオオ
ドウン
超サイヤ人ゴッド

優斗「アウラ!!」
鎧の下半身の右半身が緑になる
優菜「まだ終わってねーぞ!!」
ゴゴゴゴ
ドウン
超サイヤ人ブルー
優斗「ブルーなんかに負けてたまるか!!!ガイア!!トラ!!」
右手袋が紫、左手袋が藍色になる
ドゴゴゴゴ
優斗『耐えきれるか!?』
優菜「うおおおお!!!」
ピカーッ
超サイヤ人４
優斗「アリエル！クロノス!!」
左靴が白、右靴が灰色
優菜「ぶっ壊れるまでやってやらー!!」
ドゴゴゴ
ドウン
超サイヤ人４＋ゴッド
優斗「カオス！ヘル!!」
両腕が黒く染まる
ドゴゴゴ
ドウン
バチバチバチ
超サイヤ人４＋ブルー
ピシピシ
石椅子にヒビが入っていく
優斗「ホバル!!ミヅハノメ!!」
両足水色に変わる
優斗＆優菜「うおおおおおおおお!!!!!!!!」
バカッ

優斗&優菜「バカッ？」
グラッ
体制が崩れ・・・・!!!
ドカッ
あた・・・ま・・・
ドサッ
Ω＼ζ。）チーン
スウウウ
優菜「・・・動ける？」
優斗「初めてであんなにやっちまったんだぞ？無理だろ」
優菜「・・・どうする？」
優斗「・・・どうしようか」
イフリート「仕方ねえな」
アリエル「皆さんで連れて行きましょう」
ヘル「周りから見たら飛んでるように見えるけど自業自得だからね」
なんとか家まで付いた
お母さん「おかえ・・り!?・・・何したの？」
アリエル「すいません、腕相撲してたら体力全部使っちゃったみたいで・・・お風呂沸いてます？」
お母さん「沸いてるけど・・・その状態で入れるの？」
アリエル「体とかは私達がやりますから大丈夫ですよ、では」
もちろん男と女に別れてな
風呂
アリエル「ちゃんと髪洗ってるんですか？」
優菜「洗い方がわかんねえ・・・」
ヘル「何でこんな事私が・・・」
ウンディーネ「まあまあ、たまにはいいじゃんか」
優菜「また優斗が入ってきたりとかねえよな？」
アリエル「安心してください、今度は三人いますから。それに、動けないでしょう？」

優菜「いや、向こうにはカオスがいるからな・・・もしかしたら仙豆で回復してるかも
外では
ガイア「誰一人通さないわよ」
アウラ「入ろうとしたら、吹き飛ばしてあげるわ」
ミヅハノメ「または凍らせてあげるわ」
トラ「チッ、ダメそうだ」
優斗「クソッ！ダメなのか!?」＊予想通り仙豆で回復してた
イフリート「死ぬ前に、やめるのも手だが」
クロノス「そもそも、何でこんな事をするんだ？そんなに死にたいのか？」
カオス「男の、ロマンじゃねーか」
アラメイ「バカだろ、お前ら」
戻って
ウンディーネ「そういえば・・・この前優斗が押し入ったとき、ガイアさん軽くキャラ崩壊してましたよね」
優菜「え？そうなの？」
優斗たちは
ホバル「そもそも、カオスの力使えば直接風呂に行けるだろ」
優斗&イフリート&トラ&カオス「その手があった・・・!!」
アラメイ「やっぱバカだろお前ら・・・てかカオスは忘れんな」
優菜ｓｉｄｅ
優菜「さてと、少しは動けるようになったな」
アリエル「それじゃあ、私達は出ましょうか？」
優菜「どっちでも構わねえよ」
優斗ｓｉｄｅ
優斗「だがどうする!?このまま行ってもアリエルたちに殺されるだけだぞ!?」
カオス「忘れてもらっちゃ困る、俺は空間を支配できる。つまりお前の周りの光をなくすこともできる!!」
イフリート「だがどうする？中に三人、外にも三人だぞ？」

トラ「任せろ」
風呂の外
ガイア「まだでしょうか」
ミヅハノメ「さあね」
トラ「入れろー!!」
ガガガ
三人とも連れて一気に出る
アウラ「な？」
ミヅハノメ「覚悟は？」
トラ「出来てない！」
ダダダダ
ミヅハノメ「待てやゴラァーーー!!」
ダダダダ
ガイア「とりあえず戻りま・・・」
ペタペタ
アウラ「何この壁!?」
ガイア「カオスの!!しまった!!!」
その頃風呂の外
アリエル「さっき、なんか物音したと思ったんだけど・・・」
ヘル「いないでしょ」
イフリート「それ！」
グイ
二人を外に出す
ヘル「何すんのよ！」
イフリート「いや、何でも？」
アリエル「とりあえず、戻りましょう」
ゴツン
ヘル「壁!?」
チーン
ヘル「アリエル!?・・・そうか、アリエルは物理弱点だから・・・！」

イフリート「これは想定外・・・」
ウンディーネ「どうかした？」
ヘル「戻って！」
ウンディーネ「え？なん・・」
ヘル「早く！」
ウンディーネ「わかったわよ・・・あれ？何この壁」
ヘル「しまった・・！アウラたちは外！アリエルは気絶、ウンディーネと私は動けない!!」
優斗ｓｉｄｅ
優斗「グッジョブ」
カオス「後は任せたぞ!!」
ブワン
優菜ｓｉｄｅ
優菜「あいつら、何してん・・・」
何あの隅の黒いの
髪・・？
あれ・・・？なんかどんどんこっち向いて・・・!!
優斗「よお、優ｎ」
優菜「ギャアアアア!!」
一分後
優菜「何であんな隅から出てきたんだよ、俺がドッキリ系一番無理って知ってるよな？」
優斗「場所はたまたまだよ」
優菜「ところでよ、なんでお前俺一応今女なのにあんな普通に入ってこれるんだ？」
優斗「だってよ、もともと一つなんだから自分の裸見てるのと同じじゃんか」
優菜「いや、圧倒的に違うよな？」
優斗「じゃあなんでお前は普通に一緒に入れるんだ？」
優菜「いや、なんつうか慣れた・・・さっきのでトラウマがぶり返したとかじゃないからな」

優斗「ぶり返したんだな」
優菜「してないっていってんだろ!!」
その夜
優菜「やっぱお前ってバカだよな」
優斗「俺がバカならお前もバカだ」
優菜「そもそも人格違うからそうはならないんじゃないか？」
優斗「そか？」
優菜「なんかバカバカしくなってきた」
優斗「あ、そういや赤い髪の女子の情報があったぞ」
優菜「本当か？」
優斗「こいつらしい」
スマホの画面を見せる
優菜「芳澤・・・かすみ？こいつで合ってるのか？」
優斗「あん時もこいつと全く同じ奴だった」
優菜「なら、こいつもストーリーに深く関係してくるだろうな」
優斗「髪が普通じゃない奴は大体、ストーリーに係わってくるからな」
優菜「情報も出たし、夜も更けて来たな」
優斗「じゃあ寝るか」
寝たんだが・・・
トラ「しつけえぞ!!」
ミヅハノメ「逃がさん!!」
この夜、謎の物音が街中であったという・・・・

第三十一話

学校・屋上

竜司「なんでペルソナで鎧が作れんだ？」

優斗「俺が聞きたい」

モルガナ「じゃああの変身は何なんだ？」

優菜「超サイヤ人４」

蓮「じゃあなんであの時星が光ったんだ？」

優菜「それは分からねえ、そもそもあの星自体よく分からねえ」

優斗「あの時思った事がまんま出来たけど、なんか関係あんのかな？」

杏「願いが叶うとか言ってたよね」

蓮「・・・大体わかった」

杏「そういえば、喜多川くんから返事きたよ。今日の放課後、来て欲しいって」

竜司「そりゃ願ったりだ。最速で予定に入れやがったな、アイツ」

杏「パレスで見たこと、ホントかどうか喜多川くんに確認しないと・・・」

優菜「そういや、双葉もいるから今日で終わりかもな。屋上に集まるのも」

竜司「そうだな、名残惜しいってわけじゃないんだが・・・どこで集まんだよ」

優菜「渋谷の連絡通路でよくね？」

蓮「楽だな」

杏「そういう問題？」

優斗「双葉といても後輩とか言えばいいからな」

ガチャと入口の扉が開き中から生徒会長の真が出てきた

杏「あ・・・」

真「ここ、進入禁止のはずだよ？」

竜司「・・・話、終わったらすぐ出るって。つか、会長さんが何の用っスか？」

真「問題児君に、噂の彼女、普通の転校生に中間試験学年一位・・・それに訳ありの転校生。変わった取り合わせだなって思って・・・特に転校生の貴方と学年一位の貴方は何でこの三人と一緒にいるのかなって」
杏「・・・・っ！感じワル・・・」
真「ところで・・・鴨志田先生と、いろいろあったみたいだけど？」
蓮「それになりにはな」
杏「この学校にいれば、嫌でも鴨志田先生と接点あるでしょ」
真「ふうん・・・前歴のこと、鴨志田先生が広めたらしいわね。バレー部員を使って、憎くない？鴨志田先生の事」
蓮「別にどうということはない、いずれ分かった事だろうしな」
竜司「さっきからなんなんスか？つか、こいつすげえ人間出来てるんで」
真「気を悪くしないで、鴨志田先生の件で動揺してる生徒も多いの。予告状みたいな妙な張り紙の噂も中々消えないし」
杏「以外、新島先輩って、あんなセンスない張り紙のこと気にしてんだ」
竜司「センスねえことはねえと思うけど・・・」
優菜「絵、以外はな」
真「あら、あの張り紙を見た事あるの？」
優菜「ネットで広まりまくってますから」
真「ていうか、どうして貴方さっきから男口調なの？」
竜司「つか、もうよくねえっスか？話しかけられてると出れねえし」
真「悪ふざけに付き合わされる身にもなってよ」
優菜「それで何もしてないのに疑われる私達の身にもなってよ」
真「なんですって？」
優菜「焦っても仕方ないと思うよ？そのうち分かる時が来るかもしれないし、それまでは頑張ってみたら？」
真「・・・・そうそう、ここね、例の事件もあったし閉鎖する事になったの。誰かさんたちが無断で入ってるって、そんな噂もあるしね・・・お邪魔してごめんなさい」

ガチャ
杏「何よアレ！」
モルガナ「・・・目つけられてるな、あのオンナ・・・なかなか頭がキレそうだ。用心しろよ」
竜司「マジでムカつく！」
優菜「どっちにしろ、ここも潮時だったからな。ちょうどいいだろ」
モルガナ「それじゃあそろそろ行くぞ」
優菜「そういや俺一位とったんだから成績落とすなよ!?」
優斗「俺の学力で出来るわけないだろ!?」
優菜「だったらみっちり教えてやる」
優斗「チッ・・・」
渋谷・連絡通路
竜司「いよいよ、デカい仕事だな。班目の尻尾、掴んでやろうぜ」
杏「ていうか喜多川くんってさ、明らかに班目の事庇ってるよね？一緒に住んでるんなら、班目の本性、知っててもおかしくないのに」
優菜「う～ん・・・弱みじゃなそうなんだよな・・・」
竜司「まあ、様子はおかしいよな。つか、これからそれを調べんだろ？大丈夫なのか？モデル」
杏「まあ一応、準備してたけど」
竜司「準備？・・・どっか変わってる？」
蓮「いつも通り」
優菜「いつも通り」
優斗「（ここは乗っておこう）いつも通り」
竜司「でもなんか、いつもよりメーク濃い気が・・・」
杏「いつも通り」
竜司「そ、そうか。まあ・・・行こうぜ、喜多川から話聞かねえと・・・」
杏「モデル引き受けたら、喜多川くん、かなり喜んでくれた。絵を描いてもらって場が和んできたら、班目の話を出す感じで行こう？」
優菜「周りからどんどん行かねえと一発で追い出されるぞ」
竜司「それじゃあいくか！」
あばら家に行く途中で

お婆さん「誰かー！ひったくりよ!!誰か捕まえて!!!」
竜司「なんだ!?」
ひったくり犯「どけ!!」
こっちに向かってナイフを右手に持ちながら走ってくる
左手にはお婆さんの物と思わしきバッグを持って
優菜「任せろ」
蓮「大丈夫か？」
優菜「今さらこんな奴にやられはしない」
ひったくり犯「どかないなら刺すぞ!!」
優菜「やってみな」
俺もバッグを置く
顔に向かってナイフを刺そうとしてくる
左手の親指と人差し指でナイフを止めて
ドカッ
腹パン
ひったくり犯「グハッ・・・！」
ドサッ
バッグを落とす
優菜「終わりと」
竜司「うわー・・・手慣れてるぞ、あれは」
優斗「何でか分からんがアイツ昔から色々巻き込まれてたからな」
杏「それなんかの呪いじゃないよね？」
お婆さんにバッグを返す
お婆さん「ありがとうねえ、あなた強いのね」
優菜「まあ日ごろから鍛えたりしてますから・・・コイツはお縄だな」
プルルルル・・・プルルル・・ガチャ
１１０番「こちら１１０番です。事件ですか？事故ですか？」
優菜「事件です。場所は○○区△丁目の？番の辺りで、ひったくりです。犯人は気絶してるんで、気絶してる間に来てくれると助かるんですけど」

１１０番「すぐに向かわせます」
その後こいつはお縄になって
あばら家へ
祐介「高巻さんだけだと思ってたんだがな」
杏「二人だけだと・・・緊張しない？」
竜司「監視だよ、お前が変なことしねえようにな」
祐介「妙な勘探りはやめてくれ、彼女に異性としての興味は一切ない」
杏「えっ？」
優菜「お前それ・・・男としても最低だぞ？」
祐介「何か問題でも？」
杏「・・・ううん、別に」
ちょっとふてくされてるな
祐介「よし、じゃあ始めよう」
・・・
その後は熱中して聞く耳持たなかった
というかモルガナいつ消えた？
数時間後
聞いたら
『自分は先生の作品だ』
『俺は着想を譲った、だから盗作とは言わない』
『先生は今、スランプなんだ』
『弟子が師匠を・・・助けて何が悪い!?』
『被害者など、どこにもいない！身勝手な正義を押し付けるな！』
それを聞いて俺は「やらない善よりやる偽善」ってコメントを、ある動画で見たのを思い出したぜ
『二度と来るな・・・次は迷惑行為で訴えてやる』
その後『完璧な裸婦画を完成させてみせる！』と暴露されて、出てきたんだが
カメラをさげた女性「ちょっと君達、話いいかな？」
竜司「ん？」

カメラをさげた女性「見たとこ君等、ただの押し掛けファンって雰囲気じゃないよね」
杏「あの・・・？」
カメラをさげた女性「あ、ごめんごめん。実は、班目の門下生と知り合いの人間を探してんの。昔、盗難にあったっていう、『サユリ』って絵があるんだけどね。当初の門下生が、班目の虐待の腹いせに盗んで出てった・・・って噂を掴んだワケ。何か・・・聞いたことない？」
優斗「知らないっすね」
カメラをさげた女性「そっか・・・被害者がいて、初めて事件になる。虐待がないとなれば・・・書きようもないか・・・一旦出直すかな・・・時間取らせて悪かったね」
蓮に近付く
カメラをさげた女性「アタシ、記者やってんの。何かネタあったら、ここに連絡くれる？」
名刺を渡して帰って行った
竜司「・・・今日は解散すっか」
その夜
ＳＮＳ
竜司「班目の事でヤバいことわかった。盗作を断れなくて自殺した弟子もいるんだと」
蓮「本当か？」
杏「記者の人も班目のこと調べてたよね」
優菜「ありえねえ情報じゃねえだろ」
竜司「死人だぜ？公になってないって事は圧力かけたんだ、きっと」
杏「喜多川くん、何か知らないのかな？」
優斗「協力してくれたら助かるんだけどな」
竜司「それは無理じゃね？今日のこともあるし、むしろ警戒されてただろ」
優菜「杏ならいけるだろ」
蓮「それは切り札だ」
杏「できればその切り札は使いたくない」

竜司「つか、明日集まろうぜ。初の新アジトだし」
杏「渋谷の通路のとこだよね？わかった、また明日ね」
渋谷駅
優斗「昨日はすっかりしごかれた・・・」
優菜「成績落としたら超サイヤ人４＋ブルーでタイキックだからな？」
優斗「骨盤が複雑骨折するからやめてくれ」
優菜「いや、多分複雑骨折って言うより腰だけぶっ飛びそうだな」
優斗「・・・嘘だよな？」
にしても周りはスマホスマホスマホって・・・
学生「よっしゃ！ＳＳＲ!!」
ドンッ
かすみ「きゃっ！」
学生「あっ・・」
サラリーマン「危ない！」
ＯＬ「電車がすぐそこまで!!」
仕方ねえ
コオオオオ
ズームパンチでリーチを伸ばして
ガシッ
一気に引っ張る
ドサッ
優菜「大丈夫か？」
ざわざわ・・
かすみ「はい、ありがとうございます」
学生「すみません！俺のせいで・・・」
優菜「こういう場所ではスマホはあんまりすんなよ」
優斗「それじゃあそろそろ行くか、あんまり目立ってたら面倒だ」
少し注目されたが普通に駅着いた
優斗「なあ」
優菜「どうした？」

優斗「お前一回お祓いしてもらったらどうだ？」
優菜「なんでだ？」
優斗「お前あんなん巻き込まれすぎだろ、絶対呪われてるって」
優菜「そもそもこんな小説の主人公やってる時点で呪いだよ」
優斗「それもそうか」
放課後・ＨＲ直後
川上「あ、優菜さん」
優菜「？どうしました？」
川上「今日今から時間ある？」
優菜「あー、ちょっとどうしても外せない用事がありまして」
川上「だったら明日の朝、少し早めに来れる？」
優菜「それなら大丈夫です」
川上「じゃあ明日の朝、話があるから」
優菜「？分かりました」
そして渋谷
双葉は連れてきた
そして蓮が来て
竜司「よお」
杏「私らもこれからアジトに行くとこ。！あのひとって・・・？」
スーツ姿の男「君・・・」
モルガナ「中野原だ。三島から連絡を受けて、今日渋谷で会う事になってたんだよ」
竜司「マジ・・・？」
双葉「先に連絡しろ、モナ」
モルガナ「ワガハイじゃなくて、蓮に言ってくれ！」
優菜「黙れ」
中野原「・・・中野原です。怪盗お願いチャンネル書き込まれた、中野原夏彦」
杏「なんか、優しそうな感じだね。ストーカーしてた印象ないよ。多分、改心うまくいったんだね」
中野原「管理者から、連絡もらってる。猫を連れた、秀尽の制服を

探せって・・・」
優斗「それで？何の用ですか・・・？」
中野原「聞いてると思うけど、怪盗団に改心して欲しいヤツがいる・・・斑目って画家だ」
皆「!!」
竜司「おいおい、キタんじゃね？弟子が師匠のヒミツを告白とかぁ？」
杏「そういえば、あの人のシャドウも、マダラメのこと言ってたよね」
中野原「私は班目の・・・元弟子なんだ。住み込みで、絵の事ばかり考えていた。本気で画家になりたいって思ってた・・少し上に、兄弟子がいてね。とても才能のある人だった。当然、班目に目を付けられたよ。作品はみんな、班目のモノにされた。まあ・・・兄弟子に限らずの話なんだがね・・・」
優菜「・・・弟子全員から・・・っつーことか？」
中野原「ああ・・・」
双葉「盗作のウラとれたな」
中野原「その兄弟子ね・・・自殺したんだよ」
杏「自殺・・・」
中野原「班目が自分作品で評価されているのを、よっぽど耐えられなかったんだろうさ・・・流石に恐くなって、私は班目の反対を押し切ってアトリエを出た・・けど、方々に圧力をかけられて、私は、絵の道を断たれていまった・・・心機一転で絵とは別の道を、区役所に勤めたけど・・・ダメだった。絵の執着で、気持ちが歪んでしまってね。なんにでも執着するようになった・・・ついにはストーカーにまで・・・ハハ・・・・・・改めてお願いだ。班目を改心させてほしい。一人の男の命を・・・救うためにも」
優斗「今いる祐介の事か」
中野原「ああ、絵の才能があるばかりか、彼、身寄りがなくて班目に恩義がある」
竜司「喜多川、言いなりになるしかねえって事かよ！」

中野原「まだ班目の所にいた頃、その彼に聞いたことがあるんだ。班目と一緒にいて、辛くないのかいってね。そしたら彼、こう言ったよ。『逃げられるものなら逃げ出したい』ってね」
杏「喜多川くん・・・」
中野原「逃げだした私が言うのもなんだが、自殺した兄弟子の悲劇を繰り返したくない・・・！せめて前途ある若者だけでも、助けられないかと・・・斑目の改心・・・検討していただけるよう、どうか、よろしくお願いいたします」
蓮「みんないいか？」
優菜「ひとつ聞きたいことがある」
中野原「なんだい？」
優菜「私達とあった事諸々、誰にも言わないと約束できるか？」
中野原「勿論だ」
優菜「指名手配されて、情報提供で３０００万貰えても？」
中野原「・・・承知の上だ」
優菜「・・・よし、ならあとは任せな」
去って行った
双葉「指名手配ってどういう事だ？」
優菜「クギを刺しただけだ」
モルガナ「マダラメの被害者から直接、頼まれたんだ。マダラメを改心させるのに、もう迷ってる暇はなさそうだ」
蓮「祐介を助けよう」
竜司「おうよ！班目は強い奴らを食いモンにする、正真正銘のクズだ！」
杏「自殺なんて・・・私の周りで、そんなことさせない！」
双葉「準備は出来てるけど、早速行くか？てか行こう、一刻も早く」
優菜「さっさとやろうぜ」
優斗「お灸をすえてやらねえとな」
モルガナ「じゃあ、全会一致ってことで、話の続きは新アジトでだ！」
新アジト、連絡橋へ

モルガナ「諸君、ようこそ新アジトへ！今回のターゲットはマダラメだ！見ただろ、あのパレス。前と同じなんてナメてたら痛い目見るぜ？」
双葉「私見てないんだが？」
優菜「入ったらわかる」
モルガナ「それに・・・杏殿の貞操がかかってる!!」
杏「はあ!?」
モルガナ「やることはカモシダやフタバの時と同じだ。まずはパレスで潜入ルートを確保。その上で『心を頂く』予告。オタカラを『実体化』させて、いただく」
竜司「はいはーい、質問！班目って、俺らの事知らねえじゃん？何で警戒されてたわけ？」
優菜「誰も信用してないからだ」
モルガナ「ああ、知らない相手は全員敵扱いなのさ」
杏「でも、悪い噂が広まってるって知って、イライラしてるだけなのかも・・・」
優菜「少なくとも、班目が悪い奴なのは確定だ」
モルガナ「なんにせよ、ワガハイ達は、いい子ちゃんでいっとこうぜ。無駄に警戒度を上げたら、お宝を盗りづらくなる」
杏「今回は喜多川くんにも気をつけないとね。見られた事は、すぐ班目にも伝わるだろうし」
モルガナ「その通りだぜ！」
杏「てか班目のオタカラって、見た目どんなの？また王冠？それとも自分自身？」
優菜「オタカラは主が歪みの源をどう思ってるかによって変わるはずだ」
モルガナ「モノを見れば、ワガハイの直感で確実に分かる」
竜司「ああ、変なテンションになるからな、お前」
双葉「今回の期限は個展の終了でＯＫか？」
優菜「ＯＫだ」
杏「ってことは・・・六月五日だ」

モルガナ「今回も『予告状』を出した後で『決行』だ。だから戻って、『六月二日』には潜入ルートを確定しないとな」
杏「いい？絶っっっっっっ対に、失敗できないんだからね？」
蓮「よし、行こう」
班目パレスへ
モナ「分かってると思うが、まずは潜入ルートの確保だ」
スカル「その後で、予告状だろ？分かってるって、気を引き締めて行こうぜ！」
そしてみんなにペルソナやってほしいからギミックはカットして・・・
あ～、そうそう言い忘れてた
なんか最初のギミック？というか赤外線が変わってて通れなくなってたからモナがジョーカーにワイヤーを渡してそれで飛び越えた
後、何か変なイシがあったぜ
え？もっと詳しく？原作プレイしたらわかる事だし書く意味ないね
ここら辺は全く知らないからちょっと焦った
パンサー「だいぶ進んだね」
ナビ「全体で言ったら、そろそろ半分ぐらいか？」
スカル「まだ半分かよ・・・」
トゥルース「そろそろ、障害があってもおかしくないな」
ジョーカー「ん？なんだ、あのデカい襖は？」
右方向を見ると何個もの襖が道を閉ざしていた
ナビ「左の道の奥にある部屋は、セーフルームっぽいな」
フォルス「通らなきゃダメか」
モナ「慎重に行けよ」
触ろうとすると、バババッと襖が開いて行った
ジョーカー「・・・ただの演出？」
ナビ「・・・シャドウに気づかれたわけでもないし・・・確実に演出だな」

スカル「ていうか、開きすぎだろ」
奥に行くと少し広い道に出たが赤外線の柵が何重にもあり、しかもその奥にはさっきの襖よりも大きな襖があったままあそのまた奥に建物があるんだが
そして手前の右側には立札が立てられていた
スカル「げっ、何だこりゃ！」
パンサー「これ、例の赤外線だよね？こんなの超えられないじゃん・・・」
モナ「だがこれだけ厳重って事は、守りたいものがこの先にあるって証拠だ」
トゥルース「赤外線は超えられなくはない、ただあの襖の先に道があるなら襖を開けないとダメだろう」
パンサー「待って、立札になんか書いてある・・・『警備員各位。展示期間中、宝物殿への扉は、殿内の警備室のみで開閉が管理される・・・外からの開錠は不可能なため、各員とも注意されたし』・・・」
スカル「外から絶対に開かねーって事かよ!?どうすんだこれ・・・！」
モナ「待て・・・あの奥の扉・・・あの柄・・・どこかで見た様な・・・」
トゥルース「あるとしたら、あばら家じゃないか？班目のパレスだからな」
モナ「・・・そうか！あそこだ！あそこの襖と同じだ、間違いない！お前ら、一旦引き上げだ！」
スカル「はっ？なんでだよ！」
モナ「あれが現実のどこの扉の認知か、見当がついた。『別のやり方』で、こじ開けられるかも知れない！説明は後だ、とにかく戻るぞ！」
トゥルース「どっちにしろ、これ以上進めないからな」
ジョーカー「分かった」
そして今日の探索が終わった
竜司「どうやったらあの先に進めんだ？」
杏「さっき優菜があばら家のこと言ってたし、あばら家のどっかに

あるの？」
モルガナ「その通りだぜ杏殿、前に来た時に偵察してたら二階の一番奥にあれと同じ襖の部屋があった。しかも不自然にゴツイ鍵がかかってた」
竜司「双葉の時と同じなら、そこが開けばいいのか？」
モルガナ「本人の目の前でな」
杏「でも開けるにはゴツイ鍵がいるんじゃないの？」
モルガナ「ワガハイにかかればヘアピン一本で楽勝さ。でも多少はかかる、流石にこじ開ける所からぜんぶ班目の前でこなすのは無理だ。ほんのちょっとの間、目を逸らしといてくれる人が・・・いたらなぁ・・・」
杏「・・・ん？」
竜司「あー・・・あーあー。つーかぁー、屋敷に入んのもー、どうやるかなー。無理に入ったら、今度こそ通報だしなぁー・・・」
杏「なに？」
竜司「やっぱ・・・ヌードしかなくね？」
杏「はあ!?」
竜司「奇遇だぜ、リュージ。同じこと考えてた」
杏「ふざけてんの!?」
モルガナ「班目の家に怪しまれずに入るには、それが一番の口実だ・・・杏殿に、一芝居うってもらいたい」
優菜「杏、これは運命だ。大丈夫、大変な事にはならないから」
双葉「それフラグってヤツだ、リアルで初めて聞いたぞ」
優菜「いや、普通に着込んで着込んで着込みまくって脱ぐ時間に時間かければ行けるだろ」
杏「でも、そのカギのかかってるとこ、私知らないよ？」
モルガナ「大丈夫、ワガハイも同行する」
杏「けど、実質私一人じゃん・・・最悪、バレた時どうすんの・・・？」
モルガナ「パレスに逃げ込む・・・とか？」
杏「それ・・・大丈夫なの!?解決になってる!?てか、自信無さげに

言わないでよ！・・・ホントに私が・・・囮やるしかない・・・？」
蓮「任せても大丈夫か？」
杏「・・・それしかないんでしょ？分かった、やる」
双葉「我らの命運は、杏に託されたというワケだな！」
優菜「いざとなったらいつでも逃げていいからな」
杏「仕方ない仕方ない仕方ない仕方ない・・・」
優斗「・・・大丈夫だよな？」
竜司「頼んだぞ、モルガナ！ちゃっちゃと開けろよ？」
モルガナ「任せろ！」
杏「無理に脱がせようとしてきたら・・・あの家、ぶっ壊す・・・！てか、ここまでやってパレス開かなかったら暴れるからね!?」
竜司「どのみち、悪事の裏取りしようって流れだし、むだにはなんねーよ。よし、早速明日な」
杏「明日!?」
竜司「早い方がいいに決まってんだろ？」
杏「え、でも・・・そう、喜多川くんが、いいって、いうかな？」
竜司「んなの『私明日じゃないと無理～』とか送っときゃいいだろ」
そして杏がため息をついたのち、解散した
夜、ＳＮＳ
竜司「祐介と連絡ついたか？」
杏「明日、家に来てくれって」
竜司「食いついたか！」
優菜「さっきも言ったが、危ない時は、はよ逃げろよ。捕まって動けんくなったりしたら元も子もない件」
蓮「件？」
優菜「誤字った」
双葉「明日決行だよな？」
蓮「ああ、杏殿とワガハイがあばら家で、オマエラはパレスで待っててくれ。開けた後に装置を解除するためだ。ｂｙモルガナ」
優菜「解除したらさっさと逃げるからな」
蓮「それじゃあまた明日」

そして次の日
優菜「今日は朝から川上先生に呼ばれてるから先に行かせてもらうぞ」
優斗「おう」
スマホで天気予報を見る
優菜「今日は午後から雨か、傘を持って行かないとな」
お母さん「いってらっしゃーい」
優菜「行ってきまーす」
7時30分
優菜『さてと、まず職員室に行こう』
下靴を脱ぎ靴箱に入れ、上靴を出して履こうとするが
グリッと違和感があり、上靴を脱いで中を確認すると、針が90度曲がった画鋲が入っていた
優菜『なんだこれ、画鋲か？久しぶりだな。いじめかな？いやでも、俺嫌われるようなことしたっけ？』
女子「クスクス」
優菜『ん？』
声のした方向を見ると、女子がいて、そそくさと逃げて行った
優菜『あいつか、いじめはめんどくさいからな。一回〆るか』
川上「あれ？優菜さん？どうかした？」
優菜「あ、なんでもないです」
川上「？そう、なら話はもう通してるから生徒指導室に来て」
先生は三階の方に行った
優菜『とりあえず邪魔だから画鋲取ろう』
全部処分した後二階の生徒指導室へ
川上「座って」
椅子にテーブルを挟み先生と向かい合って座る
川上「聞きたい事っていうのは・・・見せた方が早いわね」
そう言ってスマホを取り出しあるサイトを見せる
優菜「秀尽学園裏サイト・・・どの学校にも裏サイトってあるんですね。というか先生裏サイトとか確認してるんですか？」

川上「今はそこは関係ないでしょ、聞きたいのはこれよ」
画面を見ると２０１６年５月１６日や１８日、つまり昨日の書き込みまであった
優菜「皆割と見てるんすね」
川上「一番大事なのは、これよ」
指差された書き込みを読む
２０１６年５月１３日２０：２６：４０
学校だるい名無し「今日転校してきた優菜って子、初日から優斗くんに色目使ってマジだるい」
学校めんどい名無し「マジそれな」
学校だるい名無し「絶対優斗くん迷惑してるって」
学校消えてほしい名無し「なら今度少し懲らしめない？」
学校めんどい名無し「どんなの？」
学校消えてほしい名無し「上靴に画鋲とか」
学校だるい名無し「でもそれバレたらヤバくない？」
学校消えてほしい名無し「だったら三人で少し考えない？」
学校めんどい名無し「だったら明日もこの時間ね」
学校だるい名無し「ＯＫ」
ここで１３日の書き込みは終わってる
優菜『俺ってモテたの!?』
川上「貴方と優斗くんは同じ家に住んでるのよね？あなたが居候という形で」
優菜「はい」
川上「それで事情を知らずに、こんなことを言ってる人がいると」
優菜「そうですね」
川上「次の日も言ってたけど、昨日の書き込みが一番ひどかったわね」
２０１６年５月１８日２２：１４：０１
学校だるい名無し「結局どうすんの？」
学校めんどい名無し「原点回帰の上靴に画鋲はどう？」
学校消えてほしい名無し「もうそれでよくない？」

学校だるい名無し「もうそれでいいよ」
学校消えてほしい名無し「じゃあ誰がやるの？」
学校めんどい名無し「じゃあ私やるよ」
学校だるい名無し「ＯＫ、バレないでよ？」
学校めんどい名無し「分かってる」
とここで終わってる
川上「今日、貴方の上靴に画鋲を入れる。みたいな書き込みがあったんだけど・・・さっき上靴の中見てたけど、画鋲が入ってたの？」
優菜「・・・いや、ただの埃ですよ」
川上「・・・とりあえず、何かあったらすぐ言ってよ。問題になってからじゃ遅いんだから」
優菜「分かりました」
生徒指導室から出て教室に入ると
優菜「・・・マジかい」
黒板に「優菜は優斗と付き合っているにも関わらず五又している」と書かれていた
優菜「・・・それは蓮だろ。３以降は何又できるかだぞ、このゲームは。まあこの世界の蓮もそうとは限らんがな」
ついでに俺の机に「死ね」や「消えろ」や「見るだけで吐き気がする」などが書かれていた
筆跡的には三人ほどだ
とりあえず消す
ちなみに黒板は黒板消しで縦に消してから横に消すと綺麗になる
そして優斗や蓮たちが登校してｋ
クラスの女子「ねえねえ優菜ちゃんってさ、優斗くんのことどう思ってるの？」
・・・みんなは覚えているだろうか・・・前、分離する前だっただろうか。あの時に現実で一回優菜の姿になり、その時に偶々動画を撮られた上にネットに投稿された。しかもそれをクラスの女子に見られ、問い詰められたあの時の事を
あの時の女子である

優菜「な、何の話？」
そういえば名前を書いていなかったな
木幡美穂（きはたみほ）な
美穂「優菜ちゃんは、転校してきてからいっつも優斗くんと一緒にいるでしょ？」
優菜「あー・・・まあ居候してるしね」
美穂「え、そうなの!?」
優菜「理由は聞かないでめんどくさいから」
美穂「へー、そうだったんだ」
そして昼休み
キーンコーンカーンコーン
優菜『弁当食べる前に、トイレに行こうかな』
トイレの個室へ
すると誰かが二人ほど入ってきた
だるそうな女子「さっき優菜が入って行くのが見えたよ」（小声）
強い口調の女子「よし、用具入れにバケツあるから水入れて上から流すよ」（小声）
優菜『来たか、なら魔法で水の受け皿でも作って濡れるの回避しよう』
だるそうな女子「せーのっ！」（小声）
ザバーッ
強い口調の女子「逃げろっ！」
ダダダダッ
優菜『さてと、この水どうしようか・・・とりあえず出よう』
出て誰も居ないのを確認し水を捨てようとすると
ツルッ
優菜「え？」
ドテッと転ぶ
優菜「なんで通路がこんな水浸しに・・・って水のコントロールｇ」
ザパーン
優菜「・・・とりあえず優斗に代えの制服かなんか頼んで・・・」

スマホがつかない・・・壊れてしまっている
優菜「クロノス、スマホの時間戻して」
時間を戻して連絡した
優菜「保健室に行こう」
周りの視線が痛い・・・
保健室に行くと、丸喜先生がいた
丸喜「あれ？優菜さん？どうしたｎ・・・って何でずぶ濡れなの!?」
優菜「トイレの水浸しの所で盛大に転んだだけです」
丸喜「盛大に転んでもそんなに濡れないと思うけど・・・とりあえず保険の先生呼んでこようか？」
優菜「いや、保健室ならシャワーあるんじゃと思って来ただけなんで。着替えは友達に連絡済みだからもう少しで届くと思います」
ガララララ
優斗が手提げを持って入ってきた
優菜「あ、ちょうど来ましたね」
優斗「制服なんか何に使うんだ？・・・というか何でそんな濡れてんだ？」
優菜「説明は後」
丸喜「とりあえず・・・シャワーはここかな？」
シャワー室の前のカーテンを開けて中を見ながら言う
優菜「ですね。それじゃあ、先生は反対側の壁見ててください」
丸喜「ああ、うん。分かったよ」
優菜「優斗は手提げ置いて戻ってて」
優斗「ああ、早めに戻って来いよ」
優斗は教室に戻り優菜はシャワーを浴びる
丸喜「あれ？そういえばタオルはあるのかい？」
優菜「あ、無いですね」
丸喜「じゃあ少し探してみようか？どこかにあると思うし」
そしてシャワーが終わり出ると同時に
丸喜「これでいいかな？」
そう言いカーテンが開く

丸喜「ってうわぁ！ご、ごめん!!」
丸喜が目を手で隠す
優菜「いや、別にいいですけど」
丸喜「こ、これタオルだから！ホントにゴメン！」
タオルを渡し丸喜が外に出てカーテンを閉める
タオルで体の水を拭く
丸喜「・・・少し聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」
優菜「大丈夫ですよ」
丸喜「身体にあるその無数の傷・・・それは一体何だい？」
優菜「・・・喧嘩とでも思ってください」
丸喜「全部治ってはいるけど後は残っているよね。相当な喧嘩だったんだね」
優菜「喧嘩というより死闘ですけどね」
丸喜「死闘!?」
優菜「まあその話はまた今度でいいですか」
丸喜「う、うん」
着替えも終わり
優菜「それじゃあ、また」
丸喜「話したいことがあったらいつでも来ていいからね」
優菜「はーい」
外に出て教室に戻る
優菜『さて、弁当を・・・無い？』
鞄の中を探るが弁当らしきものは手に当たらない
優菜『今度は弁当か・・・よし優斗の弁当を分けてもらおう。気は・・・
屋上入口の扉の前？行ってみようか』
屋上への階段前
優斗「優菜？それならさっき保健室に行ったが」
竜司「そうか、サンキュー！」
竜司が降りてきた
竜司「早く教えてやらねえと」
優菜「誰に何を教えるって？」

竜司「うわっ！って優菜か・・・お前に言っとかないといけないことがあってな・・・」
優菜「・・・じゃあさっきのとこでいいだろ」
竜司「それもそうだな」
階段を上がる優斗が弁当を食べていた
優斗「どうかしたのか？」
優菜「竜司が俺に話があるってさ」
優斗「だから探してたのか」
竜司「あんまり人に見られたくない話だからな」
優菜「聞かれたくないじゃないか？」
優斗「席外した方がいいか」
竜司「いや、優斗も聞いたほうがいいかもしれねえ」
優斗「そうか」
竜司「さっきチラッとお前らの教室見たら、お前の席から弁当取って持ち出してるやつがいたんだよ」
優菜「どんなやつ？」
竜司「女子だが詳しいことは分からねえ、でも多分同じクラスのやつじゃないか？」
優斗「蓮とか杏はいなかったのか？」
竜司「確かいなかったと思うぜ」
優菜「まあ、それは俺がどうにかするから、お前らは今日の潜入のこと考えろ」
竜司「いや、そうだけどよお。気になってな。もしかしたらいじめかもって」
優斗「よしどこのどいつだ今すぐ占めてやる」（早口）
優菜「だから、自分でどうにかするし、無理そうだったら助けぐらい呼ぶ・・・・ところで優斗、弁当分けてくんね？」
優斗「いいぞ」
そして放課後
クラスの女子「優菜さん、ちょっとついて来て」
優菜「ん？いいよ。優斗達先行ってて」

蓮「分かった」
校舎裏へ
優菜「ここまで来て話す話って何？土砂降りの中話すの？」
クラスの女子「うん、ちょっと待ってて」
校舎の死角に入って行った
↑↑
ーーーー→
ーー→
ー
って感じで
優菜『さっきから、ついて来てるやつがいるな。一人・・・いや二人だな』
クラスの女子「優菜さん、ちょっと来て」
死角から声がする
優菜「・・・分かった」
死角を進むと
クラスの女子「死ねえええ！」
そういいナイフを振りかざしてきた
もちろんナイフが折れたら面倒なので後ろに飛ぶ
そして後ろにいた仲間に左腕と右腕を封じられる
ナイフの女子「そのまましっかり捕まえててよ」
左腕の女子「アンタが・・・悪いんだからね」
優菜「何もしてないんだけど」
右腕の女子「そんなわけないでしょ。ネタは上がってんのよ」
優菜「・・・まあいいや。どうせ殺す気はないんでしょ？それだって脅しだけだろうし・・・ていうかそれ本物じゃないでしょ、百均とかに売ってる刃が入るやつ。ついでに言うと、さっきも当てる気なかったでしょ」
ナイフの女子「もー！うるさいわね!!それじゃあホントに本物使うわよ!?」
優菜「いや、むしろ使いなさいよ、あるなら。画鋲の時点でもう戻

れないでしょ」
ナイフの女子「分かったわよ！使えばいいんでしょ使えば！」
鞄から光沢のあるナイフを出してきた
左腕の女子「え!?それって大丈夫なの!?」
右腕の女子「傷害とか私ゴメンだからね!?」
優菜「雨の中刺せば、血の匂いやナイフの血、もし殺しても私の死亡時刻もずらせる・・・てかそれ銃刀法違反・・・って私が言える立場でもないな」
ナイフの女子「何か言った？」
優菜「いーや？何にも？」
ナイフの女子「条件を飲んだら今後一切いじめはやめてあげる」
優菜「条件って？」
ナイフの女子「今後一切優斗くんに干渉しない事よ」
優菜「それは必然的に無理だね」
ナイフの女子「は!?なんで？」
優菜「学校の班とかあるじゃん」
ナイフの女子「じゃ、じゃあ学校で絶対にやらないといけないこと以外はダメ！」
優菜「それも無理」
ナイフの女子「次は何!?」
優菜「だって優斗の家に居候してるから、いやでも夜会うよ」
ナイフの女子「嘘でしょ!?」
優菜「嘘じゃないよ」
右腕の女子「でも確かに、居候なら初日から一緒にいてもおかしくない・・・？」
ナイフの女子「ちょっと一回話し合おう。二人ともちょっと来て」
拘束がとかれ話し始めた
優菜『今のうちに逃げよう』
タッタッタッタ
連絡を取ると先にパレスに行ったらしい
なんでも優斗が「アイツは絶対ＯＫだ」って言ったからだって

全会一致はどうした

班目パレス

フォルス「そろそろ来てもおかしくないんだが・・・」

トゥルース「来たぞー」

スカル「おお優菜！大丈夫だったか？」

トゥルース「ああ、一応な。まああれぐらいのいじめぐらい大丈夫だよ。前の世界に比べればね」

ナビ「い、いじめ!?」

トゥルース「気にしなくてもいい」

スカル「にしてもアイツら・・・ホントに大丈夫か？『演技で誘惑してみせる』とかだいぶハードル高ぇこと言ってたけどよ・・・開く気配、全然ねーぞ・・・もうすぐ班目が帰ってくんだよな？つかよ、鍵をモナが開けられたとして、班目に見せるって、難しくね？見せたとしても、フツーすぐ閉めんだろ。チャンスって一瞬しかなくね？」

ナビ「ざっと言っても、ソシャゲの闇ガチャぐらいじゃないか？第五〇格とか、最近はウイ〇レのＩＭとか。やったことはないがデレ〇テや荒野〇動とかスク〇ト、ＦＧＯもよく見かけるな」

トゥルース「ウ〇イレのＩＭって？俺それ知らねぇ」

ナビ「最近出たらしいぞ。これでとうとう課金ゲーかってスレもあったぞ」

フォルス「・・・話を要約すると？」

トゥルース「絶望的」

スカル「それって、うまくいったら奇跡って事じゃねえか！」

フォルス「まあ信じる以外の道はないしな」

スカル「・・・そろそろだな」

・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・

スカル「何も起きねえ・・・状況、どうなって・・・ん!?」

すると地面が揺れ、襖が開き赤外線が消えた

スカル「・・・来た！」

ジョーカー「行けたか」
フォルス「なら早めに行こう」
トゥルース「閉じる前にな」
スカル「そういやそうだったな！」
中に入ると門番のように入口にシャドウがいた
ナビ「動くそぶりもない。やるしかなさそうだ」
ジョーカー「行こう」
シャドウのそばまで行く
スカル「わりィな！そこ通してもらうぜ!!」
シャドウ「ぬっ!?なんだ!?お前達は!!そうか、その恰好・・・お前達が班目様に仇成す族かっ！」
そしてシャドウがヌエになる
ヌエ「セキリュティを突破してきたのかっ!?・・通してなるものかっ！マダラメ様のお膝元であるっ！」
スカル「お前らなんて眼中にねえんだよ！ここでヘマして杏にドヤされる方が、よっぽど怖いってのっ！」
トゥルース「ヌエの弱点は火炎だ！」
フォルス「イフリート、インフェルノ」
ゴオオオオオオ
ヌエ「ぬあああああ!!」
シュワアア
スカル「倒したな？また見つかったら面倒だ。さっさとセキリュティ切っちまおうぜ！」
左側の部屋で制御室を見つけ解除し、出てきた
すると赤外線を出していた機械がしまわれていった
スカル「うっし！完全にセキリュティ止まったっぽいな！とっとと戻ってパンサー達と合流しようぜ！あいつらも、上手く逃げてりゃいいけど・・・」
パンサー「いやあああああああああ！」
空から声が聞こえ、見上げると穴が開き杏と祐介、そしてモルガナが降ってきた

祐介が杏を受け止めながら着地
祐介「うぐっ・・・」
そしてモルガナが祐介の頭に直撃した
祐介「うがっ・・・」
モナ「あああ・・・いっってええええ!!」
パンサー「死ぬかと思った・・・って、いつまでくっついてんの!」
祐介を押して祐介が倒れる
祐介「うごっ・・・」
パンサー「やば!変なとこ入っちゃった・・・?大丈夫?目を覚まして!」
ナビ「オーバーキルだな」
なんとか祐介が意識を持ち直した
祐介「なんだ、お前ら!?」
パンサー「待って、喜多川くん!私だって!」
祐介「高巻さん・・・?じゃあ、お前らは・・・その着ぐるみには見覚えが無いが」
モナ「着ぐるみ!?」
祐介「何なんだ、ここは・・・?」
パンサー「・・・心の中よ、班目の」
祐介が立ち上がる
祐介「先生の・・・『心の中』?高巻さん、悪いが・・・気は確かかい?」
スカル「嘘じゃねえ、これが奴の本音なんだよ。欲望まみれの・・・金の亡者ってこった」
祐介「でたらめを言うな!」
トゥルース「でたらめじゃない、それはお前が一番分かってるんじゃないか?一番近くにいたお前が」
祐介「それは・・・」
パンサー「信じたくないかも知れないけど、ここは班目が見ている『もう一つの現実』・・・斑目の本性なの」
祐介「こんな、おぞましい世界が・・・お前ら、いったい何なんだ

？」
スカル「腐った悪党を改心させる集団・・・てとこか」
祐介「確かにお前らの言うことが本当なら、俺の知る先生など、何処にも・・・」
スカル「目ぇ覚ませって」
祐介「だが・・・それでも十年置いてもらった恩義だけは・・・消えない」
スカル「許すってのかよ!?このままじゃお前・・・！」
祐介が倒れこむ
祐介「う・・・うぅっ・・・」
パンサー「大丈夫？」
祐介「頭の理解に、気持ちがついていかない・・・」
モナ「悪いが、のんびりしてられないぜ！すんごい警戒されてる！さっさと、ズラかるぞ！」
祐介「ハァ、ハァ・・・」
ジョーカー「肩を貸そう」
祐介「・・・いや、結構だ」
立ち上がり道を戻っていく
モナ「急いでここから脱出するぞ！とはいえ、シロートを一人抱えちまった。戦闘はできる限り避けて行くぞ」
道の端々にある、モノを見て少しずつ祐介の顔が険しくなっていく
泉の像まで行くと出口に二体シャドウが現れる
モナ「出口は目の前だってのに！」
シャドウ斑「アーハッハッハッハ!!」
後ろから班目の声がし、振り返るとシャドウ二人を連れて殿様の恰好の班目が歩いてきた
パンサー「うわっ、この前の・・・」
シャドウ斑「ようこそ、班目画伯の美術館へ。いや、来館は二度目だったか？」
祐介「え・・・？先生・・・なのですか？その姿・・・
パンサー「サイテー」

祐介「嘘ですよね・・・？」
シャドウ斑「あんなみすぼらしい格好は『演出』だ。有名になっても、あばら家暮らし？別宅があるのだよ・・・オンナ名義だがな」
祐介「なぜ、盗まれたはずのサユリが保管庫に？本物があるのに、なぜたくさんの模写を!?聞かせてくれ・・・貴方が先生だというのなら！」
シャドウ斑「まだ気づかんのか、青二才め。『盗まれた』など、私が流したデマだ！全部、計算しつくされた『演出』なのだよ！」
祐介「どういう・・・ことだ!?」
シャドウ斑「たとえば、こんなのはどうだ？『本物が見つかったが、公に出来ない事情がある。特別価格で譲りたい』・・・ハハ！どうだ、この『特別感』！俗人共は、大枚はたいて食いついてくる！」
祐介「そんな・・・」
祐介が膝をつく
シャドウ斑「絵の価値など所詮は『思い込み』・・・ならばこれも正当な『経済効果』だ！まあ、ガキには想像できんだろうがな！」
スカル「さっきから金、金、金・・・どうりでこんな気持ちワリィ、美術館ができるわけだぜ！」
パンサー「てか、あんた芸術家なんでしょ!?盗作とか恥ずかしくないわけ!?」
フォルス「そこんとこどうなんだよおい！」
シャドウ斑「黙れガキが！」
トゥルース「正論言われてロクな反論できないからそんな風にしか言えないんだろうが！ｗｗｗこんな大人にはなりたくないねえｗｗｗｍ９（^Д^）プギャー」
ナビ「うわー・・・ネットによくいる奴だ」
シャドウ斑「ともかく！芸術など、ただの道具にすぎぬわ！カネと名声のためのな！お前にも稼がせてもらったぞ、祐介・・・」
スカル「ムカつくけどよ、あれがお前の師匠だ」
祐介「なら、貴方の才能を信じている者は・・・天才画家と信じてきた人々は・・・！」

シャドウ斑「・・・これだけは言っておいてやる、祐介。この世界でやっていきたいのならば、私に歯向かわぬことだ。私に異を挟まれて出世できると思うか？フハハハハ！」
祐介「こんな・・・こんな奴の世話に・・・なっていたとは・・・！」
シャドウ斑「ただの善意で引き取ったとでも思っておったのか？有能な弟子を集め、着想を吸い上げれば、才能ある目障りな新芽も摘み取れる・・・着想を頂くなら、大人よりも、言い返せん子供の将来を奪ったほうが楽だ」
祐介「なんてことを・・・」
シャドウ斑「家畜は毛皮も肉も剥ぎ取って殺すだろうが。同じだ、馬鹿者め！・・・喋り疲れたわい。そろそろ・・・」
祐介「・・・許せん」
シャドウ斑「ん？」
祐介「許すものか・・・お前が、誰だろうと!!」
シャドウ斑「長年飼ってやったのに、結局は仇で返すか・・・くそガキめ！者ども！族を始末しろ！」
パンサー「下がってて！」
祐介「面白い・・・」
パンサー「えっ？」
祐介「事実は小説より奇なり・・・か」
パンサー「喜多川くん!?」
祐介「そんなはずはないと・・・長い間、俺は自分の瞳を曇らせてきた・・・！人の真贋すら見抜けぬ節穴とは・・・まさに俺の眼だったか・・・！」
すると様子が変わり頭を抱えながらもだえる
祐介「う・・・ぐ・・・あぐっ・・・うあああっ・・・ア、アアアアッ!!」
祐介が倒れこみ、指先が地面と擦れ、皮が？け、地面に血がにじんでいく
そして顔を上げると同時に狐の仮面が現れ立ち上がる

祐介「よかろう・・・」
仮面に手をかけ
祐介「来たれよ、ゴエモン！」
叫ぶと同時に仮面を剥ぎ取る
すると怪盗服になり祐介のペルソナ・ゴエモンが後ろに現れ歌舞伎のポーズをし、歌舞伎の様な音を立てながら現れ
祐介も歌舞伎のポーズをする
祐介「絶景かな・・・まがい物とて、こうも並べば壮観至極・・・悪の花は栄えども・・・醜悪、俗悪は滅びる定め・・・！」
モナ「こりゃあ、凄いぞ！」
シャドウ斑「ふん・・・いきがりおって！何も知らずに死んでゆくがいいわ！出合え！出合えー！」
祐介「貴様を親と慕った子供たち・・・将来を預けた弟子たち・・・一体何人踏みにじって来た・・・？いくつの夢を金で売った!?俺は貴様を・・・絶対に許さない！」
ジョーカー「お手並み拝見だな」
祐介「望むところだ！」
シャドウの姿が変わりイッポンダタラ一体、コッパテング四体になった
イッポンダタラ「頭が高いぞ、侵入者ども！」
祐介「勉強させてもらったよ、班目。真贋を見抜くには・・・ときに冷徹さが要ることを。心おきなく貴様を見定めさせてもらう！俺の・・・ゴエモンと共にっ！」
ナビ「こいつらの弱点は・・・全員氷結！」
トゥルース「ゴエモンは氷結が使えるぞ！」
祐介「蹴散らせ！ゴエモン！」
フォルス「弾に氷結魔法付与・・・くらえ！」
トゥルース「ミヅハノメ！ダイアモンドダスト」
ジョーカー「ジャックフロスト！」
パキイイイイン
トゥルース「クロノス、ギガントマキア」

バリイイイン
敵を全員倒し、祐介がシャドウ班目に近付くが、疲労に負け膝を落とす
祐介「う・・・」
シャドウ斑「祐介、貴様はな、輝かしい未来をドブに捨てたんだ。貴様の絵描きへの道、あらゆる手を使って刈り取ってくれる・・・！」
祐介「班目ぇ・・・!!」
シャドウ斑「私に歯向かった事を、一生かけて悔いるがいい」
祐介「待て・・・ぇ！」
パンサー「喜多川くん！」
祐介が足を抑えながら言う
祐介「なんで動かないっ！」
パンサー「体力限界でしょ？無理されても足手まといだから！」
祐介「情けない・・・！」
トゥルース「そう思うなら今は休め、覚醒後にずっと動ける方が珍しい」
スカル「言うこと聞いとけって」
ひとまず入口の椅子に座らせる
双葉は蓮の後ろに隠れてる
トゥルース『流石に人見知りか』
パンサー「本当は、ずっと前から気づいてたんでしょ？」
祐介「俺は、そんなに朴念仁じゃないさ。数年前から妙な連中が出入りするようになったし盗作も、日常茶飯事だった。けどそんなの、認めたくないじゃないか。世話になった人が、そんな・・・！」
パンサー「どうして喜多川くんは、班目のとこを出て行かなかったの？」
祐介「『サユリ』を描いた人だし、それに、特別な恩義もある・・・」
スカル「育ててもらったからか？」
祐介「・・・俺には父がいない。母親が一人で育ててくれたらしいが、その母も、俺が三つの時に事故で死んだ。その時俺は、先生に拾われたんだ。母も生前、先生の世話になっていたらしい」

パンサー「らしい？」
祐介「母の事も、正直あまり覚えてない。だから先生を親と思って尽くしてきたつもりだったが・・・先生は変わってしまった・・・自分の原点である『サユリ』までも、あんな風に・・・！」
スカル「・・・色々、あったんだな」
祐介「お前達が盗作だのと言ってきた時・・・内心じゃ気づいていたんだ。だからこそ拒んでしまった・・・俺は逃げてたんだ・・・すまない」
ジョーカー「気にしなくていい」
祐介「・・・ああ。自分を誤魔化してきたことと向き合う、そのきっかけをくれて、感謝している」
スカル「真面目すぎんだよ、お前。そんなんだから行き詰まっちまうんだよ。俺なんかもっとテキトーだぜ？」
パンサー「ホントそう」
トゥルース「むしろテキトーすぎ」
ナビ「バカだもんな」
モナ「スカルの真似はオススメしないぜ」
スカル「皆否定しすぎ！」
ジョーカー「だが事実だ」
スカル「止めを刺すな・・・」
モナ「祐介はこれからどうするんだ？」
祐介「分からない・・・」
スカル「班目が変わっちまったもんは、もうしょうがねえ。けどよ・・・俺たちなら、心を変えられんだ。野郎の罪を、野郎自身に償わすことができる」
祐介「そういえば、『改心』がどうとか言ってたな」
スカル「聞いたことねえか？『心を盗む怪盗団』の噂・・・」
祐介「・・・!?まさか・・・!?」
フォルス「ところでさ、めっちゃ警戒されてるけどここにいて大丈夫k」
後ろからシャドウが湧いてきた

スカル「っと！やべえ！」
モナ「話は後だ！逃げるぞ!!」
祐介「・・・？俺、こんなもの着ていたか・・・？」
スカル「今更かよ・・・」
ナビ「てか早く逃げるぞ～！」
パンサー「走って！」
トゥルース「魔法障壁展開！」
ドガッ
シャドウ「なっ!?」
トゥルース「よっしゃ今のうちだー!!」
パレスから逃げ出した
ひとまず話をまとめる為に渋谷のファミレスへ
双葉は祐介から一番遠い左奥、そして手前に蓮、杏
右奥から優斗、なぜか優斗の股の間に座ってる優菜、手前に竜司、祐介
ちなみにモルガナは蓮のカバンの中
優菜「何でこうなる」
優斗「席がないから」
皆は祐介に鴨志田や双葉のことを話して丁度終わったところだった
祐介「・・・なるほど。それで、その体育教師は心が入れ替わったと・・・『心を盗む怪盗』・・・実在したとはな」
蓮「信じられないか？」
祐介「いや信じるさ・・・あんな世界を見た後だ。今さら常識に遠慮する気も無い。それでお前達は班目先生・・・いや、斑目を『改心』させるつもりって事か・・・・俺も加えてくれ、怪盗団に」
皆「!!」
祐介「もっと早く現実を見ていれば、こうはならなかったのかも知れない・・・画家としての未来を奪われた多くの門下生のためにも、俺が終わらせなければ。それが・・・曲がりなりにも親だった男への、せめてもの礼儀だ」

杏「・・・礼儀、か」
竜司「いいんじゃねえの。どうせ班目やんだしよ」
優菜「俺はいいと思うが」
優斗「異論はない」
モルガナ「じゃあ取引成立だな！」
杏「怪盗団の仲間が増えたね。よろしく、祐介！」
竜司「足、引っ張んなよ？」
祐介「善処しよう」
蓮「裸婦画は諦めろ」
祐介「あれはつまり、作戦だったわけか？・・・大胆だな、高巻さんは」
杏「私じゃないし！こいつらよ！」
竜司「仕方ねえだろ！祐介がヌードヌード言うからだよ！」
祐介「俺は諦めてないぞ」
優菜「いや諦めろ」
優斗「アレは言わなくていいのか？」
優菜「あーっと、祐介、スマホの中に眼のアイコンのアプリはあるか？」
祐介「アプリ？」
スマホを取り出し画面を見る
祐介「これの事か？こんなものをダウンロードした覚えはないんだが」
優菜「そ。これ使えばパレス行けるから、まあ一人で行くのは禁止な」
双葉「全会一致、だからな」
祐介「わかった」
杏「って、そういえば・・・現実の班目、どうなったかな。私と祐介、相当ヤバい状況だったけど・・・」
祐介「それなら、ここへ来る前に連絡を取った。俺は、高巻さん追いかけていたことになってる。それと、君らの説明通り、シャドウとの事は、本人は知らないようだ」

杏「あいつ・・・何て？」
祐介「女子高生一人捕まえられないのかと、警備会社に愚痴っていたよ。でも、怒りが収まらないようで、『全員告訴してやる』と言っていた」
優菜「いつものやつか・・・まあ、その前に改心させればいいだけだ」
祐介「動くとしても個展を終えてからだろう。期間中に醜聞が立つのは向こうが損だ」
杏「ヌードの件が済んだと思ったらこれか・・・！」
優菜「まあいつ行くかは、蓮に任せる」
蓮「分かった」
モルガナ「それじゃあ、いつでもいける様に準備しとけよ」
祐介「ところで、これはなんだ？」
竜司「あ？猫だけど」
祐介「喋ってるが？」
モルガナ「文句あるのか!?」
祐介「いや、そうじゃないが・・・」
竜司「なんで？」
杏「ちょっと人とテンポ違うよね」
モルガナ「このワガハイの描こうってのか？ちゃんと素材の良さを引き出せよ？」
祐介「ふむ・・・」
モルガナの方に祐介が手を伸ばす
モルガナ「気安く触んじゃ・・・」
モルガナの手前にあったボタンを押す
ピンポーンピンポーン・・・
祐介「『黒あんみつ』を注文しようと思ってな」
竜司「『黒猫』から連想したなコイツ・・・」
祐介「ああっ・・・！金を持ってきていなかった」
杏「やっぱ、この人へん・・・」
優菜「そのぐらいならオレが払ってやる」

祐介「かたじけない」
優斗「じゃあ俺もなんか頼もうかな」
優菜「お前は自分で払え」
みんなと別れ渋谷駅
優菜「ちょっとトイレ行ってくる。先帰ってて」
優斗「電車来るけどいいのか？」
優菜「乗れなかったら、足で帰る」
優斗「じゃあ母さんには言っとけばいいんだな？」
優菜「ああ」
分かれてトイレに行き
１０分ほどして出ると
ナイフの女子「あーっ！」
この瞬間、俺はパレスに行く前に会ったナイフの女子の声であると瞬時に理解し声が聞こえた方向と逆方向を向き逃げ出そうとする
この間０．４秒である
だがガシッっと掴まれる
ナイフの女子「あんた優菜でしょ？よくも逃げてくれたわね」
優菜「いえ、人違いだと思いますが」（裏声）
ナイフの女子「いや絶対優菜でしょ!?一緒に来て！」
グイッと引っ張られるが全く動かない
ナイフの女子「え？重・・・っ」
優菜「・・・分かった、付いてくよ。その代わりさっさと終わらそ」
ナイフの女子「じゃあついて来て」
近くの廃工場
優菜「こんなとこがまだ残ってたのか。で？また殺そうとするの？」
ナイフの女子「今度は助っ人を読んでおいたわ。もう謝っても許さないからね」
優菜「助っ人ね・・・ミイラ取りがミイラにならない事だな」
ナイフの女子「それどういう意味よ」
ヤンキー「おい、幸！いじめられたって本当か!?」

後ろからヤンキーが来ていた
優菜「え？」
幸「そうなのよ、お兄ちゃん！」
ナイフの女子は出石美幸（いずいしみゆき）というのだが・・・ちょっと待て
優菜「お兄ちゃん!?このヤンキーが!?」
幸「輝お兄ちゃん！早くコイツやっつけて！」
輝「うちの妹を傷つけた罪は重えぞ・・・!!」
優菜「一回落ち着けシスコン」
輝「誰がシスコンだ!!」
幸「お兄ちゃんはね、ここら辺の暴走族を束ねるリーダーなのよ！」
優菜「暴走族ねえ・・・バイクは？」
輝「全員で駐車場に止めてきたわっ！」
優菜「それは駐車ＯＫの場所なのか？」
輝「当たり前だろ」
優菜「お前ホントにヤンキーか？」
するとまた別のヤンキーが人を大勢連れてきた
ヤンキー「兄貴！全員連れてきました！」
輝「よし、よくやった！」
別のヤンキー「大兄貴のシスコンにも困ったもんだぜ・・・」
輝「おい、今なんつった？」
別のヤンキー「い、いや、何でもないです・・・」
集団の中の一人がいきなり苦しみだした
ヤンキー「お、おい・・・どうした!?」
苦しんでいるヤンキー「うううう・・・」
輝「胸を押さえてんのか？こいつ持病かなんかあるのか？」
ヤンキー「分からねえです！」
苦しんでいるヤンキー「うぐあああああっ!!!」
グルンッと黒目が上がり白目になる
そしてナイフを取り出し迫ってくる
優菜「ん？」

輝「おい！逃げろ！」
苦しんでいたヤンキー「あああああっ！」
ベキンッとナイフを折りかかと落としで気絶させる
優菜「精神暴走・・・運があるのかないのか・・・いや運は宇宙の彼方に消え去ってるか・・・まさかバレてるのか？」
輝「何してんだ？コイツ」
ヤンキー「コイツ確かお偉いさんの息子かなんかで逃げたくて入ったとか言ってましたからね。ストレスかなんかじゃないすか？」
優菜「今の目は精神暴走だな」
輝「精神暴走？」
幸「それって確か、電車とかで運転手がおかしくなって事故ったとかいう・・・」
優菜「それだよ・・・てかやるの？やらないの？」
輝「やるに決まってんだろうが！」
優菜「ならどうする？全員で来てもいいけど」
輝「女にリンチは男じゃねえ！」
優菜「一人ずつやってもリンチと変わらねえだろ」
結局一人ずつ倒してとうとう輝まで来た
輝「ったく・・・情けねえなぁ。でもまあ、俺もここまで強いとは思ってなかったけどな」
優菜「こっちは帰らないといけないんだよ。だから一発で終わらせる」
輝「それじゃあ俺は・・・」
ナイフを取り出す
輝「これでやってやる」
優菜「ナイフか・・・最初のあれ見てナイフは舐めてるだろ」
輝「舐めてねえよ。むしろ敬意だ」
優菜「一番慣れてるから・・・か。アイツにナイフ教えたのもあんただな」
輝「護身用としてだがな」
優菜「それじゃあ、やるぞ！」

パアン
突然の事だったから反応できなかった
頭を打たれた
輝じゃない、幸でもない、撃ったのはさっき倒したヤンキーの中の一人だった
銃のヤンキー「俺達が倒されるなんて・・・あ、ありえないんだよ！」
輝「バカやろーッ!!何やってんだ!!」
ヤンキー「兄貴！ここは逃げねえと・・・今の銃声で絶対通報されてますよ!!」
輝「チッ・・・お前らは逃げろ！幸は俺と逃げるぞ！」
ヤンキー「こいつの死体はどうすんスか!?」
優菜「誰が死体だって？」
銃のヤンキー「ヒッ・・・し、死んでない!?ば、化け物!!!」
優菜「お前か」
カオスの空間から銃を取り出しヤンキーの銃を撃つ
当たった反動で銃を手放す
銃のヤンキー「ギャアアア！撃たれたーッ!!」
輝「お前まで銃を・・・？」
優菜「面倒なことしやがって・・・仕方ねえな。カオス」
カオス「いいのか？」
幸「な、なんか出た！」
優菜「穴作れ」
グワンと穴ができる
優菜「捕まりたくなかったら入れ」
輝「ちょっと待ってくれ」
優菜「どうした？捕まりたいのか？」
輝「いや、俺達のバイクはどうなんだ？」
優菜「違法のとこに置いてねえなら大丈夫だろ」
輝「いや、見た目が暴走族丸出しだから持ってかれるかもしんねえ！」

優菜「はあ？仕方ねえな。カオス、ここにいる奴全員入ったら閉じて、俺はこいつらのバイク取り行く」
カオス「分かった」
優菜「場所はどこだ？」
輝「あ、ああ・・・この先の駐車場だ、見ればわかると思う」
優菜「よし」
シュンッ
輝「消えた!?」
カオス「さっさと入った方が身のためだぞ」
幸「と、とりあえず入ろ？」
そしてバイクを全て別のカオスの空間に入れ
アイツ等の空間に入る
輝「うわっ！出てきた!?」
優菜「全部回収したぞ、感謝しろよな」
輝「それは感謝している・・・ただ待ってる間に聞きたい事が出来てな、いいか？」
優菜「別にいいぞ」
輝「お前一体何者なんだ？」
優菜「それはな？守秘義務だ（適当）」
輝「守秘義務ってなんだ？」
優菜「絶対に話せない」
輝「・・・ならもう一つ頼みがある」
優菜「なんだ？」
輝「俺達を舎弟にしてくれないか？」
優菜「・・・お前達の中には女の下に着くのは嫌な奴もいるだろ」
輝「そん時は俺がどうにかする」
優菜「拒否権は？」
輝「ない」
優菜「・・・やったら、条件だ」
輝「なんだ？」
優菜「お前ら全員高校生だろ」

ヤンキーたちがギクッとなった
優菜「お前らこれから卒業までずっと学校行けよ」
ヤンキーたちがギャーギャー騒ぎ出した
優菜「・・・じゃあ俺に勝ったら、サボるの許すが？」
シーン・・・・
優菜「じゃあ、決まりだな」
輝「アドレス教えた方がいいか？」
優菜「ああ」
幸「どうしてこうなるわけ？」
帰ったらＳＮＳで皆が丁度話していた
竜司「告訴とかシャレになんねぇ」
蓮「面倒事は避けたい」
竜司「警察にチクられたら、学校にも連絡行くし」
優斗「今度こそ退学間違いなし・・・か」
杏「退学どころか逮捕だよね？不法侵入、名誉棄損・・・」
双葉「余罪もまだまだありそうだ」
竜司「ん？優菜は見てねえのか？」
優菜「ちょうど今帰ったぞ」
優斗「そういえば、優菜はいじめの件どうなったんだ？」
双葉「いじめ!?」
優菜「あんま、そういうこと言うな・・・まあ、今全部片づけた」
杏「暴力で？」
優菜「途中まで・・・多分明日で分かる・・・というか明日休みてー」
竜司「いやすんなよ・・・と、とにかく今回は絶対に失敗できねえって事だ」
杏「ここからが本番だね、みんなで頑張ろ！」
双葉「切り替え早えー」
ということで祐介＋謎戦力により戦力ＵＰ
そして寝た